秋田県文化財調査報告書第82集

内村遺跡発掘調査報告書

留県埋蔵文化財センタ

1981 · 3



内村遺跡は昭和54年県営ほ場整備に係るため昭和53年範囲確認調査を実施した 遺跡でありました。それが農政部の計画変更により、昭和55年度実施することに なり、その事前調査として発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、縄文時代中期末の竪穴住居跡31軒の他土城、また平安時代の土城などの他多くの遺物が発見されました。特に縄文時代中期末の堅穴住居跡は立派な複式炉をもち、埋襲の伴うもので、各住居跡でその当時使っていた土器がそのままの状態で発見された点が注目されます。この結果からより正確な土器の編年関係がつかむことができ、二時期の研究には欠くことのできない資料が得られたと考えられます。

また平安時代の遺物として緑釉陶器,和鏡などが発見され,これらの遺物は普通の集落跡などからは発見されないものです。その点から見ても注目されてよい遺跡と考えられますが残念ながら砂利層があって遺跡の立地条件が悪く,平安時代の遺構の痕跡を把握するには困難であったことがくやまれます。

以上のように内村遺跡の発掘調査は多くの成果を得て無事終了し、報告書として刊行できたことを皆様と共に喜びたいと思います。

最後に千畑村教育委員会はじめ発掘調査から報告書刊行までご協力いただいた 関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和56年3月

秋田県教育委員会 教育長 畠 山 芳 郎

目 次

厅		
例言		
第1章 は	はじめに	1
第1節	発掘調査に至るまで	1
第2節	調査の組織と構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2章 道	遺跡の立地と環境	3
第1節	立地と環境	3
第2節	歷史的環境	3
第3節	周辺遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
第3章 発	き掘調査の概要	5
第1節	遺跡の概観	5
1	し 遺跡の層序	5
2	2 遺構の分布	5
3	3 遺物の出土状況	5
第2節	节 調査の方法	6
第3節	ೄ 調査の経過⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯	6
第4章	調査の記録1	0
第1節	6 縄文時代の遺構と遺物······1	0
1	発見遺構と遺物1	0
	1)竪穴住居跡1	0
	2)複式炉7	3
2	2 その他の出土遺物・・・・・・・8	2
	1) 土器 土製品8	2
	2) 石器 石製品9	4
第2節	平安時代の遺構と遺物 10-	4
	1)竪穴住居跡 10-	4
	2) 土坑	8
	3)焼土遺構	0
	2)その他の遺構内出土遺物・・・・・・・・・・・・ 11-	0

	5)その他の遺構外出土遺物	118
第5章	まと	め	119
	1	縄文時代中期末葉の住居跡群について	119
	2	縄文時代中期末葉の土器について	119
	3	複式炉の軸線方向から見た住居跡の分布について	121
	4	出土石器について	122
	5	平安時代後半の土器群について	122

- 1. この報告書は、秋田県仙北郡千畑村千屋字内村45に所在する内村遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
- 2. 内村遺跡に関する諸発表等と、本報告書との記述に相違がある場合には本報告書の記述を正確なものとする。
- 3. 報告書の執筆は畠山憲司が担当した。
- 4. 報告書中の挿図のうち、平安時代の遺物は三嶋隆儀、縄文時代の石器、完形土器は桑原隆が主体となって作成した。
- 5. 土色の記載については「標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
- 6. 挿図は繩文時代の遺構については‰、平安時代の遺構は‰、土器は %、石器は一部を除いて%に縮尺して掲載した。
- 7. 和鏡の計測については、秋田県工業試験場 松本林太郎、児玉暹一 氏の手を煩わした。記して感謝したい。
- 8. 出土遺物のうち特に土器に関しては、遺物整理事務所文化課職員(富樫泰時、庄内昭男、柴田陽一郎、高橋忠彦)諸氏の教示を得た。
- 9. 遺構の実測に際しては,払田栅跡職員(船木義勝,竹村昭雄,高橋 晟,村田嘉一)諸氏の協力を得た。
- 10. 末尾に発見遺構配置図を付した。各遺構の記述を読む際、これを見開きのまま利用されたい。

第1章 はじめに

発掘調査に至るまで 第 1 節

仙北郡千畑村に所在する内村遺跡は、昭和37年の秋田県埋蔵文化財分布調査の際に登録され た、いわゆる周知の遺跡である。この地域が昭和54年度より実施される県営ほ場整備事業地域 内にはいるため、秋田県教育委員会が主体となって、昭和53年10月9日~14日、遺跡の性格及 び範囲を確認する調査を行った。その結果、破壊されている可能性が強いとされながらも、繩 文時代中期後葉、及び平安時代後葉の多数の遺物を発見した。

このため、秋田県教育委員会では、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存をはかり、今 後の資料に資するものとした。

調査の組織と構成 第2節

遺跡名

内村遺跡

遺跡所在地

秋田県仙北郡千畑村千屋字内村45

調查期間

昭和55年4月23日~6月24日

調查対象面積

 $2.000\,\mathrm{m}^2$

調査面積

 $2,400\,\mathrm{m}^2$

調査主体者

秋田県教育委員会

調查担当者

畠山憲司(秋田県教育庁文化課)

調查補佐員

佐藤和弘

調査補助員

桑原 隆, 三嶋隆儀

事務補助員

斎藤知子

調査協力機関

秋田県仙北平野土地改良課

千畑村教育委員会

発掘調査参加者 田村義美, 高橋与四郎, 佐藤虎之助, 佐藤喜三郎, 熊谷権太, 煙山昭蔵, 高橋恭之助, 加藤七之助, 佐藤政之助, 高橋修一郎, 今川芳雄, 須原文吉 佐藤周之助, 高橋勇, 今川三蔵, 今川藤三郎, 高橋源一, 斎藤慎三, 高橋 能雄、煙山仁市、佐藤秀雄、高橋軍平、藤井辰男、富樫金栄、加藤ツル、 高橋ミヤノ、高橋サク子、藤井ユヨ、佐藤フジヱ、佐藤トラヱ子、高橋イ ネ、高橋フサ子、細井美保子、新田咲子、高橋リツ、高橋テツヱ、高橋イ ヱ, 水戸カツ, 佐藤ナツ, 今川シデ, 坂本ミツヨ, 煙山ヒサ, 今川チヤ,

高橋ハツ Ш | 画機に 戸沢キ Ш 縣 井 Н

高橋津真子, 佐藤真智子, 庄司礼子, 柴田綾子, 小川恵子 山木凯

遺物整理協力者

杉原敬了,

児玉久子,

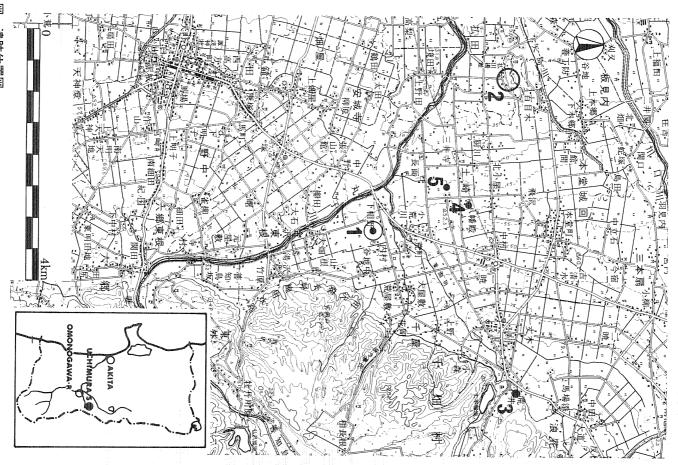
神店

-7-40

石黑紀子,

高橋邦子,

山崎節子,



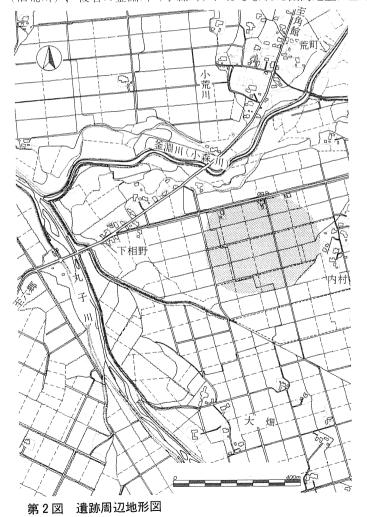
X 遺跡位置図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 立地と環境 (第1・2図, 図版1)

内村遺跡は横手盆地の北東部,国鉄奥羽本線大曲駅の東方約8.5kmに位置する。遺跡の東側には真昼獄(1,059.9m)を中心とする奥羽山脈が南北に連なり、北~西~南には肥沃で広大な仙北平野が広がる。

奥羽山脈に源を発する丸子川,真昼川等の中小河川は山脈西裾にいくつかの扇状地を形成している。遺跡はそのようにして形成された六郷,一丈木両扇状地の中間にあり,前者の丸子川(旧荒川),後者の釜淵川(小森川)にはさまれた微高地上に立地する。遺跡の標高は約50m

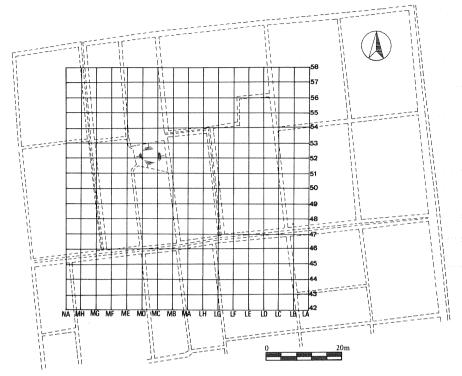


で、丸子川の現河水面との 比高は4~5mである。

第2節 歴史的環境

内村遺跡のある仙北平野 東部では、奥羽山脈から流 れ出た水が急に平野部に達 するため、良好な河成段丘 の発達は見られない。この ため、縄文時代から歴史時 代の遺跡の立地は大きく2 つに分けられる。1つは, 脊稜山脈西麓にわずかに張 り出したテラス状台地に立 地する遺跡群で, 主に繩文 時代前期~中期中葉までの もの。他の1つは、山脈に 近い扇状地末端部あるいは 沖積地微高地上に立地する 繩文時代中期最末葉~歷史 時代の遺跡群である。

内村遺跡は後者に属する。



第3図 ブリッド配置図

微高地であるため、かつては水がかりが悪く、水田にすることが困難で土地所有者もこれをあ きらめたという。しかし若者たちの集団である「消防団」が力まかせにこれを水田化したため この水田に「消防田」という俗名が付されるようになったという。

第3節 周辺遺跡

第1図1が内村遺跡。遺跡の東側にある奥羽山脈西裾の台地には、1図3の一丈木遺跡をはじめ、縄文時代中期の組石群を持つ雲穣野遺跡や、中期、晩期に属する外川原II、III遺跡などがある。一丈木遺跡は昭和40~49年に4次にわたる発掘調査が行われ前期~後期にわたる遺物と中期全般の竪穴住居跡が多数発見されている。扇状地末端に属する遺跡群は1図2の払田棚跡、4の中屋敷遺跡(縄文)、5の寺屋敷(縄文)などがあり、この他にも同様な立地で、多くの縄文時代後期~古代遺跡が分布しているようである。払田棚跡周辺には土師器、須恵器を出土する多くの古代の遺跡がある。

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

1 遺跡の層序

内村遺跡は丸子川と釜淵川との合流点内側の沖積微高地上に立地するため、氾濫原となったこともしばしばのようで、いわゆる砂利が非常に多い。しかし、ほ場整備事業による排水路の土層観察によると、この砂利層の分布が遺跡周辺均一ではなく、むしろ、地山は黄褐色のやや硬い砂質土や青灰色粘質土である場合が多く、砂利層のほとんどない個所も見られた。発掘調査した部分の地層は概略以下の通りである。

- 第1層 黒褐色耕作土(10~15cm)。
- 第2層 黒褐色砂礫土 (3~5 cm)。強い黒色土で非常に硬くしまっており上部に径3~5 cmの小礫があり、下部に縄文土器、土師器、須恵器の細片を多く含む。
- 第3層 暗褐色土(10~15cm)。遺物(縄文土器が主であるが、まれに平安時代のものも含む)炭化物を含む。
- 第4層 暗褐~黒褐色砂質土(15~20cm)。漸移層でまれに繩文土器,炭化物を含む。
- 第5層 地山土。地山土は地点により異なり明黄褐色砂質土であったり、黄褐色砂利層であったりする。

2 遺構の分布 (第4図)

今回の調査面積はわずか 2,000m 強にすぎず、遺跡としての面積はこれ以上に広がっていることは確実である。

発見した遺構は大きく2時期に分けられる。1つは縄文時代中期のもので、竪穴住居跡、炉跡、土塩など。他の1つは平安時代後期の竪穴住居跡、土塩、焼土遺構などである。

縄文時代の竪穴住居跡(炉跡)及び土塩は密接しており、いずれも強い関連を持っているものと考えられる。発掘調査した部分のみのこれら遺構群の分布状況を見ると、半径12~13mから半径40mの南東に広く半円の中にほとんどが入ってしまう。この小さな円の内側には遺構は少なく、この円上に径1~1.5m、深さ1m前後の袋状土塩が連なり、その外側に竪穴住居跡がめぐるように観取される。この遺構群が分布するところの地山は大部分が砂利、礫層である。

平安時代の遺構については、主に調査区中央から南東部分に集中していたが、工事途中の周辺の観察や、遺物の分布状況からすると、それほど濃密ではないにしてもおおよそ60,000㎡前後の面積を持つ遺跡であったことが考えられる。

3 遺物の出土状況

遺物はまず第2層下部の礫層中及びその下の第3層中から平安時代のもの繩文時代のものが 小破片となって出土した。本来は、もっと上部に存在したものが、後世の耕作等で攪乱され、 耕作土下に一緒に包含されたか、平安時代の遺構構築の際に繩文時代のものが掘り返され混じ り合ったかしたものであろう。繩文時代の遺物と平安時代の遺物を層位的に区別できる部分は 包含層が浅いせいもあり多くなかったが、調査区北東部と南東部では、繩文時代の遺物が細片 ながらもややまとまりを持って出土した。

平安時代の遺物で完形に近い土師器などはほとんど遺構に伴ったものだけである。

この他縄文時代では数軒の竪穴住居跡覆土中に多くの遺物が意識的に捨てられた状況で出土した。

第2節 調査の方法 (第3図)

発掘調査は $4m \times 4m$ のグリッド方式で実施した。調査区のほぼ中央に任意の基準点を設置し、ここから磁北方向での東西南北基線を求め4m間隔での杭打ちを行った。東西にはアルファベット 2 文字の組み合わせ、南北には2 桁の算用数字の組み合わせとし、各グリッドの名称は南東隅の交点のアルファベット、数字の組み合わせを用いた(MA50、LE46など)。

遺構の実測はグリッド杭のズレを手直ししながら、これを基準に、原則として縮尺分で行ったが、複式炉等場のものも多い。

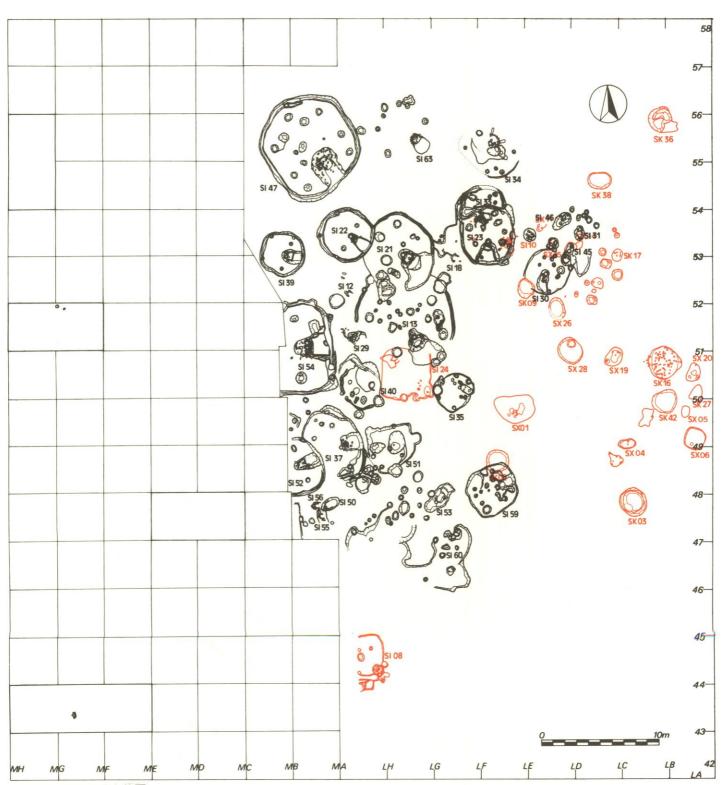
遺構の名称は竪穴住居跡=SI, 土坂=SK, 性格不明遺構=SXとし, これに発見順に通し番号を付した。SK01, SK02, SI03, SK04, SI05…という具合である。

第3節 調査の経過

発掘調査は4月23日から6月25日まで実施した。

4月18日、調査に先立ち、調査予定地の現況での測量とグリッド杭打ちを行い、4月22日、 発掘機材の搬入を行った。

4月23日、調査区外側に幅1mのトレンチを3ヵ所に入れ、地層と出土遺物の状況を観察した。24日、調査区中央部より表土剝ぎを開始。第II層の礫層上下から土師器片、須恵器片等が時折縄文土器を伴って出土しはじめ、26日にはLF46グリッドから緑釉陶器片(高台付杯)も出土した。4月30日頃よりII層中ないしIII層上面で土師器を伴う焼土遺構及び、土坑の上面が現われ始めた。5月19日頃までに焼土遺構、土坑は合わせて10基を超え、調査区南東隅では、平安時代の竪穴住居跡(SI08)、東部中央ではSK16の土坑も確認された。この間現場では雨の日が多く、排水のための水路を掘ったが、これが結果的には第III層以下の断面観察をも兼



第4図 発見遺構全体図

ねることとなった。このことはまた、平安時代の遺構群の下に縄文時代の遺物包含層や遺構が 存在することを知らしむることでもあった。

5月20日,調査区中央西部のII層を除去しきれいにしたところ,繩文時代中期後葉の竪穴住居跡数軒のプランを確認した(SI13,21,22,23など)。また,この面で小型の複式炉2基(SI12,18)が検出されたが、プラン等は把握できなかった。このようにして本遺跡は縄文時代中期後葉の集落跡でもあることが判然としたため、調査期間等を考慮して、この時期の遺構の検出に努めることに主眼を置くこととし、平安時代の遺構等を実測、写真撮影し、その下を掘り下げた。

6月4日までにセクションベルト等も全てはずし、竪穴住居跡の検出を進めたところ、複式 炉のみのものを含めると20軒以上の存在が予想された。これらは重複も甚だしく全て良く整った複式炉を持つものであったので、各方面と協議し、6月10日までの調査予定を2週間延長することとした。また、これと併せて、秋田県払田棚跡調査事務所にも実測方の応援を仰ぐこととした。

6月に入ってからは遺構の検出、写真撮影、実測を同時に並行して行なう毎日となった。23日までに、縄文時代の竪穴住居跡15軒の他、複式炉のみのもの14基、その他の炉2基、土塩などを検出した。土塩は調査区内だけでもさらに10基前後の存在が予想されたが、期間がなく調査できなかった。

6月24日までに検出した遺構の実測,写真撮影を全て完了し,同27日,プレハブの解体,機材,遺物の運搬をして全ての作業を終了し,未発掘部分の多い遺跡への未練と,予備調査(範囲確認調査)の大切さを痛感しつつ遺跡を去った。

第4章 調査の記録

今回の内村遺跡発掘調査で発見した遺構は大きく分けて二時期ある。1つは繩文時代中期に 属するもので、他の1つは平安時代のものである。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の発見遺構は中期末葉に属する竪穴住居跡15軒、炉跡16基、土塩4基である。このうち複式炉は基本的には1つの住居跡に付随するものと考え、竪穴住居跡に含めるのが妥当と考え、そのように記述した。

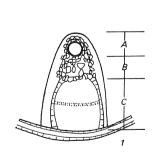
1 発見遺構と遺物

1) 竪穴住居跡

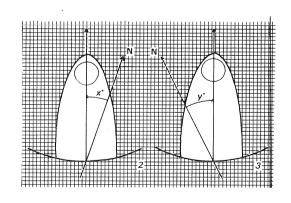
おおよそのプランが確認できた竪穴住居跡は15軒である。これらは全て同時に存在したものではなく、互いに重複しているものもある。平面形は円形、隅丸方形、不整円形で、全て複式炉を有する。

複式炉の説明の場合、その各部の名称が繁雑にならないよう、便宜的に第 5 図 1 のように呼称することにした。

プランの確認できた複式炉は全てC部外端が住居跡壁に接している。このことから炉の軸線方向を求める場合、第 5 図 2 \cdot 3 のようにした。つまり炉の長軸中心線と磁北とのなす角度をこれにあてている。これが真北をさす場合は 0 。 真南をさす場合は 180 。 で、矢印の方向がN \rightarrow W \rightarrow S の場合(2)は N \times 。 W、N \rightarrow E \rightarrow S の場合(3)は N \times 。 E である。



第5図 複式炉模式図

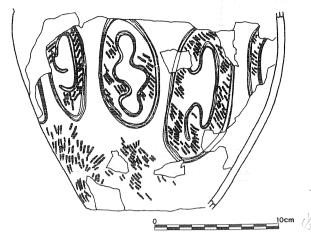


S I 12 住居跡 (第87, 6, 7 図, 図版 4)

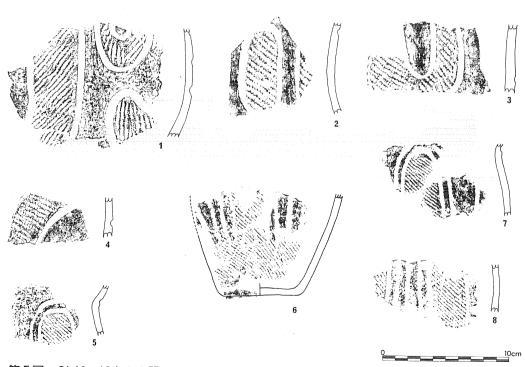
〔位置〕 住居跡群中央SI13の西側に複式炉のみが確認された。砂利層を基盤にする。

【炉】 小型の複式炉。A部の埋設 土器の周囲の石は抜き取られたもの か、無かったものか判然としない。 C部は平らによくしめて貼られた部 分の存在によりおおよそのプランが 判った。炉は全体に他の炉に比べ浅 く、後世の耕作等で上部は削平され たものと思われる。軸線方向はN61. 5°W。

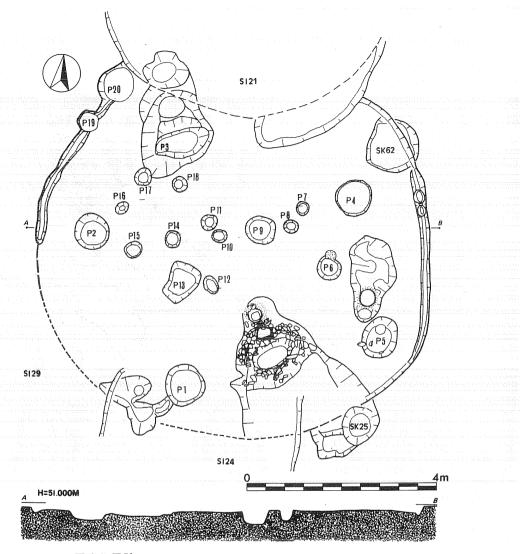
〔炉埋設土器〕 頸部のわずかにく びれる深鉢。頸部より上と底部を欠



第6図 SI 12炉埋設土器



第7図 SI 12·18出土土器



第8図 SI 13竪穴住居跡

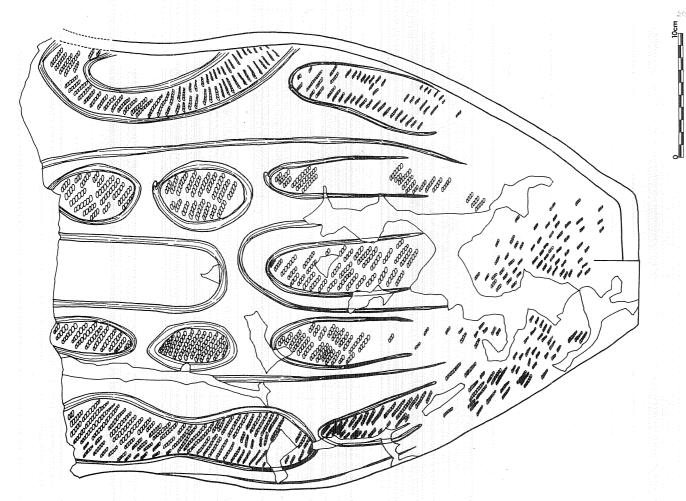
く。楕円形文やC字状文による磨消縄文で、文様単位は7~8。R-Lの単節斜縄文が主体だが、全体の約¼ほどにはR-L-Rの複節が施されている。

[出土遺物] 第7図1~4は炉A部にあった土器。

S I 13 竪穴住居跡 (第8, 9, 10, 11, 81図, 図版4)

[位置] 住居跡群中央やや内側で発見された。本遺跡の中では大型のものに属する。

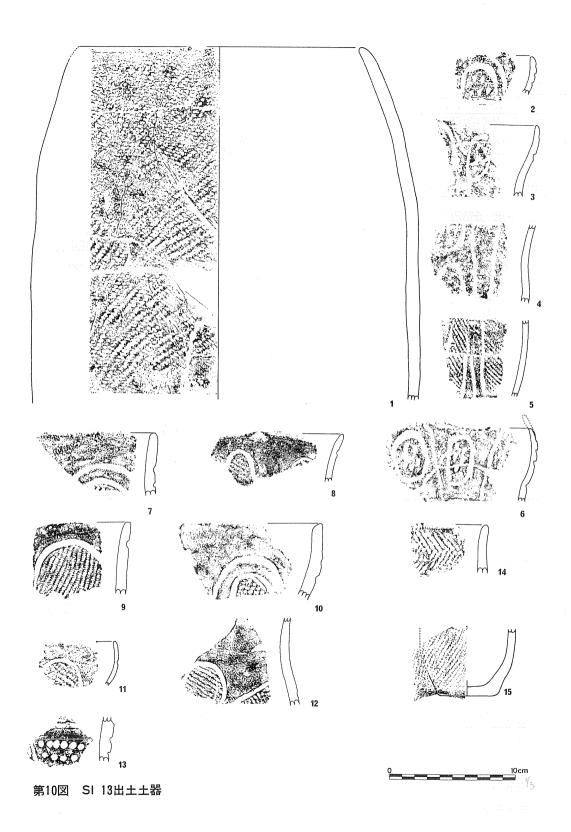
[重複など] 北部でSI21によって切られ、南東部でSI29と重複し、南部で、平安時代の 竪穴住居跡SI24に切られている。

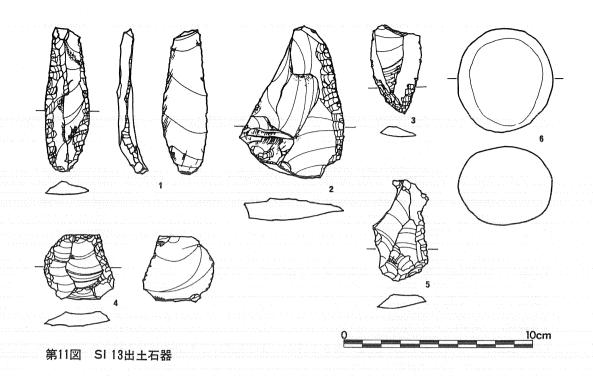


第9図 SI 13炉埋設土器

[平面形] 直径 8.2~ 8.6mの円形。

この部分では高さ10~15cmを測り, 垂直に近く 明確な壁は東辺と北西辺のみ。 [壁・床面]





立ち上る。床面はゆるい凹凸があるが、厚さ2~3cmの貼り床で堅く締まっており、中央部から四方に広汎に焼けている。

【**柱穴**】 総数20本の柱穴があるが、 P_1 、 P_2 、 P_4 、 P_5 のように径70cm、深さ50cm前後のものと、 $P_7 \sim P_8$ のような径30cm、深さ30cm前後のものがある。 $P_1 \sim P_5$ の5本が主柱穴かと思われるが、 P_3 は土址と重複している可能性もあり、はっきりしない。

【壁溝】 東辺と北西辺で認められる。幅15~20cm, 深さ5~10cm。

【炉】 逆V字形をなす複式炉。A部の埋設された土器の周囲の石は若干抜き取られた可能性がある。B部のA部寄り,石組斜面にも土器が斜めに埋設されている。B部の中央底部には石組がないが,A部同様,非常によく焼けている。C部は攪乱によりはっきりしないが,わずかに貼り床がある。軸線方向はN35°W。

〔その他〕 SI21やSI29と重なり合う部分には地山土に似た黄褐色土が厚く堆積しており、 プランの確認や重複関係をそれほど明確にし得なかった。

【炉埋設土器】 2つある埋設土器のうち第10図1がA部に、第9図がB部斜面のものである。10図1は口縁の内向する深鉢。胴部下半を欠いている。全面に斜行縄文が施されているが、一部縄文の施されていない部分がある。9図は頸部のくびれる深鉢で、わずかに上半を欠く。残存高50cm。

磨消縄文による楕円形文、C字状文などを1~3個組み合わせて6つの区画を作り、それぞれの間を沈線で区切る。この区画のための沈線は2本づつそれぞれ連続する可能性があり、この場合、上部で閉じられる区画と開いている区画が交互する形になる。

〔出土遺物〕 第10, 11, 96図 4 ~ 6, 97図 16

第10図2~6は口縁のそれほど内向しないキャリパー形の小型深鉢。

ゆるい波状口縁をなす。縦位の沈線に囲まれた2段の楕円形文の中には上に竹管による刺突文下に縄文が施される。7~11は平縁の深鉢。同様の磨消縄文である。7は朱塗。13は沈線間に3段以上の刺突列がある。14は異なる原体による羽状縄文。第96図4~6は本住居跡出土の橋状把手。第97図16は剣状土製品。

S I 21 竪穴住居跡 (第12, 13, 14, 15, 16, 81図, 図版 5)

[位置] 住居跡群中央北部,砂利層を掘って構築されている。

「重複など」 南部でSI13を切り、西部でSI22に切られている。

「平面形」 直径約6mの円形

【壁、床面】 東〜北辺で25〜30cmの高さを持ち、ほぼ垂直に立ち上る。SI13、SI22との重複部分で不明。床面は南西部を除き平担で黄褐色粘質土を厚さ3〜5cmに貼っており、堅く締まっている。

【柱穴】 柱穴は床面上では8本あるが、P₂、P₁、P₃、P₄、P₅の5本が主柱穴かもしれない。 これらは深さ35~50cmで、中には柱アタリかと思われる埋土の状況を呈するものもある。これ によれば柱は径15~20cmで柱アタリ部分を除いて柱掘り方内にも貼り床がある。

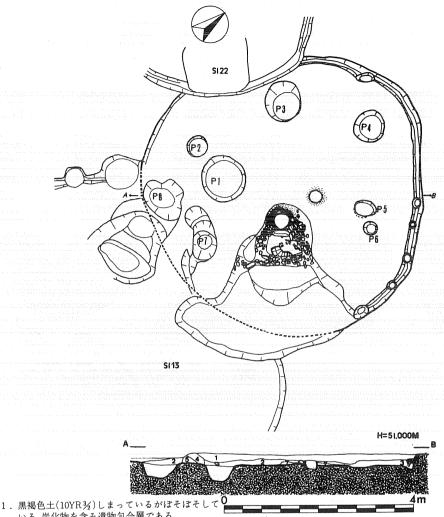
【壁溝】 北~東辺にかけてきれいな壁溝がある。上幅20cm, 深さ10~15cmで断面U字形をなし、ところどころに壁柱穴らしい落ち込みがある。

【炉】 平面形は裾の広がる逆 V 字形。 A 部には最大径42cmの深鉢形土器胴部を埋設している。 B 部の中央部には石組みがないが内面が A 部同様よく焼けている。 A 部と B 部との境には比較的大きな河原石を用いている。 C 部は当時になされたと思われる攪乱が激しく,端を明確になし得なかった。軸線方向は N 50° W。

【その他】 複式炉の北に焼土を伴うもう1つの埋設土器がある。断面図でわかるとおりその上部はSI21の床面より上であり、SI21の後に他の住居跡などが存在した可能性があるが、発掘の段階では捉え得なかった。

【炉埋設土器】 第13図 1 がこれで、深鉢の胴部。最大径は42cmを測る。磨消繩文によるC字 状文、L字状文などを横位に連続させる。胴部下半にも一段の文様帯を持つ。 丁寧な作りの土器である。

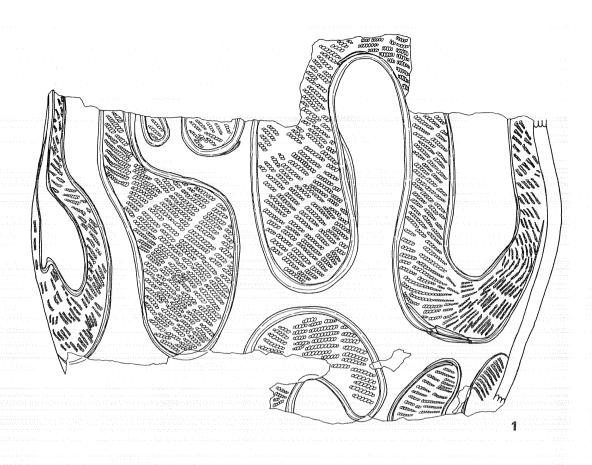
[出土遺物] 第13図 2, 14, 15, 16図。13図 2 は頸部の強くすぼむ深鉢。頸部にドーナツ状

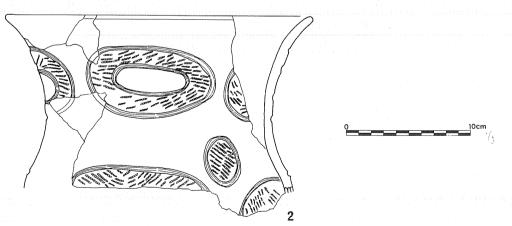


- いる。炭化物を含み遺物包合層である。 2.暗褐色土(7.5YR¾)+にぶい黄橙色土(7.5YR¾)非常に硬く炭化物を含み遺物も弱干含む。礫を多く含む。
- 3. 黒褐色土(10YR%) 2層に比べて軟かい。 2層は少なく炭化物遺物を含む。ボソボソである。
- 4. 黒褐色土(10YR%)程んど礫を含まずサラサラしている。非常に硬く地山に続いている。
- 5. 褐色土(10YR%)地山層と非常によく似ている。
- 6. 黒褐土(10YR%)軟かくサラサラし、鉄分を含んでいる。
- 7. 褐色土(10YR¼)硬い。炭化物は、程んどない。

第12図 SI 21竪穴住居跡

の楕円形文を横位に配し、その真下も同様の施文で、これが1単位と思われる。この文様単位は5つであろう。14図3は複式炉北東の炉に使用されていた土器。補修孔がある。4.5はキャリパー形に近い深鉢。4は波状口縁、5は朱塗りである。15図12~14は同一の個体で平縁。沈線の中には縄文を、磨消部に刺突文を施している。



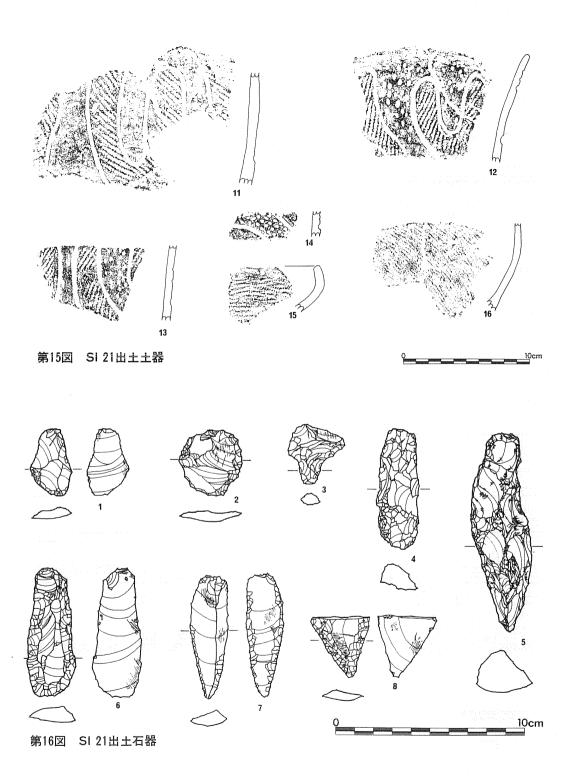


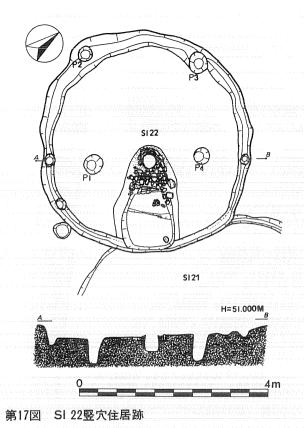
第13図 SI 21炉埋設土器, 出土土器

S | 22 竪穴住居跡 (第17, 18, 19, 20, 82図, 図版 5, 6)

[位置] 住居跡群北西部にある最も整った中型の竪穴住居跡。砂利層を掘り込んでいる。

- 19





〔重複など〕 SI21を南東部で 切っている。

【平面形】 径4.5~4.7mの円形。 【壁、床面】 壁は20~30cmの高さを持ち、垂直に立ち上る。床面はほぼ全面が、厚さ2~5mの貼り床でよくしめられているが、北西部には一部これがない部分もある。 【柱穴】 床面での柱穴は4本でこれが主柱穴。深さは約50cm。

【壁溝】 上幅20~30cm, 深さ15 cmの壁溝がめぐり, 壁柱穴がある。 【炉】 平面形逆U字形の整った 複式炉。 B部は全体が石組みで, A部同様, よく焼けている。 C部 底面は床面よりもよくたたきしめられた貼り床。住居跡壁から B部 に向かい, ゆるく下降する。 C部端 に凹石がある。軸線方向N53°W。

【その他】 SI21を切っているので、これにSI13を加えた3つの住居跡の新旧関係は(古) SI13→SI21→SI22(新)となる。これは埋設土器によっても肯首されるところである。 【炉埋設土器】 第18図の1。頸部のほとんどすぼまない深鉢。頸部上半と胴下半を欠く。上部は波頭状、下部は三叉状に開く、縦に長い磨消縄文を5回くり返している。沈線内の施文はR-L-Rの複節縄文。

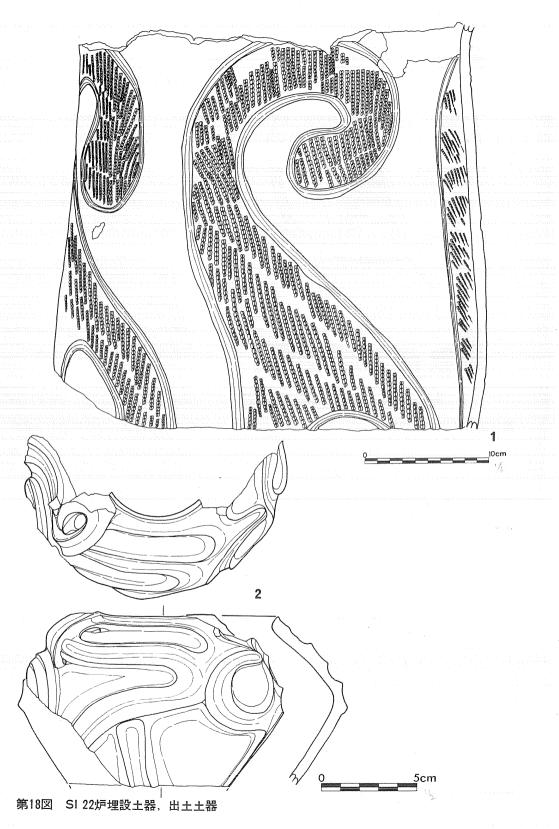
【出土遺物】 18図 2, 19図, 20図 1 ~ 4。18図 2 は住居跡西部床面直上出土の土器で算盤玉形。粘土紐貼付後の丁寧なみがきにより、流麗な曲線を描く。口縁部に近く、粘土紐を捻ったような把手が付く。全面朱塗り。19図 5 は口縁下に円形の凹みがある。 6 は粘土紐貼付による隆となっている。

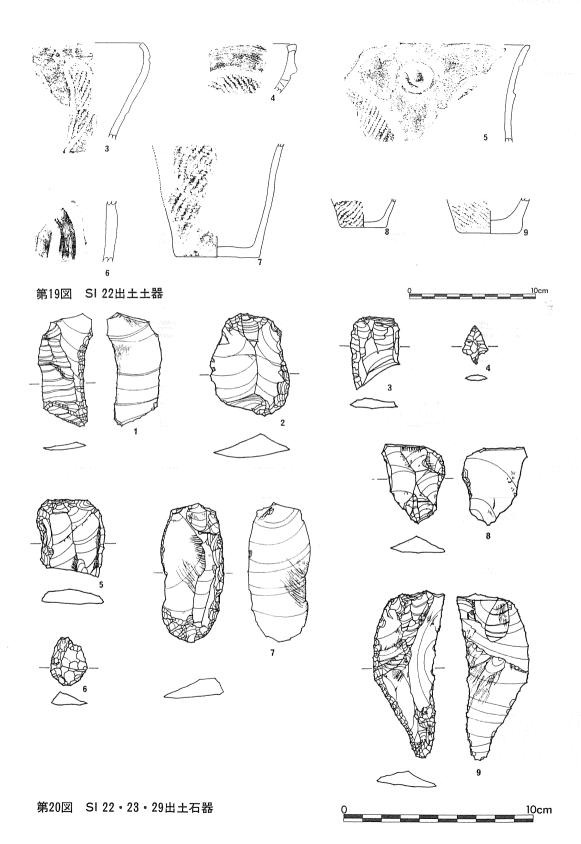
S | 23 竪穴住居跡 (第21·22·23·80図, 図版7)

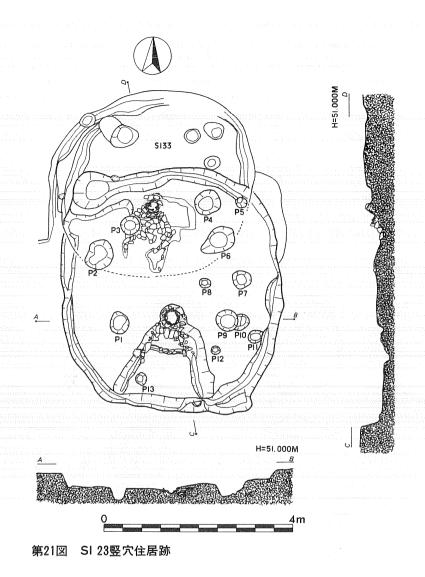
〔位置〕 調査区北部内側にある。砂利層と砂質土の硬い地山を深く掘り込んでいる。

【重複など】 SI33と重複するがSI23の掘り込みが深いため、プランがわかる。

[平面形] 長軸5.1m×短軸4.7mの隅丸長方形。







〔壁,床面〕

壁,南辺は深さ 約40cm,西辺で 30cm,東辺〜北 辺で20cmあり, ほぼ垂直に立ち 上がる。床面は 平担で厚さ3〜 5 cmの貼り床, よくしめられて いる。

【柱穴】 床面 上の柱穴は12本, うちP₁, P₃, P₆ P₉が主柱穴で, 深さ30cm前後で ある。

【壁溝】 北東 と北西の一部を 除いてほぼ全問 に壁溝がある。 上幅20cm前後で 深さは5~10cm。 【炉】 南辺に 取り付く。裾の

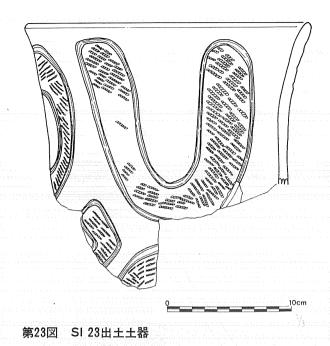
広がる逆 V字形で、A、B部ともよく焼けている。B部の中央部には石組みがない。B部と C部の境は直線的に並べ区画している。C部の底面は粘質土の貼り床でかたくしめられ両辺には浅い溝がある。軸線方向は N 1 $^{\circ}$ W 。

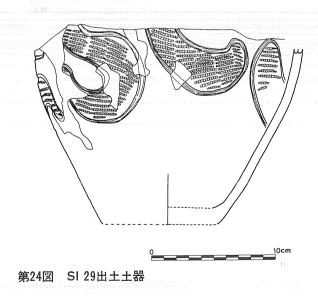
【その他】 本住居跡の上には平安時代の竪穴住居跡(SI10)があり、そのカマドが発見されている。

〔炉埋設土器〕 第22図 9 がこれである。胴部下半は急にすぼまり底部に至る。

【出土遺物】 23図, 22図1~14, 24図。23図は床面から出土した。頸部にはC字状文, 波頭

- 25 -





状文などが4つ並び一周する。 22図1,2,8は磨消縄文の沈線区画の外をさらに1条の沈線 がめぐる。

S I 29 住居跡 (24·86図, 図版 6)

【位置】 住居跡群中央部, S I13とSI54の中間で複式炉の み確認した。

「炉」 小型の複式炉。 A部の半分は埋設土器も石囲いもなくなっている。抜き取られた可能性がある。 B部は他の炉に比べ小さく, A部との境をなす部分には長径90cmほどの偏平で大きな河原石を用いている。 C部はよくたたきしめられ平担であった。軸線方向は N 68,5° W。

【炉埋設土器】 頸部がゆるく くびれる深鉢。胴頸部と底部を 欠く。文様はC字状文などの磨 消繩文で、2段の文様帯があっ たと思われる。胴部下半も無文。 S I 30 竪穴住居跡 (第25・ 26・83図、図版8)

【位置】 住居跡群北東端内側 にある。北西部は砂利層,他は 黄褐色砂質土の上に構築されて

いる。非常に浅く、よく締まった床の存在で住居跡と確認したものである。

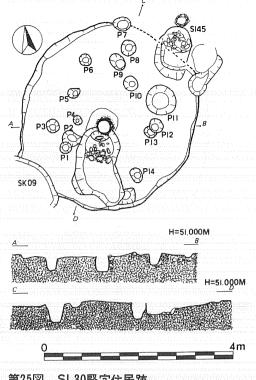
[重複など] 北東部でSI45複式炉と重複し南西端を平安時代の土城(SK09)によって欠く。 **[平面形]** 径3.7~4.0の円形

[壁,床面] 明確な壁は北西部のみ で、高さ3~5cm。床面は北西部にわ ずかに貼り床があり、他は地山土をそ のままたたきしめたような状況。

「柱穴」 径20~30cmの柱穴14本ある が、深さは10~40cmと一様でなく、切 り合いのあるものもある。深さ配置等 からPa, Pa, P 12(深さ30~40cm)の 3 本が主柱穴であろう。

「壁溝」 北西部及び東部の一部でそ れらしい様子もあったが、明確でなか った。

「炉」 壁への取り付き方に若干疑問 とある複式炉である。(この部分の壁 はもっと内側に入るものかもしれない)。 B、C部は深く掘り込まれている。 軸線方向 N 25.5° E



第25図 SI 30竪穴住居跡

[炉埋設土器] 第26図1で胴部下半 が膨らむ深鉢。胴部上半と下半を欠く。縄文は縦位回転施文。

[出土遺物] 26図2~6。6は櫛状工具による施文。

S 131 住居跡 (第86, ·27·28図, 図版8)

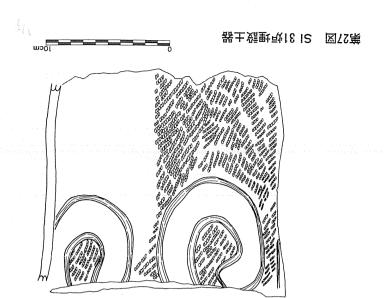
[位置] 住居跡群北東端部で複式炉のみ発見された。SI46炉とSI45炉の中間にあり、両 者よりも若干レベルが高い。

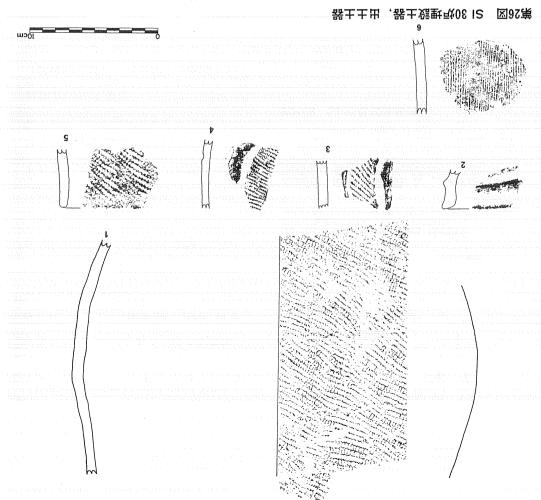
「炉」 長さ2.25m, 幅0.85mの逆U字形を呈する小型の複式炉。A部には2つの異なった土 器を二重に埋設している。B部とC部の境は明瞭さを欠き,石が散乱していた。破壊された可 能性がある。

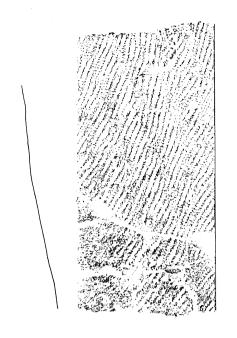
【その他】 複式炉の周囲はわずかにたたきしめられた痕跡があったが、住居跡のプランの確 認はできなかった。

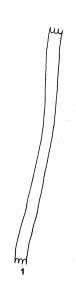
【炉埋設土器】 28図1の土器と27図の土器が二重に埋設されている。28図は胴部の膨らみの 少ない深鉢。上半と下半を欠く。磨消繩文による波頭状文が5回くり返される。

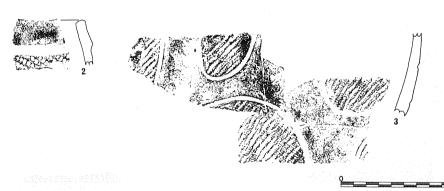
【出土遺物】 28図2,3。3は複式炉A部にあった土器。2は貼り付けた粘土紐の下に沈線 を入れている。











第28図 SI 31炉埋設土器, 出土土器 (2)

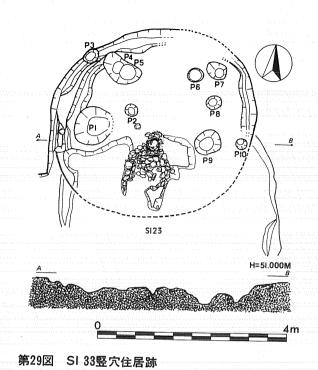
S I 33 竪穴住居跡 (第29·30·83図, 図版 9)

〔位置〕 住居跡群北部中央にある。

〔重複など〕 SI23の北側部分に重なっており、SI23よりも新しい。

[平面形] 径約4mの円形。

【壁、床面】 床面のレベルが高く、壁は確認できなかった。床面の北半分は地山砂利層の上で、部分的に若干の貼り床があり、南半はSI23の埋土の上に厚さ3~5cmの粘質土による貼



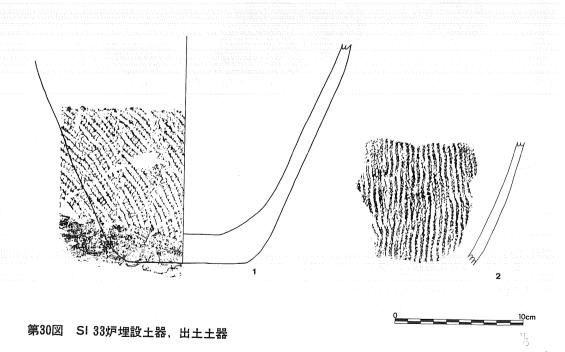
り床がある。平坦である。

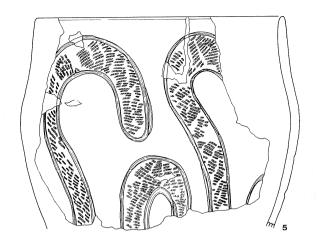
〔柱穴〕 10本の柱穴があり、深 さ25~35cmのP₁、P₄、P₆(P₇か) P₉の4本が主柱穴と思われる。

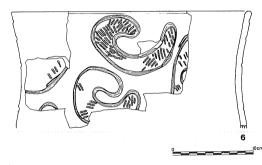
〔壁溝〕 幅20cm, 深さ10~15cm の壁溝がめぐる。北東辺は不明で 西辺には2条めぐる。

「炉」 A部、B部ともによく焼けている。B部は中央底面までもきれいな石組み。C部は壁に向かいゆるくあがり、かたい貼り床である。C部の端は不明。軸線方向はN10.5°E。

〔その他〕 西辺に壁溝が2条あるので、SI33とほぼ同位置にも







第32図 SI 34出土土器(2)

う1つの住居跡があった可能性が ある。

【炉埋設土器と出土遺物】 30図 1 が炉埋設土器,深鉢胴部下半で 縦位の回転施文。2 は埋土中の遺 物。撚糸文である。

S | 34 住居跡 (31~34, 82図 図版 9)

【位置】 住居跡群北端で複式炉 のみを確認。砂利層の上にある。

【炉】 第82図ではA部, 埋設土器の周囲の石が少ないが, 調査の際, この上部の石との区別がつけにくかったことが理由で, ほとんどをとばしてしまった。従って本来はきちんとした囲石があったものである。B部は中央部に石組みがなく, C部との境には石を配している。C部は住居壁に向かい,

ゆるく登り、両辺には長さ1mを超す大きな河原石を用いている。軸線方向はN132°W。

【炉埋設土器】 31図 1 が炉埋設土器で、直下側に同 2 があった。 2 は胴部下半でわずかにすぼまりがある。

【出土遺物】 31図 3, 4, 32, 33, 34図 1~4。32図 5 は胴部上半に最大径がある。33図 7, 8 は同一個体。胴部上半で大きく膨らむ。全体として磨消縄文は C字状文, 楕円形文などの組み合わせである。

S I 35 竪穴住居跡 (第35·36·37·86図, 図版10)

〔位置〕 住居跡群中央内側にある。

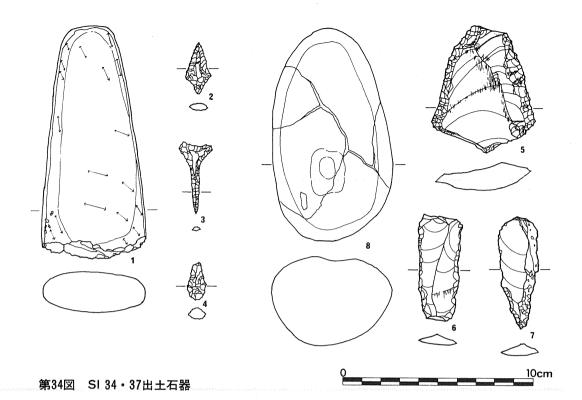
[重複など] 南辺で土城を切っている。

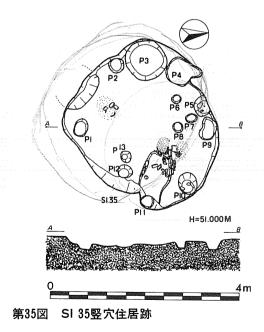
[平面形] 径2.8~3.0mの不整円形。小型である。

〔壁,床面〕 南~東辺にかけては壁が明瞭で高さ10cm~15cm。床面は貼り床がほんの─部しか認められず,全体にゆるく波打っている。

[柱穴] 10本の柱穴があるが、いずれも深さ15~20cmと浅い。主柱穴は不明。P₃、P₄は柱穴





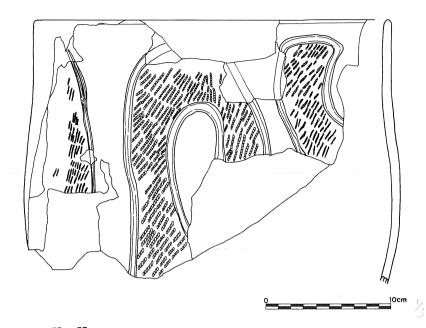


ではなく,付属施設か他の土城かもしれない。

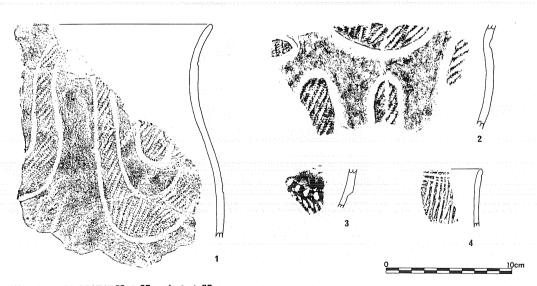
【炉】 A部の埋設土器は西側半分がない。B部の石組みも整然としていない。 C部底面はかたくしめられている。軸線 方向はN75.5°W。

【その他】 複式炉の他にもj1カ所, 土器を埋設した炉らしい遺構があるので 2つの住居跡の重複かもしれない。この 場合,南側の住居跡の主柱穴は P_1 , P_2 P_6 , P_{12} , あたりであろう。

【炉埋設土器】 第36図は複式炉埋設土器。胴部上半がわずかに膨らむ深鉢で上半約%しか残存しない。磨消繩文の縦に



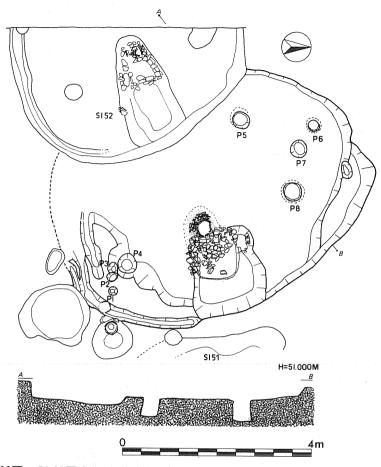
第36図 SI 35炉埋設土器



第37図 SI 35炉埋設土器, 出土土器

長い文様。

[出土遺物] 37図1は住居跡南部の焼土中出土。平縁で頸部のくびれる深鉢。3は磨消部が厚く、薄い縄文部との斜部分に刺突文を施している。4は小型薄手の深鉢で撚紋。



第38図 SI 37竪穴住居跡

S I 37 竪穴住 居跡 (第38・39 40・82図,図版11) 〔位置〕 住居跡 群南西部中央にあ

る。

〔重複など〕 南 西部をSI52によって切られ、南東 部でSI58炉と重 複する。SI58と の前後関係は不明 である。

〔平面形〕 長径 6.5m,短径5.3m 前後の楕円形か。

【壁、床面】 壁は南~南西辺を除いて確認できた。 高さ15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる部分と、ややゆる

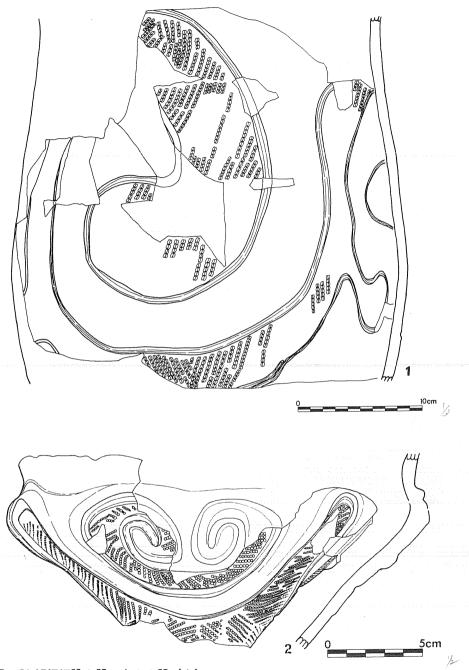
やかなところがある。床面は硬くしめられているが、南部ではしまりが悪い。

〔柱穴〕 計8本確認したが、深さ $40\sim45$ cmの P_4 、 P_5 、 P_8 が主柱穴。他は $15\sim25$ cmと浅い。主柱穴は4本と考えられるが、他の1本は不明。

【壁溝】 南東部のみで確認。幅20~25cm, 深さ10~15cmを計る。

【炉】 A部の焼け方は著しいものがある。B部は底面までも石組みがびっしりある。B部の横に小さな複式炉様のものが見えるが、性格は不明。C部は深く、底面が硬く締まっている。B部との境には小さな段がある。軸線方向はN112°W。

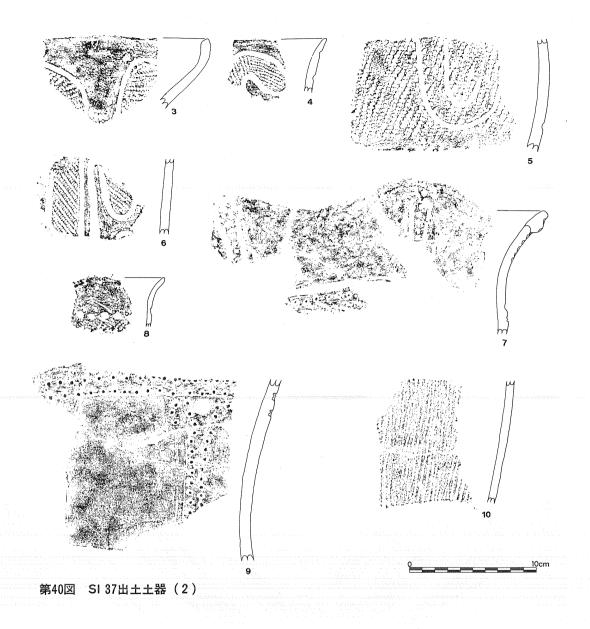
【その他】 壁溝とした部分の内側床面は他の部分より若干高く、あるいはこれよりも内側に壁があり、もう1つの住居跡が存在した可能性がある。また南辺が明瞭でないのは、SI50により切られた結果かもしれない。



第39図 SI 37炉埋設土器,出土土器(1)

【炉埋設土器】 39図 1 がこれである。非常に強く焼け、横に倒れた状況で出土したため、器面が磨滅している。大きく複雑に絡み合う磨消縄文である。

[出土遺物] 39図2,40図。39図2は複式炉の南西側床面に埋まるような形で出土した。頸



部が直立し、強く張る肩部から底部に向かい急にすぼまる。胴部には粘土紐貼付けによる隆帯で、大きく上下する波状文を描き、その3つの谷部にハート形と錨形を組み合わせた文様を施している。40図5は磨消部が見えない。7は波状口縁をなし、波頂部下に瘤を付け、この下に懸重文風の沈線と刺突文を施している。9は口縁近くに2列の刺突文を施し、その一部から直交する2列の刺突文が下がる。この交点には指頭による円形の押圧がある。7、9の刺突はともに竹管文で、刺突列の場合、あらかじめ浅い沈線で下描きしたあとが見える。

S I 39 竪穴住居跡 (41~44·86図,図版11.12)

【位置】 住居跡群北西部、地山砂利層 を掘り込んで構築している。

〔重複など〕 特にないが、中央部を新 しい水路で切られている。

[平面形] 径3.8mの円形。

【壁,床面】 壁はしっかりしており、 高さ20cm,垂直に立ち上る。床面は平坦 であるが砂利層上にあるにも係らず明ら かな貼り床はなかった。

【柱穴】 4本ありこれが主柱穴。深さ25~30cmを測る。

【**壁溝**】 幅15~30cm, 深さ5~10cmで 全周する。壁柱穴は明瞭でない。

〔炉〕 A,B部ともよく焼けている。

特にB部の底面は焼けて赤変し硬くなっ

ている。B部とC部との境はわずかながら段がある。軸線方向はN79.5°W。

〔炉埋設土器〕 42図1がそれである。胴部上半と下半を欠く。繩文は縦位の回転施文。

【その他】 住居跡検出後の覆土除去中、複式炉上部に図版8のような集石があった。この段階では集石上面に焼けた痕跡はなく炉とは考えられなかった。住居廃絶後、炉部分にだけ石を集めたものであろうか。

【出土遺物】 42図 2, 43, 44図 1。42図 2 はP4の側の床面上から出土。胴中央部の大きく膨らむ深鉢。頸部に 1 条づつの刺突列と沈線が横走し、その下には R一 L — (R+R)の複節の縄文が縦位に回転施文される。刺突列の一部には 2 段以上の刺突の付く部分もある。

S I 40 竪穴住居跡 (第45·46·47·84図, 図版13)

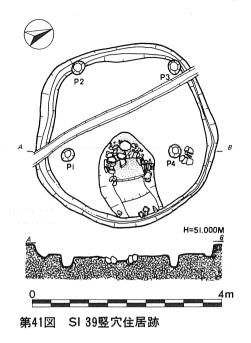
[位置] 住居跡群中央, S I 13, 54, 29などに隣接する。

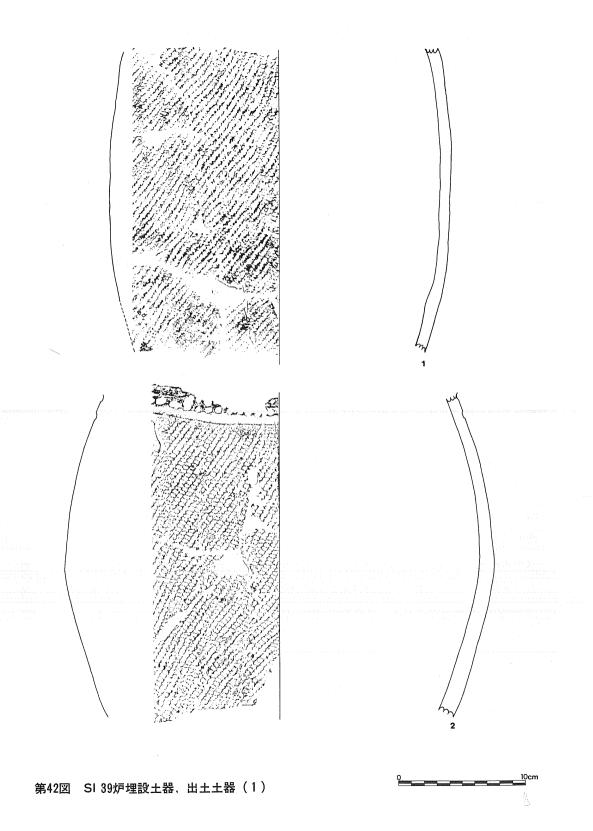
〔重複など〕 東部を平安時代の竪穴住居跡SI24によって切られている。

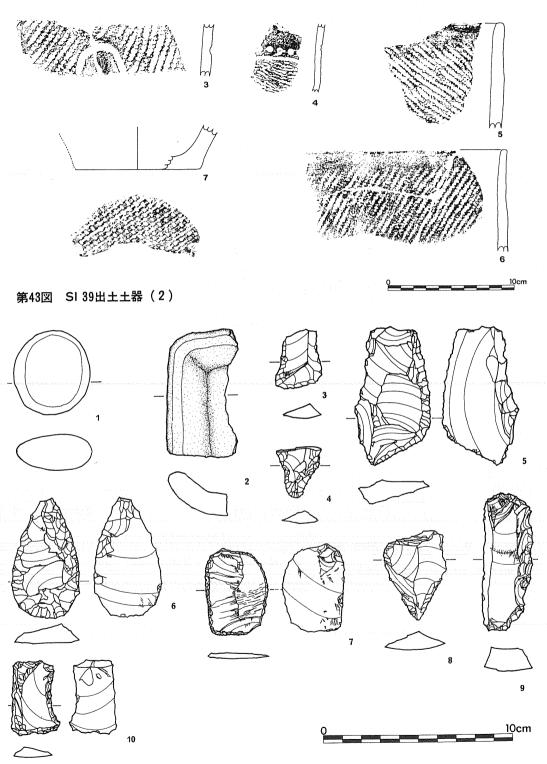
〔平面形〕 径約3.5~4.0mの円形。

〔壁,床面〕 壁は確認できず,よくしまって平坦な床面と壁溝の存在で知ったものである。 床面は壁溝側までもかたくしめられ,平坦で良好な状態であった。

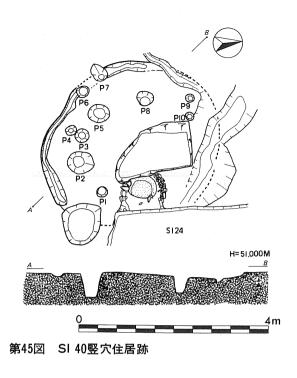
【**柱穴**】 計10本の柱穴を検出したが、主柱穴は不明。柱穴は P_2 、 P_7 、 P_8 が $30\sim50$ cmの深さであり、他はこれよりも浅い。







第44図 SI 39・40・47出土石器

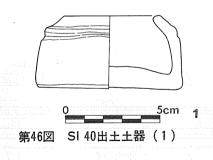


【**壁溝**】 幅10~20cm, 深さ 5~10cmで, 約半周確認。

【炉】 A部は範囲確認調査の際、破壊され、埋設土器もない。B部中央は石組みがなく、粘質土を貼られた底面が強く円形に焼けている。軸線方向はN79.5°W。

【その他】 壁溝が西辺で重なっており、他に住居跡のある可能性がある。しかし、その周囲は地山土に近い砂利混じりのかたい土層の堆積であった。

【出土遺物】 46,47図,44 図 2 ~ 5。46図は住居跡西端 床面直上から出土した小型無



文の壺形土器。肩部下に一条の沈線による段が形成されている。47図4と6は器面の色調が全く異なるが同一個体の可能性がある。相方とも粘土紐貼付による隆線2本一組みで、文様を描く。7と8は同一の個体でゆるい波状口縁をなす。沈線内の刺突文が印象的である。

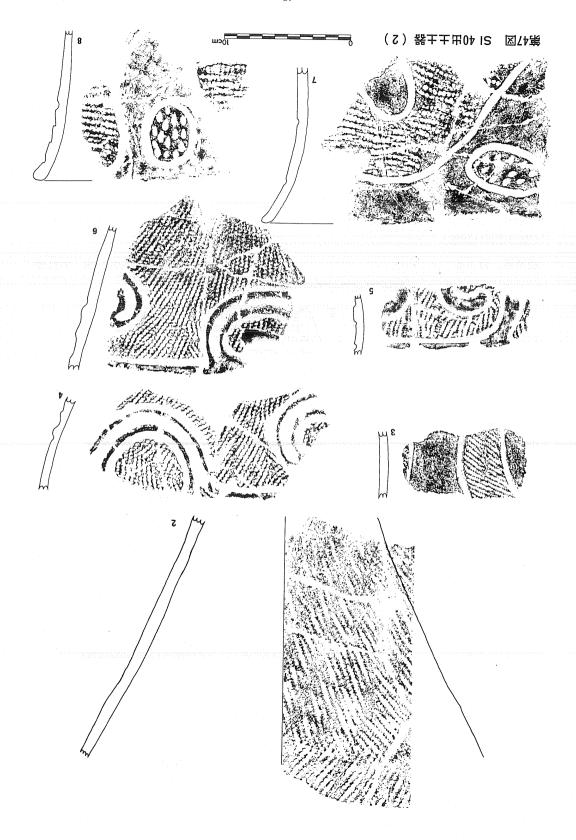
S I 45 住居跡 (第83・48図, 図版13)

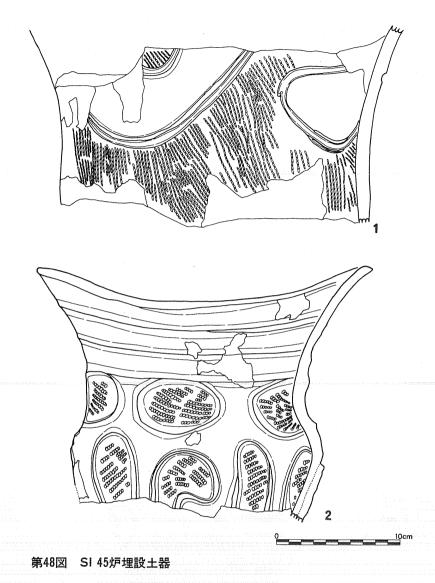
〔位置〕 住居跡群東端にある。複式炉のみが発見された。

【炉】 A部埋設土器の周囲に石囲いはなかったが、抜き取られた可能性がある。埋設土器は 二重になっており、49図1が外側、2が内側にあった。B部とC部とは石組みと小さな段によって区切られている。軸線方向はN18°E。

【その他】 SI30と重複し、SI31、SI46との同時存在は考えられないので、この部分少なくとも3期以上の重複の可能性がある。

【炉埋設土器】 48図1は、胴部上半がわずかにくびれる深鉢。口縁部と胴部中央下を欠く。 頸部から胴部上半にかけては大きくうねる波頭状文が4単位めぐり、無文部は隆帯化している。





胴中央部以下にも 1段の文様帯を有 するが、詳細は不 明。地文は撚糸回 転文。2は胴上部 がくびれ、頸部か ら口縁にかけ大き く開く深鉢。2つ の頂部を持つ波状 口縁。くびれ部よ り上は無文帯で, その下は磨消縄文。 両者の間には一条 の隆線があり,そ の下に7個の円形 文が並ぶ。胴上部 から下方に向かい 椿円形文などが縦 方向に展開する。 無文部は粘土紐貼 付による隆帯状を 呈している。

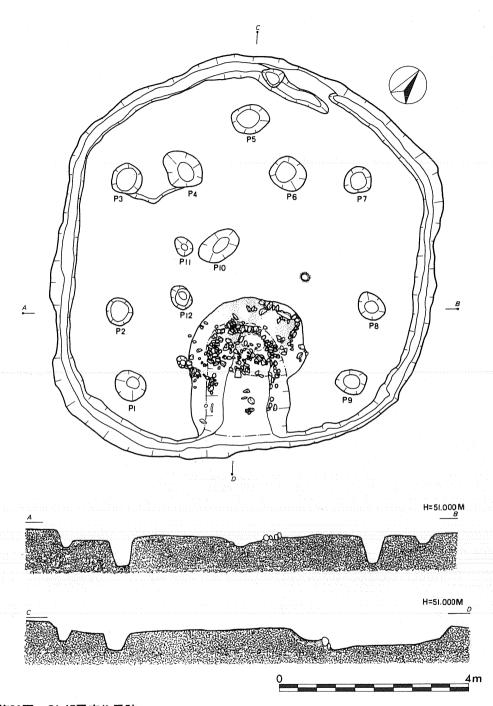
\$ 1 46 住居跡 (第87·49図,図版14) [位置] 住居跡

群北東端にある。

【炉】 A部に2個の埋設土器があり、相方ともよく焼けていた。B部は全面石組みで、C部は確認できなかった。全体としてかなり深く掘り込まれている複式炉で、床面は周囲の地山と思われた黄褐色砂利混土によって覆われていたのかもしれない。

【炉埋設土器】 49図1がこれである。胴部中央がやや膨らむ深鉢。胴部下半を欠く。縄文は R—Lの縦位回転施文。

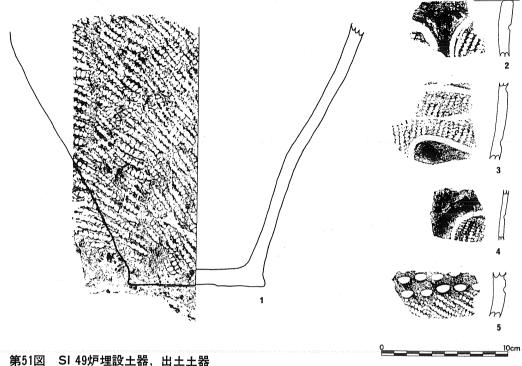
第49図 SI 46・47炉埋設土器, 出土土器



第50図 SI 47竪穴住居跡

S I 47 竪穴住居跡 (第49・50図, 図版15)

[位置] 住居跡群北西端にある大型の竪穴住居跡。地山砂利層を深く掘り込んでいる。



〔重複など〕 重複はない。

[平面形] 径8.0~8.4mの円形。東, 西辺でやや直線的な部分がある。

〔壁・床面〕 壁は東辺を除いて、高さ20~25cmあり、東辺は後世の耕作により破壊されてい る。床面は平坦で、厚さ2~5cmの貼り床。かたくしめられている。

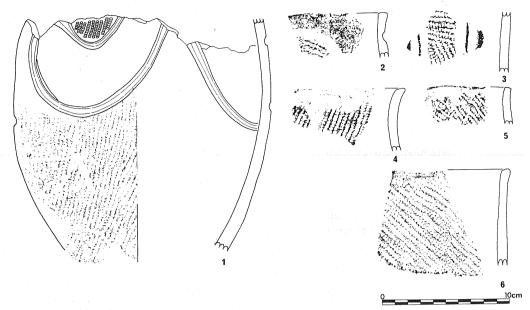
計13本の柱穴がある。P₁, P₂, P₃, P₅, P₇, P₈, P₉の7本が主柱穴で,深さ35~60 〔柱穴〕 cm。P₁側からP₃, P₉側からP₇の方へと浅くなっている。

〔壁溝〕 幅20~35cm, 深さ15~25cmで全周をめぐる。

〔炉〕 A部には焼土が厚くあるが,埋設土器は抜き取られている。B部は底面とA部寄りの 斜面ほどよく焼け,C部との境には低い段がある。C部は平坦でかたくしまっている。A部の 東側にB~C部の一部が残ったと思われる複式炉様の石組みと焼土がある。SI47住居跡の炉 の一部なのか、他の住居跡があったのは不明。軸線方向はN42°W。

〔**その他**〕 炉の北側約1mに焼土があり、土器底部がわずかに埋まっている。

〔出土遺物〕 49図 2 ~10。炉埋設土器は抜き取られて無い。49図 2 ~ 4 , 6 ~ 7 は粘土紐貼 付による隆線とその調整のための沈線による文様区画がなされ,区画後縄文が施文されている。



第52図 SI 50炉埋設土器, 出土土器

S I 49 住居跡 (第87・51図, 図版15)

「位置」 住居跡群南部にある。地山は砂利混じりの砂質土。

【炉】 A部の埋設土器とB部の石が数個、それにピット様、掘り込みが確認されただけであるが、状況からして複式炉と考えた。

〔炉埋設土器〕 胴部中央から上を欠く深鉢。底部から上方に向かって朝顔状に開く。縄文は L─R縦位回転施文である。

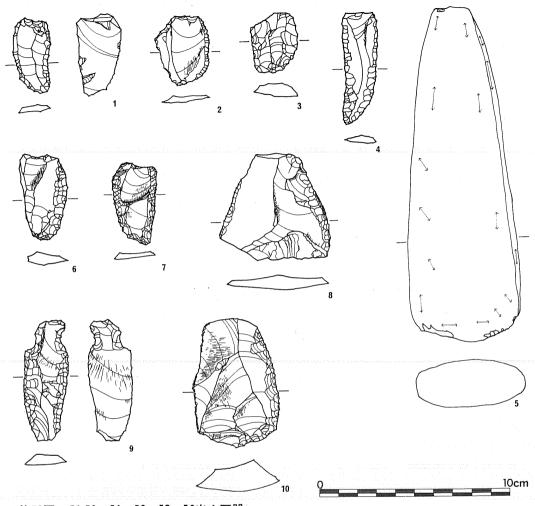
【出土遺物】 1~3は頸部にくびれの少ない平縁の深鉢であろう。5は繩文帯の上に3列以上の刺突列が横走する。

S I 50 住居跡 (第85·52, 53図, 図版16)

【位置】 住居跡群南西端にあり、SI55,56の複式炉と接している。

〔重複など〕 炉のA部がSI55の複式炉のA部、SI56の複式炉C部と切り合っている。この部分に関する限り、SI50の複式炉がやや上部にある。平面観察等からは(新)SI50 \rightarrow SI55 \rightarrow SI56(古)のように観取されたが、確証はない。

【炉】 A部埋設土器の西側先端部及び石囲の石がない。抜き取られたものであろう。B部は 三方を整然とした組石で囲んでいる。B, C部の境界は判然としないが、C部端に向かってゆ るい登りとなっている。B部底面は他の炉に比べ、それほど焼けていないが、C部底面は貼り



第53図 SI 50・51・52・53・56出土石器

床でかたくしめられている。軸線方向N116.5°W。

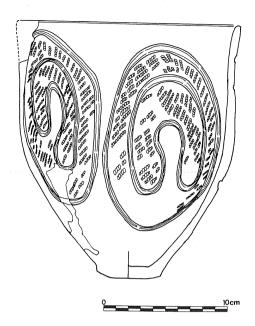
【炉埋設土器】 52図1で胴部中央がやや張る深鉢。胴部上半と下半を欠くが、波頭状文が横位に連り、4単位で一周する。地文はR一L—Rの複節斜繩文、縦位回転施文である。器形は若干異るが、SI31複式炉埋設土器に酷似する。

【出土遺物】 52図,53図1,2。52図3は粘土紐貼付による隆線による磨消繩文の区画。5 は小型の深鉢で、L—R原体の端も施文されている。

S I 51 住居跡 (第87·54·55図, 図版16)

[位置] 住居群中央南部内側にあり、複式炉のみを確認した。

【炉】 A部は埋設土器と石囲いがあり明瞭であるが、B, C部に相当する部分の底面はピッ



第54図 SI 51出土土器

ト状の落ち込みにはなっているが、貼り床の ような痕跡はなかった。軸線方向は不明。

【その他】 平面プラン確認の際,複式炉周辺にわずかの土色の違いが認められたが,住居の廃絶後土址等を掘ったのか平坦な面は検出できなかった。かろうじて複式炉の西側の小さな範囲に床面様のしまった面を検出しただけである。この面と若干の落ち込みラインなどから判断すると,本住居跡は径約3~3.5mの住居跡であったと思われる。

【炉埋設土器】 55図1がこれで、胴部上半を欠く。

【出土遺物】 54図,55図2~11,53図3~ 5。54図は小型深鉢で,縦に長い楕円形文の中にU字状文が施され,これが5単位並ぶ。

半分を欠いている。55図 2~7は浅い沈線の区画による磨消縄文。2,3,6,7は同一個体。5の縄文は無節。8,9はゆるい波状口縁をなす深鉢の口縁部破片。9は隆線の直下に深い刺突を施している。11はR一L単節縄文で綾絡文が見える。53図 5の磨製石斧は中央で折れており、床面から出土したものと、住居外から出土したものが接合した。

S | 52 | 竪穴住居跡 (第53·56·57·58·59·84図, 図版16·17)

〔位置〕住居跡群南西端にある。地山はわずかに砂利を含む硬い黄褐色砂質土で,これを掘り込んでいる。

(重複など) 東辺でS I 37と重複している。S I 37よりも新しい。

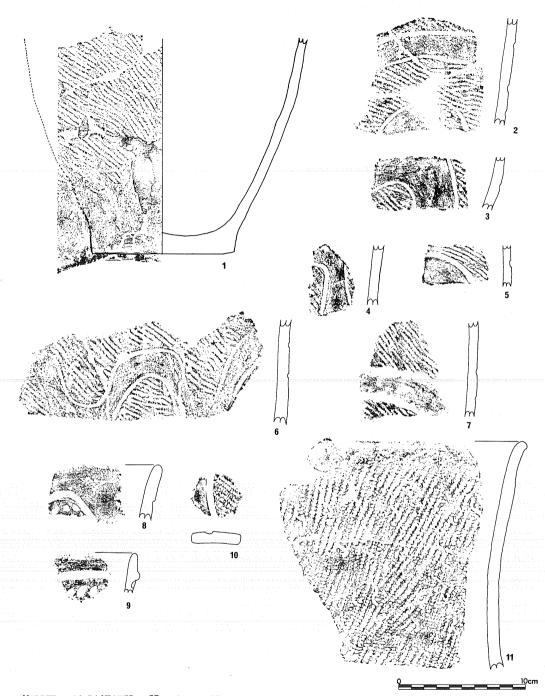
〔平面形〕 調査期間等の制約のため西半分は調査できなかった。径約5mの円形と思われる。

「壁・床面」 壁高は約30cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は中央部ほど高く、これから 四方にゆるく降っている。厚さ5cm前後の貼り床で中央部ほど厚い。

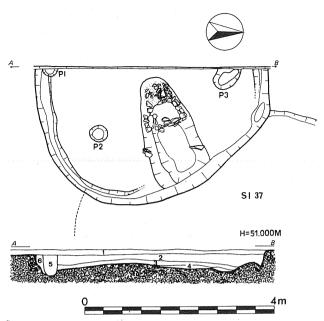
【柱穴】 3本ほど確認した。主柱穴は4本と考えられ、そのうちの3本と思われるが、いずれも深さ15~20cmと浅い。

〔壁溝〕 ほぼ全周にめぐるものと思われる。幅20~30cm,深さ10cm前後である。

【炉】 きれいな逆U字形を呈する。A部埋設土器はバラバラで残存状態があまり良くない。 B部は□字形に石組し、中央部にはない。C部底面は粘質土を厚く貼付け、かたくしまっている。軸線方向はN115.5°W。



第55図 SI 51炉埋設土器, 出土土器



1層: 黒褐色土(7.5YR¾) 2層: 黒褐色土(10YR¾)

2層:にぶい黄橙色土(10YR%)砂質土を含む。 3層:黒褐色土(7.5YR%)2層より黒っぽい。

4層:にぶい黄橙色土(10YR%)

5層:黒褐色土(7.5YR¾)+黒色土(7.5YR¾)-黒色土が

ブロック状に入りこむ→柱穴。

6層:褐色土(7.5YR%)砂を多量に含む→周溝。

第56図 SI 52竪穴住居跡

【その他】 覆土中からは本遺跡ではS I 54と同様, 多量の遺物が投棄された状況で出土した。炉埋設土器は残存状況が劣悪で図示できなかった。

【出土遺物】 57, 58, 59 図, 53図6~8。57図1, 2は同一個体で, 頸部がわずかにすばむ大型の深鉢。 波状口縁をなす。 太い沈線によるスケールの大きな渦文が器面いっぱいに描かれ, 無文部は隆帯状をなす。 4~6も1, 2に同様なものであろう。58図9は平縁の大型深鉢で,幅の広い無文部端には粘土紐貼付による隆線を施している。11は頸

部から胴部上半にC字状文など、胴部中央から下半にかけては波頭状文を施す構成であろう。 57図7,8は文様区画線を粘土紐貼付によっており、斜めを意識した文様構成である。59図13 は削られたような口縁を呈し、地文である無節繩文の上に2列の竹管による刺突文を施す。59 図1,2は胴部中央で若干膨らみ、底部に向かい急にすぼまる深鉢で、縄文は縦位回転。

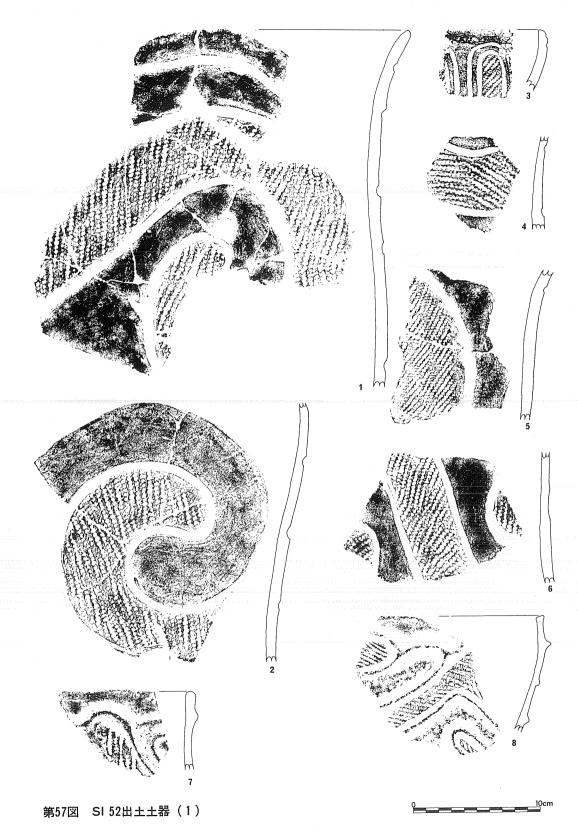
S I 53 住居跡 (第84·60図, 図版15)

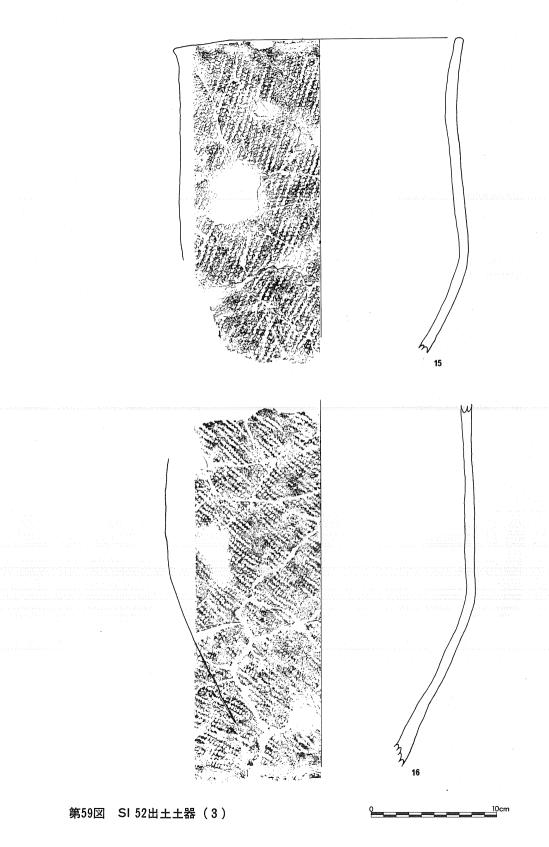
[位置] 住居跡群南部内側で、複式炉だけが発見された。

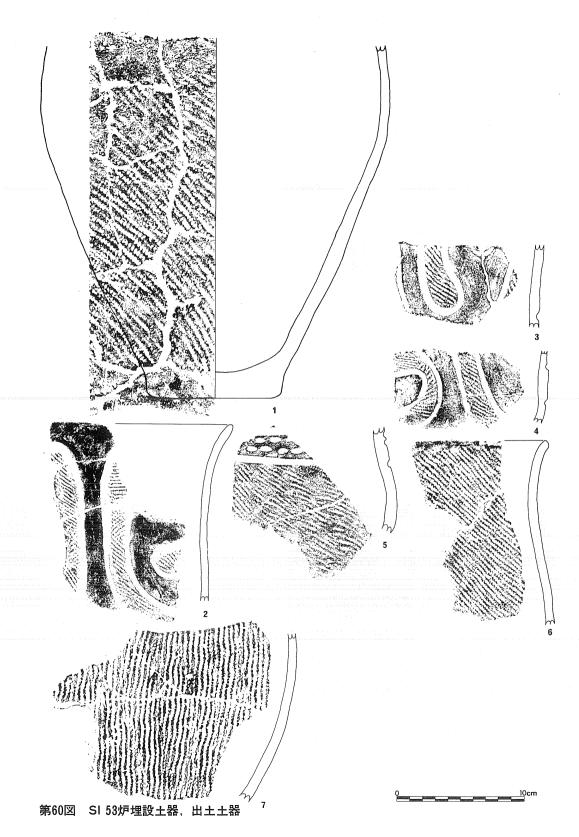
【炉】 平面形は逆U字形よりも楕円形に近い。A部埋設土器の周囲にはB部側にしか石囲がなく、B部石組も部分的である。B、C部の区分は石で行ないC部のB部側にピット状の落ち込みがある。

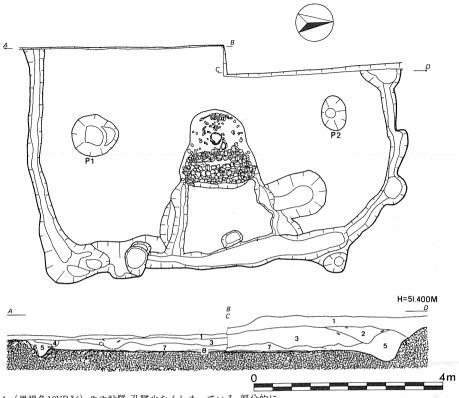
【埋設土器】 60図1がそれで、口縁部を欠損する。地文はL-Rの原体の縦位回転施文。

【出土遺物】 60図2~7,53図3。60図2,4は接合することが後からわかった。口縁部がゆるく外向する平縁の深鉢で、無文部は隆帯状をなす。5は頸部に横走する2条の沈線があり、その間に2列の刺突列が施される。7は撚糸文。









- 1.(黒褐色10YR%) やや粘質,孔隙少なくしまっている。部分的に 3~4cm程の礫多量に含む。※耕作土
- 2.(黒褐色10YR%) 孔隙多く,砂質径1~3 cm程の礫多量に含む。 遺物を含含する。
- 3.(黒 色10YR外) 孔隙色多く,粘性も少ない,遺物を包含する,はりやや小さめの礫多量に含む。
- 4.(暗褐色10YR¾) 砂質に近く,孔隙も多い。
- 5.(黒褐色10YR¾) 砂質に近い,孔隙多く径1cm~4cm程の礫若干含む。
- 6.(褐 色10YR%)砂質,地山の黄褐色砂粒の混じったもの。
- 7.(にぶい黄褐色10YR%) 粘質,孔隙少くしまっており,キメ細い。
- 8.(楊 色10YR%) 砂質であるが,比較的キメ細かく孔隙も少ない,非常に硬くしまっている。 貼床部

第61図 SI 54竪穴住居跡

S | 54 竪穴住居跡 (第61~68·80図, 図版18)

[位置] 住居跡群西部中央にある。地山砂利層を深く掘り込んで構築された竪穴住居跡。

〔重複など〕 特にない。

【平面形】 住居跡全体の東側半分しか発掘できなかった。本遺跡竪穴住居跡は大部分が円形であるのに対し、隅丸方形のプランを呈するものと考えられる。一辺約7.7~8.0mであろう。

【壁・床面】 東辺では地山が高く残っており、壁高50cmを測る。床面は複式炉の北側でやや不明確な部分もあったが、平坦そのもので、黄褐色粘質土を厚さ3~5cmに貼り、硬くしめている。

【柱穴】 床面上の柱穴は 2 本 (P_1, P_2) 確認した。いずれも主柱穴で深さ約40cmである。未

調査分を含めても4本の主柱穴だと考えられる。

【壁溝】 幅約30cm, 深さ20~30cmの壁溝が全周をめぐる。

【炉】 本遺跡中最大で最も整然とした複式炉が、東壁中央部に取り付いている。全体の平面形は先端が丸味のある逆V字形。A部は埋設土器を中心にして半径約60cmの円を描く。先端部には幅10cm前後、厚さ3~5 cmの自然石を円周に沿って6個縦列させ、その内側に同様な石を7個放射状に配している。埋設土器の側に石囲はない。B部は径10~20cmの河原石を無数に段状に積み重ね全体として長方形にした石組み部。石組み部は底面・壁面とも火熱を強く受けたと思われ、中にはボロボロに砕けた石もある。C部の平面形は下底2.0m,上底1.5m,高さ1.5mの略台形を呈する。底面は粘質土が厚さ2~5 cmに貼られ、平坦で非常にかたくしまっている。両側辺にはB部から発した深さ5 cmの溝があり、壁溝に至っている。軸線方向はN98°W。

〔その他〕 覆土中からは多量の土器などが全て破片の状態で出土した。

【炉埋設土器】 62図1がそれである。胴部中央が膨らむ深鉢。頸部及び胴部下半を欠く。頸部から胴中央にかけては磨消縄文による大きな渦文が3単位並び、その下に波状の沈線が一周して文様帯を区画している。渦文と渦文の間の広い無文部には刺突で充填されたC字状文が配される。

〔出土遺物〕 62図2, 63, 64, 65, 66, 67図。

62図2は4つの頂部を持つ波状口縁の深鉢。頸部に粘土紐貼付による隆線を口縁に沿って巡し 同様の隆線と調整のための沈線で波頂部下に大きな渦文を描く。渦文と渦文の間には指頭か, 先端に丸味のある棒状工具で器面を押しつけた円形の刺突文を上下に2個配している。押しつ けられた内面は臍状の高まりとなっている。63図2は65図27とともにP₁の中から出土した。口 縁部が内向するゆるいキャリパー型の小型深鉢。口唇部が肥厚している。最大径を持つ肩部に 横に長い長い楕円形文を4個巡らし、その下に、楕円形文間直下に頂部を持つ波状の沈線を描 く。器内面上半に煤状炭化物が付着している。64図1も同様な土器と思われる。63図1は渦文 の下にやや複雑な波頭状文を持つ磨消繩文。64図2~5は外向する口縁部を持つ深鉢。いづれ も平縁である。6,8,9,65図14は無文部が隆帯状をなし,8は波状口縁である。10は先端 の細い隆線で文様を描いている。64図12~65図18は刺突文を持つ土器群。いづれも口縁部が外 向する深鉢。14は最大径を胴部中位に持つ。12の刺突文は先端が角張る棒状工具によるもの。 13~16は波状口縁をなす。65図19は帯状に肥厚する波状口縁をなし,その頂部に円孔を穿って いる。円孔の内面にも粘土紐貼付による文様を描く。20はわずかに外向する口縁の深鉢であろ う。やや太めの粘土紐を直交させながら貼付け,その上に連鎖状の刺突文を施す。隆線には部 分的に高まるところもある。64図21、22、65、66図は覆土中から出土した粗製の深鉢である。 いずれも縄文を縦位回転施文している。21 , 24は原体端の痕が残る。21, 22は口縁が直立する 調査分を含めても4本の主柱穴だと考えられる。

[壁溝] 幅約30cm, 深さ20~30cmの壁溝が全周をめぐる。

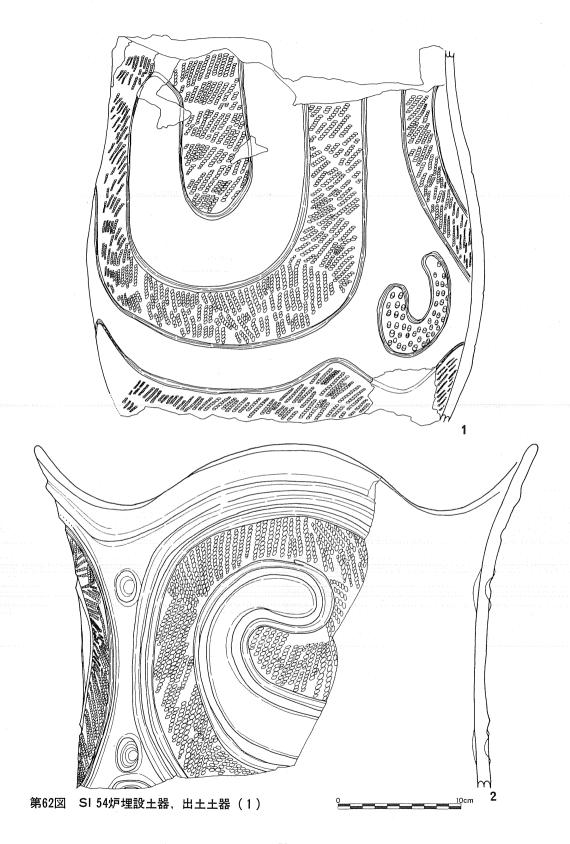
【炉】 本遺跡中最大で最も整然とした複式炉が、東壁中央部に取り付いている。全体の平面 形は先端が丸味のある逆V字形。A部は埋設土器を中心にして半径約60cmの円を描く。先端部 には幅10cm前後、厚さ3~5 cmの自然石を円周に沿って6 個縦列させ、その内側に同様な石を 7 個放射状に配している。埋設土器の側に石囲はない。B部は径10~20cmの河原石を無数に段 状に積み重ね全体として長方形にした石組み部。石組み部は底面・壁面とも火熱を強く受けた と思われ、中にはボロボロに砕けた石もある。C部の平面形は下底2.0m,上底1.5m,高さ1.5m の略台形を呈する。底面は粘質土が厚さ2~5 cmに貼られ、平坦で非常にかたくしまっている。 両側辺にはB部から発した深さ5 cmの溝があり、壁溝に至っている。軸線方向はN98°W。

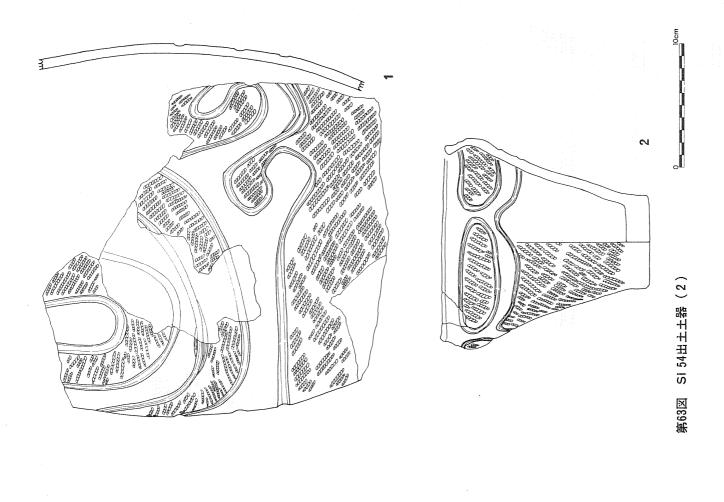
[その他] 覆土中からは多量の土器などが全て破片の状態で出土した。

【炉埋設土器】 62図1がそれである。胴部中央が膨らむ深鉢。頸部及び胴部下半を欠く。頸部から胴中央にかけては磨消繩文による大きな渦文が3単位並び、その下に波状の沈線が一周して文様帯を区画している。渦文と渦文の間の広い無文部には刺突で充填されたC字状文が配される。

[出土遺物] 62図2, 63, 64, 65, 66, 67図。

62図2は4つの頂部を持つ波状口縁の深鉢。頸部に粘土紐貼付による隆線を口縁に沿って巡し 同様の隆線と調整のための沈線で波頂部下に大きな渦文を描く。渦文と渦文の間には指頭か, 先端に丸味のある棒状工具で器面を押しつけた円形の刺突文を上下に2個配している。押しつ けられた内面は臍状の高まりとなっている。63図2は65図27とともにP₁の中から出土した。口 縁部が内向するゆるいキャリパー型の小型深鉢。口唇部が肥厚している。最大径を持つ肩部に 横に長い長い楕円形文を4個巡らし,その下に,楕円形文間直下に頂部を持つ波状の沈線を描 く。器内面上半に煤状炭化物が付着している。64図1も同様な土器と思われる。63図1は渦文 の下にやや複雑な波頭状文を持つ磨消縄文。64図2~5は外向する口縁部を持つ深鉢。いづれ も平縁である。6,8,9,65図14は無文部が隆帯状をなし,8は波状口縁である。10は先端 の細い隆線で文様を描いている。64図12~65図18は刺突文を持つ土器群。いづれも口縁部が外 向する深鉢。14は最大径を胴部中位に持つ。12の刺突文は先端が角張る棒状工具によるもの。 13~16は波状口縁をなす。65図19は帯状に肥厚する波状口縁をなし,その頂部に円孔を穿って いる。円孔の内面にも粘土紐貼付による文様を描く。20はわずかに外向する口縁の深鉢であろ う。やや太めの粘土紐を直交させながら貼付け,その上に連鎖状の刺突文を施す。隆線には部 分的に高まるところもある。64図21、22、65、66図は覆土中から出土した粗製の深鉢である。 いずれも縄文を縦位回転施文している。21 , 24は原体端の痕が残る。21, 22は口縁が直立する





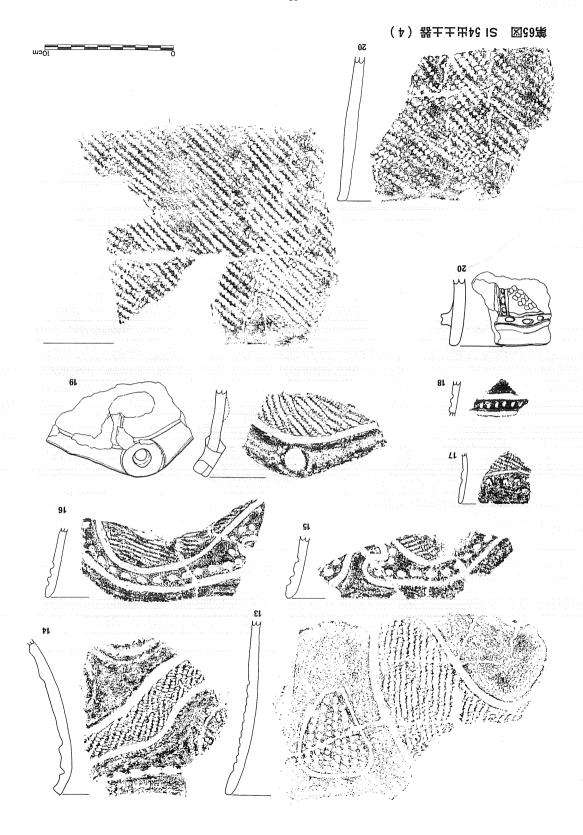
27は小型の深鉢。 24は内向気味のものである。26, 23, やや外向気味であるが,

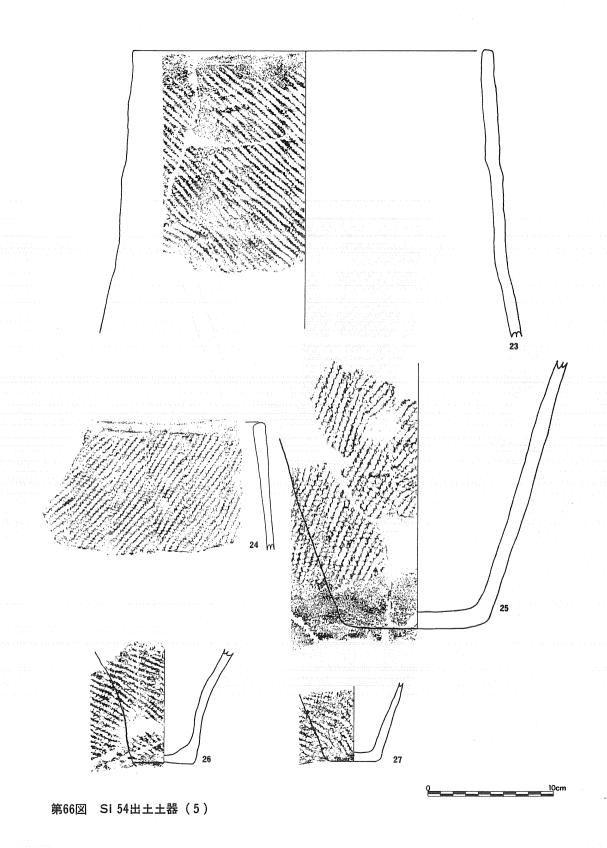
λ,

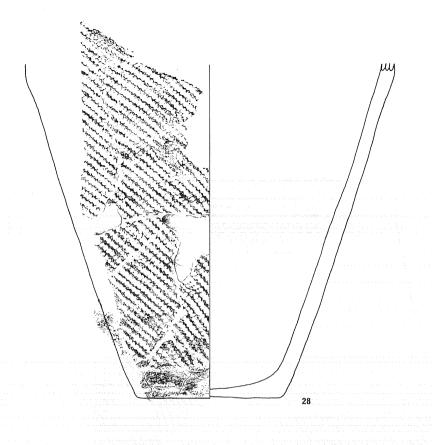
-61 -

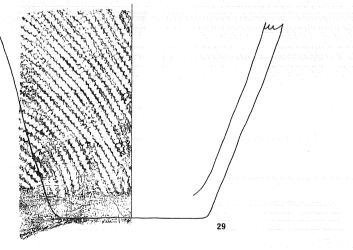
第64図

SI 54出土土器 (3)



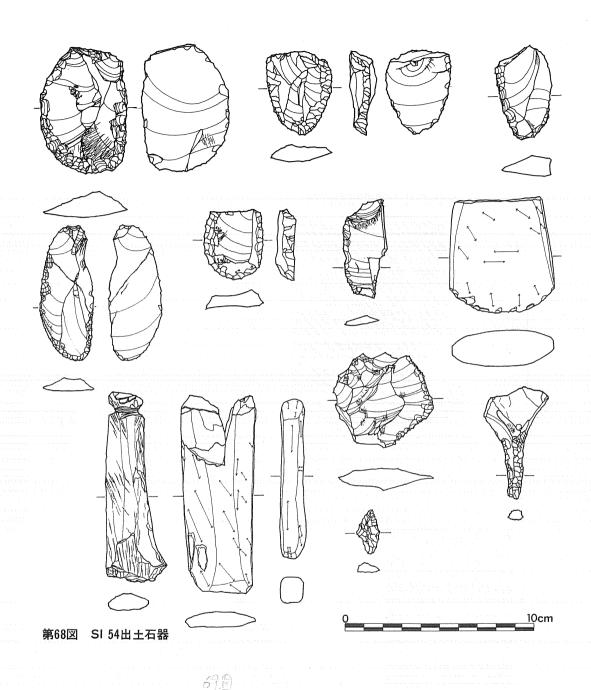






第67図 SI 54出土土器 (6)

0 10cm



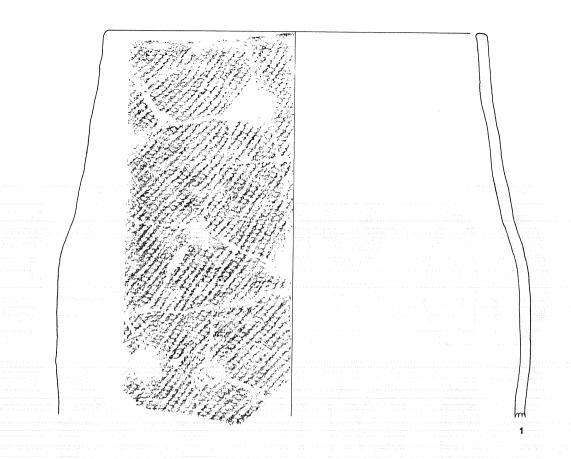
74

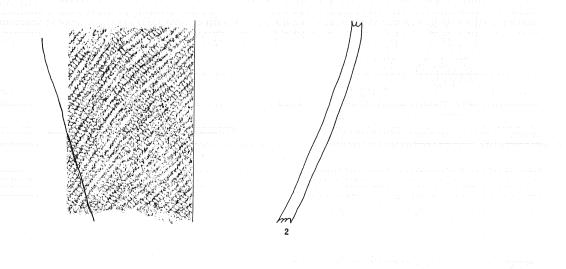
S I 55 住居跡 (第85·65図, 図版16)

[位置] 住居跡群南西端部にある。

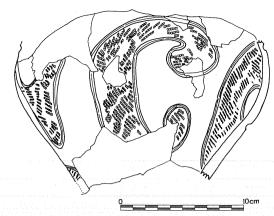
〔重複など〕 S I 50, 56複式炉と接している。

【炉】 A部は埋設土器のみで石囲いがない。B, C部は掘り込みにはなっているが、明確な境界は不明。B部からC部端に向けてゆるい登りになっている。C部端部から69図1の深鉢%





第69図 SI 55炉埋設土器



第70図 SI 56炉埋設土器

周ほどが底面に接して出土した。軸線 方向N20°W。

[炉埋設土器] 69図2がそれで、深 鉢胴部下半。

S I 56 住居跡 (85·70図, 図版16)

「位置」 住居跡群南西端部にある。

「重複など」 S I 50, 55複式炉と切 り合っている。

[炉] 全長1m足らずの複式炉で, 本遺跡中最も小さいものの1つである。

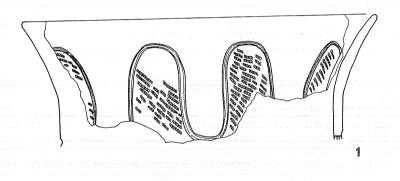
> A部、B部とも小さな 石を使用した石囲、組 石で、B部中央には石 組みがない。C部は判 然としなかった。B, C部は石で区画してい る。軸線方向N90.5°W。 〔炉埋設土器〕 70図。 胴部の強く張る深鉢。 上半と下半を欠く。胴 部中央には磨消繩文に よるC字状文などが, 6~7単位施されてい る。二次的な加熱によ ってもろくなっており ボロボロである。

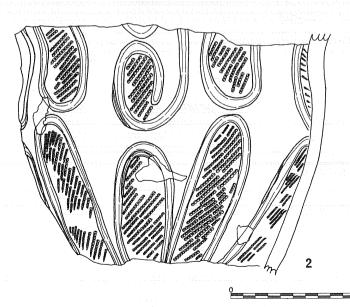


(第87.71.72図, 図版17)

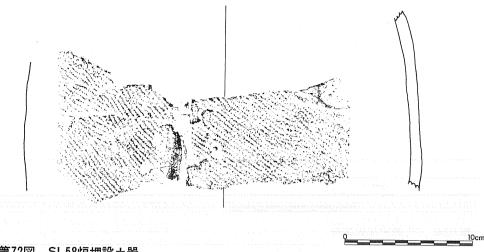
〔位置〕 住居跡群南 西部中央にある。炉の みが発見された。

〔重複など〕 炉埋設

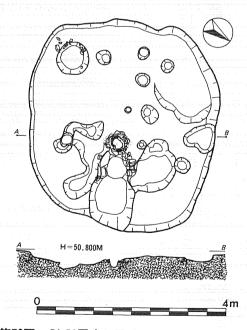




第71図 SI 58炉埋設土器



SI 58炉埋設土器 第72図



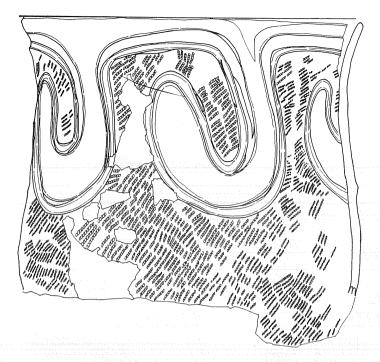
第73図 SI 59竪穴住居跡

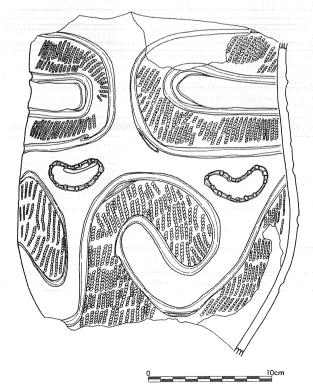
土器の1つがSI37壁溝中にある。新旧 関係は不明。

[炉] A, B, C部が明確に分離せず 複式炉の範疇には入らない炉であるかも しれない。A部にあたる部分には2個の 埋設土器が東西に並び、その間には大き な河原石がある。B, C部にあたるとこ ろでは円形のピット状になっている。軸 線方向はN103.5°W。

〔炉埋設土器〕 71,72図がこれである。 71図1は西側にあった埋設土器。頸部が くびれ、口縁部が外向する深鉢。頸部か ら胴部上半にかけC字状文が配される。 71図2,72図は本来のA部に二重になっ ていた。71図1は胴上部のくびれる深鉢。 上部に縦に長い楕円形文と細長い渦文が

2個1単位で5単位一巡し、その下に楕円形文が上部の単位に付随して一周する。72図は71図 2の外側にあった土器で、補修孔を持つ。補修した部分は、まず最初にヒビ割れに沿って粘土 紐を貼付け,さらに孔をあけ縛ったものである。粘土紐の剝落した部分には地文が見えている。





第74図 SI 59炉埋設土器

S 159 竪穴住居跡

(73~75.85図, 図版19)

〔位置〕 住居跡群南 東端にある。

〔平面形〕 径4~4.4 mの円形ないし隅丸方 形を呈する。

【壁・床面】 地山(褐色砂質土)をそれほ ど掘り込んではいない ため、全周ほぼ10cm前 後の壁。床面は西半が 平坦で貼床によってか たくしめられている。 東半、特に南東部はか なり凸凹がある。

【柱穴】 柱穴は11本 検出したが、いずれも $10\sim20$ cm程度の深さし かなく浅い。 P_1 , P_3 , P_6 , P_1 が配置から見て 主柱穴と思われる。

【炉】 A部はきれいな石囲いで、中の埋設 土器は二重になっている。 B部は C部側が開く石組で、一方の辺には比較的大きな河原石を2個用いている。 C部底面は平坦で、かたくしめられている。軸線方向N119°W。

〔炉埋設土器〕 74図



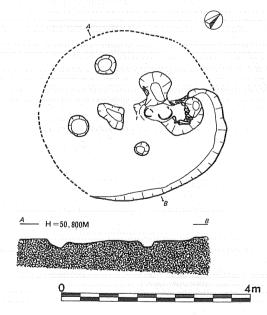
第75図 SI 59出土土器

1, 2。1が外側の土器。頸部がわずかにくびれ、口縁部の外向する平縁の深鉢。隆線によって描かれた波頭状文が6単位で1巡する。2は胴部中位下がゆるやかに張る深鉢。横に長い中が無文の楕円形文が胴部上半のくびれに2個,その下に波頭状文が5単位配されている。波頭状文と波頭状文の間には唇状の沈線の上から刺突が施された文様が入る。上部楕円形文の中の無文部の両端は耳状に高まっている。

【出土遺物】 75図,68図11。1~3は同一個体。口縁部がわずかに外向する波状口縁の深鉢。 頸部から胴部中央にかけては隆沈線による磨消縄文でやや角ばる渦文等を描き、その下にゆるい波状文をめぐらせている。5は沈線による磨消縄文。区画内の充塡文には、縄文だけの部分と、縄文の上から刺突文を施したところがある。縄文は沈線を引いた後から施文されている。9はきれいな竹管文。10は小型の深鉢。R—Lの原体を方向を変えて回転施文することによって羽状縄文風に仕上げ、効果を出している。

S I 60 竪穴住居跡 (第76,77·87図,図版19)

【位置】 住居跡群南部端にある。地山褐色砂質土層をほとんど掘り込んでいないため、部分的にしかわからなかった住居跡である。 【平面形】 径3.5~3.8mの円



第76図 SI 60竪穴住居跡

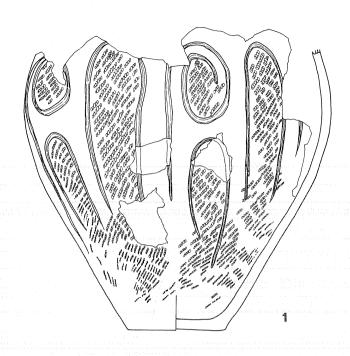
【平面形】 径3.5~3.8mの円形を呈すると思われる。

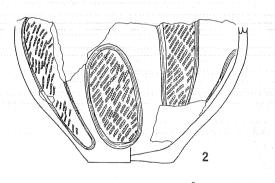
【壁・床面】 壁は東辺で高さ 2~5 cm確認したのみである。 床面は東~南部にかけては平坦 で、かたくしまった面が存在し たが、北部はボコボコしている。 壁溝はない。

(柱穴) 5本発見したが, 15 cm前後と浅い。P₁, P₂, P₃, P₅ の 4 本が主柱穴かもしれない。

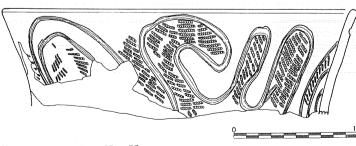
【炉】 A部に土器を 2 個別々に埋設する。 B部は A部側に開くコの字形に石が配ざれ、中のくぼみにはない。 C部はその端が壁に付くのが本来の姿と考えられるが、整然としていない。軸線方向は N 140.5°W。

〔炉埋設土器〕 77図1が本来





第77図 SI 60炉埋設土器



第78図 SI 69炉埋設土器

のA部にある土器。頸部の くびれる深鉢。頸部より上 が欠損している。一方の端 が直線となる渦文で、 渦部 の下に, 楕円形文がある文様 と、大きい楕円形文とがそ れぞれ6.5単位でくり返 され1巡する。従って前者 が隣接し合う部分が1箇所 ある。楕円形文は下方で閉 じず、開いたままである。 2は、A部の頂部に埋設さ れた土器で、小型深鉢の胴 下部。胴部の膨らみが下半 までも続いている。縦方向 に細長い楕円形文と, 上下 に配されたそれより小さい 2個の楕円形文がそれぞれ 4個づつくり返される。

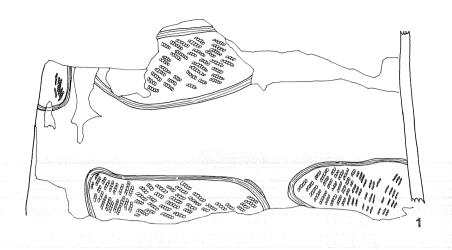
S I 69 炉 (78図)

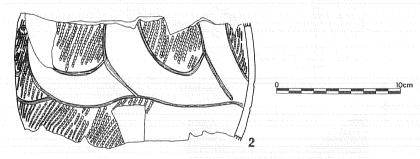
B, C部が不明になった 複式炉とも考えられる。埋 設土器とそれを囲む石があ

り焼けていた。

S×66 埋設土器(79図)

S I 60の南西に79 図 1, 2の土器が二 重に埋設されていた。 上部は削平された可 能性がある。焼土, 石囲等はなかった。





第79図 SX66埋設土器

(2) 複式炉 第80~87図

計29基の複式炉を発見した。これらをその形態、構成などにより3つに分類した。いずれの炉もA、B部は加熱で焼け、C部の底面は粘質土の貼床でかたくしまっている。

1類:付設されている壁側から見て平面形が逆V字形を呈する。

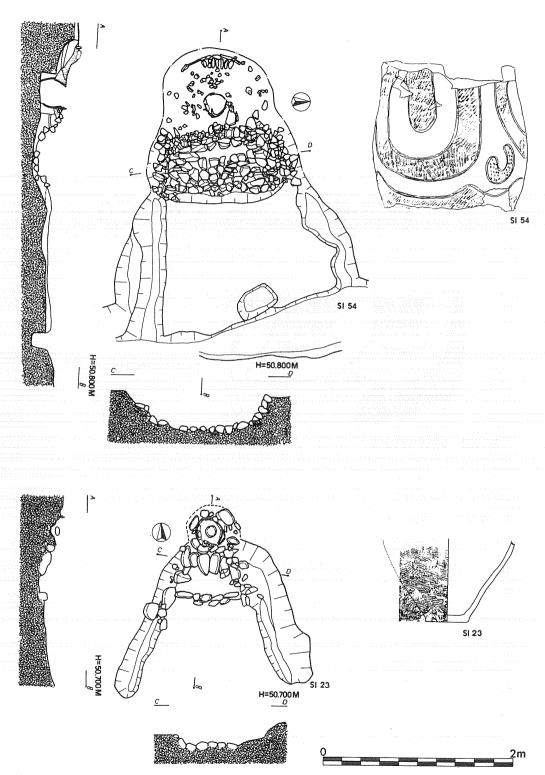
①C部の両辺内側に溝を持つ (SI54, 23)。②溝を持たない (SI13, 21, 34)。②はさらに、①B部斜面にもう1つの埋設土器がある (13)、 ②C部両辺に大きな自然石を用いる (34)、②21、に分けられる。

2類:平面形が逆U字形をなす複式炉。2つに分けられる。

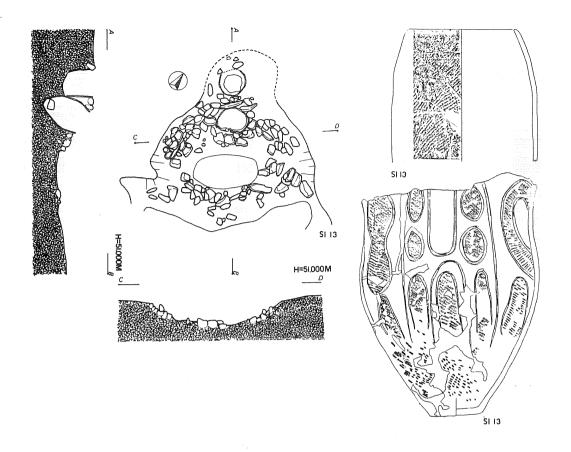
①A, B, C部が明確に分けられる。①B部底面も石組み (23, 33, 37, 45), ②B, C部の区画線に石を用いる (29, 30, 52, 53, 56), ②区画に石を用いない (39, 40, 50, 59,

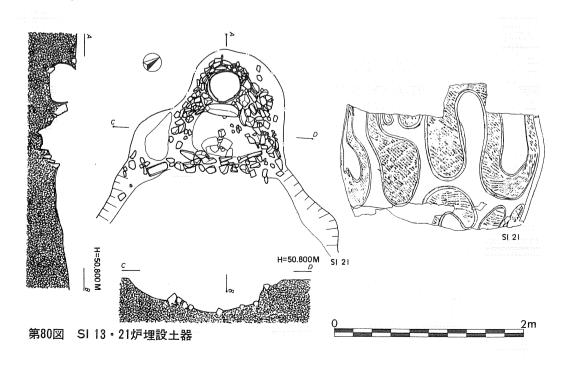
63)。②小型で、B, C部の区分が明確でない(12, 31, 35, 49, 51, 55)。

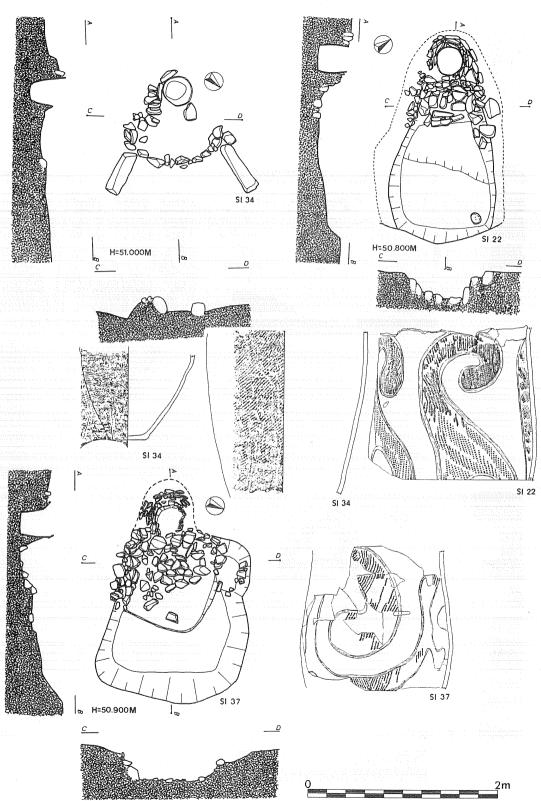
3類:A部の埋設土器が2カ所にある(46,58,60)。



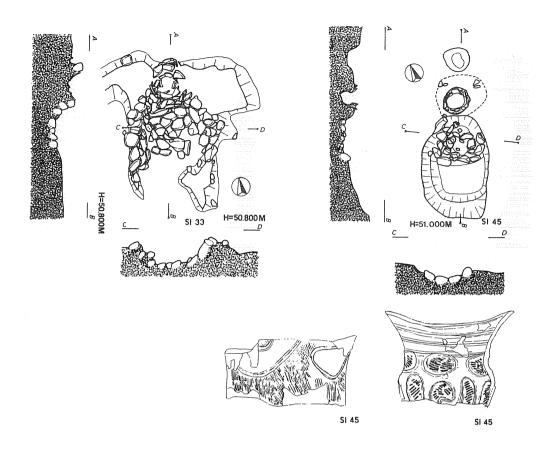
第80図 SI 23·54炉埋設土器

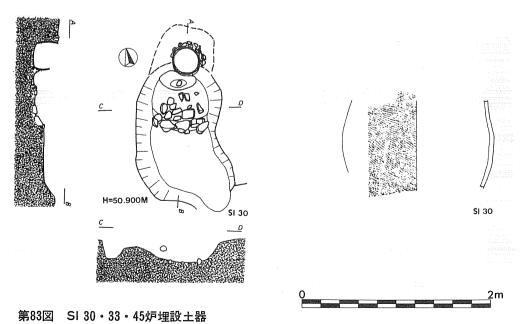


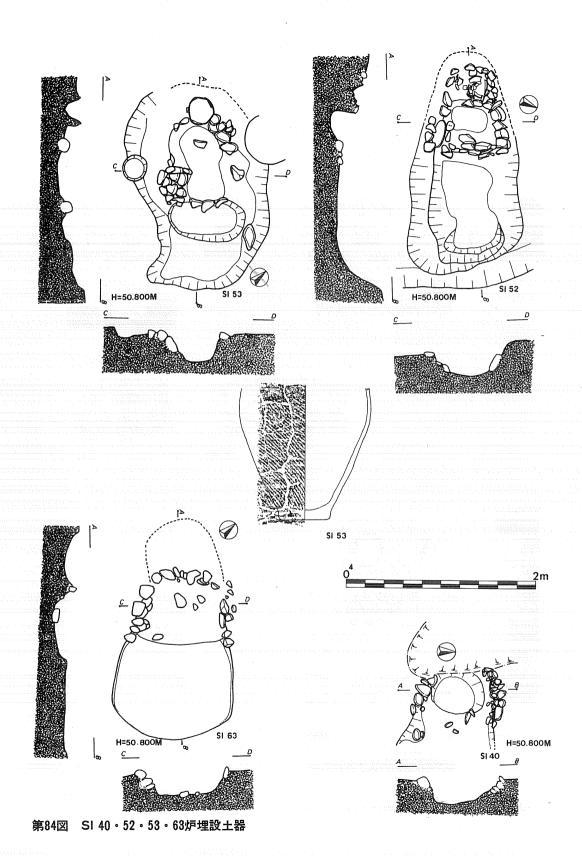




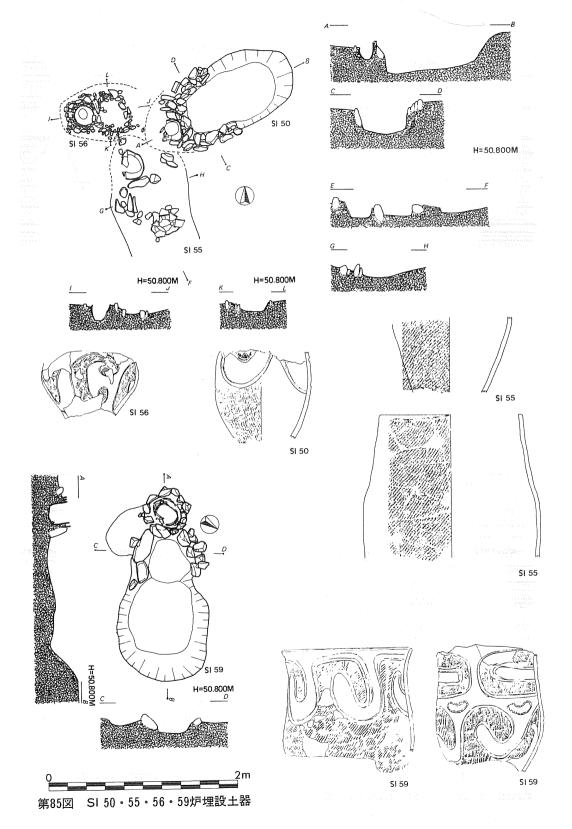
第82図 SI 22・34・37炉埋設土器

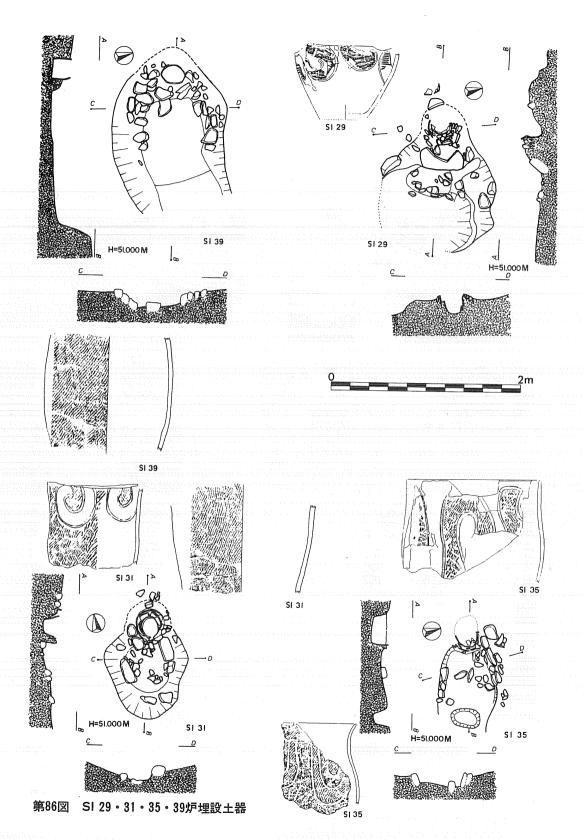


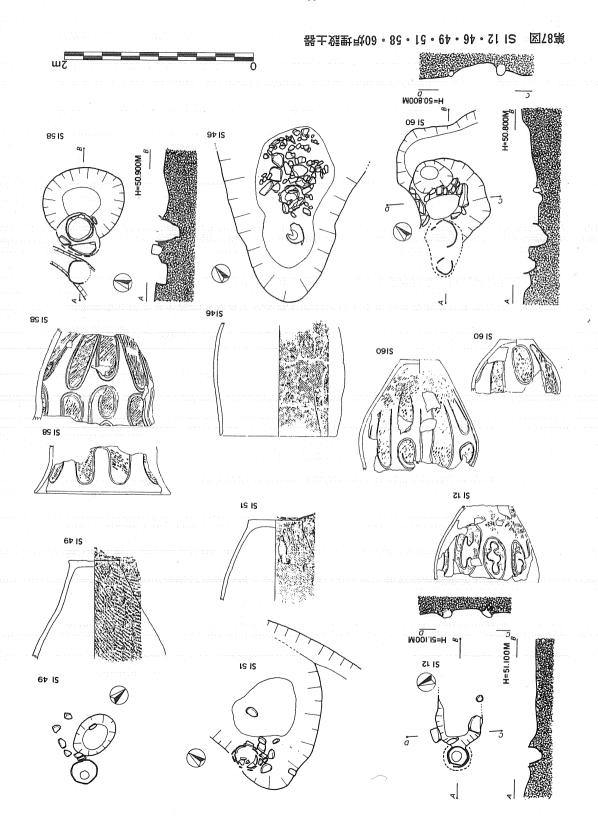




 $-78^{\circ}-$







2 その他の出土遺物

内村遺跡の繩文時代の遺構外からの出土遺物は土器と若干の土製品、石器、フレーク等がある。

(1) 土器, 土製品 (第88~97図)

遺構外出土の土器は中コンテナで約40箱である。しかし、土器が大量に出土すると予想されるいわゆる捨て場的なところが調査区内にほとんどなかったところから、完形になるものは無いに等しい。

出土した土器は繩文時代前期中葉,中期中葉,中期後葉に属するものと,弥生時代のものが 1点だけある。以下は内村遺跡で得られた土器類についての時期別の概観である。

第1群土器 (第90図1~10, 13)

前期中葉に属する土器群。LC, LD48, 49グリッド周辺からだけ出土した。量的には少ない。

90図1~9は地文にS字状連鎖沈文を持つ口縁部がや、外向する深鉢。大部分は平縁であると思われるが、3のように波状口縁をなし、頂部に刻目の入るものもある。地文以外の施文は口縁部から頸部にかけてだけに限られる。1は口縁部に上方からの尾の長い竹管による刺突列を斜位に、その下に右方から2段の刺突列を施す。両者の間には粘土紐が貼られ、その上から指腹状の工具による押圧が加えられている。2,5も同様のものであろう。4は粘土紐と押圧のみ。10、13は斜行繩文と綾絡文が施されたもの。

第2群土器 (第90図15~21, 91図22~23)

中期中葉に属する土器群。調査区北西隅を中心にわずか数10点の出土にすぎない。

器形はゆるいキャリパー形を呈する深鉢が主体を占めると思われる。地文斜行縄文の上に、 粘土紐貼付による隆線とその調整のための沈線による並行波状、渦巻などの文様の組み合わせ である。90図18は口縁部に縄文原体の圧痕がある。19は肥厚する口縁部を持ち、波状口縁をな すと思われる。

第3群土器 (88, 89図, 90図11, 12, 14, 91図26~95図)

中期末葉の土器群。本遺跡出土土器の主体を占める。

1類土器。(88図1, 3,89図,91図27~38)。沈線による施文で、楕円形文、C字状文、渦巻文、波頭状文などを描くグループ。大部分は平縁の深鉢形土器で、小型のキャリパー形を呈するもの(27,28,31)と、大型で頸部がくびれ、口縁部が外向するもの(88図1~3,89図2,91図30)とがある。89図3は小型の壺形土器で、口縁部が5稜花状を呈し、肩部に11個の穿孔がある。胴部には交互に左右巻きになる渦文が6単位配される。施文を大きく見ると、

縦方向に長い楕円形文などを施すグループとS字状文、波頭状文などを配するグループに分かれそうであるが、良好な破片が少なく、全て同じグループに一括した。

2類土器(88図 2,92図39~45)。1類と同様の施文方法のものであるが、波状口縁、あるいは山形凸起を有する口縁をなすものである。器形は口縁部が内向するゆるいキャリパー形を呈するもの(41~44)と、内向ないし、直向するもの(39,40,45)とがある。前者が波状口縁、後者が山形凸起の口縁をなす場合が多い。山形凸起の頂部直下には円形のや、大きい刺突文を有するものが多い。41の沈線区画内には撚糸文が施されている。

3類土器(96図46~53)。施文を粘土紐貼付による隆線と、調整のための沈線で行なうグループ。キャリパ形ないし、それに近い器形をなすものが多い。隆線の中には幅広で隆帯化しているものもある(46,53)。 47,48は隆線の端部や接点部が耳状の高まりとなっている。53には三又文風の文様をなす部分もある。

4類土器(96図54~56)。隆線が断面三角形状を呈する類。口縁部の外向するもの(55)や 内向するもの(54)がある。いづれも平縁。56は口唇部に指頭による刻目が付く。

5類土器(96図57, 58)。小型で薄手の深鉢型土器であろう。口縁部に横位のS字状沈線文(57), 縦位の逆S字状沈線文(58)が施されている。

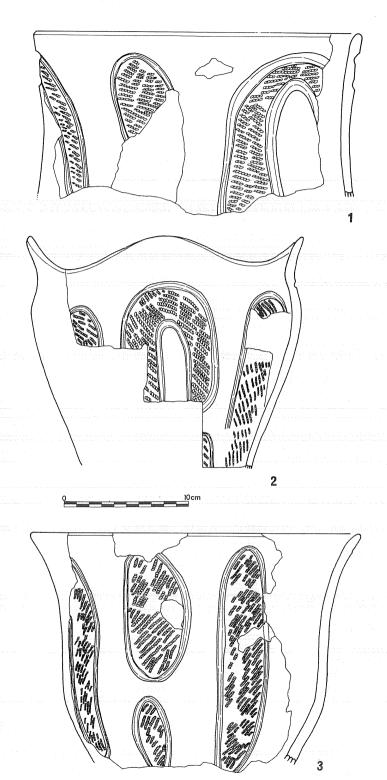
6 類土器(96図59~63, 93図83, 84)。口縁部が外向気味の深鉢形土器。口縁部などで、沈線等で区画された以外の部分 2~3段の刺突文が施されるもの。刺突はヘラ状工具の先端によるもの(59~61)と細い丸味のある棒状工具の先端によるもの(62, 63)とがある。97図83は隆帯の西端斜位に施されている。

7類土器(93図64~73)。器形は種々の深鉢形土器で、2条の並行する沈線あるいは隆線に 1~3列の刺突文が配される。66、72、73は竹管による刺突、他は棒状工具、あるいはヘラ状 工具の先端部によるものである。

8類土器(93図74~82)。7類が並行する2本の線の間に刺突文が施されるのに対し、本類は、曲線内、三角形文の中などに充塡文として使用されているものである。82は隆帯の間にできた三叉文風の間隙に充塡されている。

9類土器(93図85~94図91, 92)。口縁部から頸部に横位に1~2段の刺突列が走り、途中数カ所から懸垂文風の刺突列が下がるグループである。懸垂文風の刺突列は単独の場合(93図85~87, 89, 90)と沈線で区画されて施される場合(94図91, 92)とがある。懸垂文風の刺突列と横走する刺突列との接点には中心にやや大きめの押圧風刺突文(85)や、噴水状になる沈線や刺突が配されている。88は斜行する隆線の上に連鎖状の刺突文が施されている。7類の土器もこの仲間である可能性がある。

10類土器(94図93~97)。口縁部のゆるく内向する深鉢形土器であろうか。小さな山形の凸



第88図 遺構外出土器 (1)

起を持つ波状口縁を 呈する。これまでの 土器の施文がほとん ど曲線が主体であっ たのに対し、直線を かなり意識した施文 の土器である。施文 には撚糸文が用いら れている。波頂部に は円形の刺突文が1個 あり、この点に向か って文様が集中する。 11類土器 (94図10 0~105)。100はキ ャリパー形を呈する が、他は口縁の直向 する平縁の深鉢形土 器である。櫛状工具

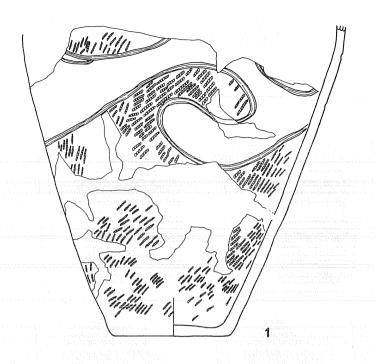
12類土器 (94図10 6~110, 95図111)。 平縁をなす, いわゆ る粗製深鉢形土器。 地文の縄文はほとん どが縦位の回転施文 であるが, 107, 111 のようにやや不定方 向のものもある。

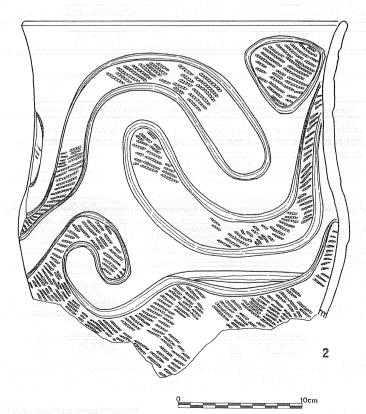
による押引文を全面

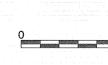
に施す。

第4群土器(95図 112~121)。

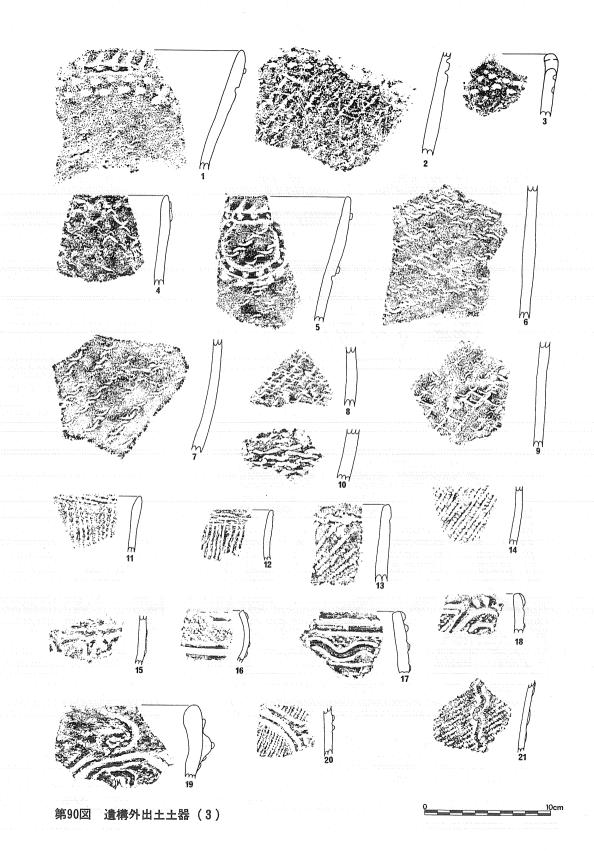
弥生式土器である。

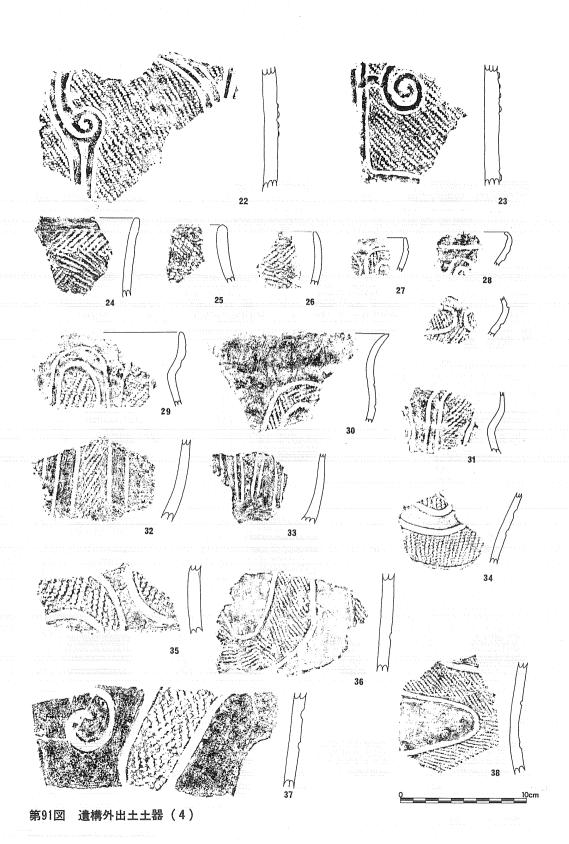




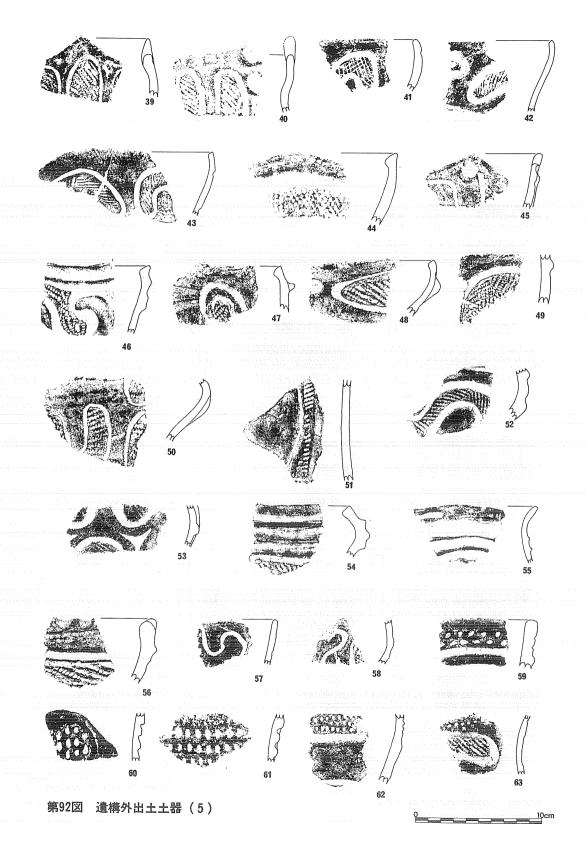


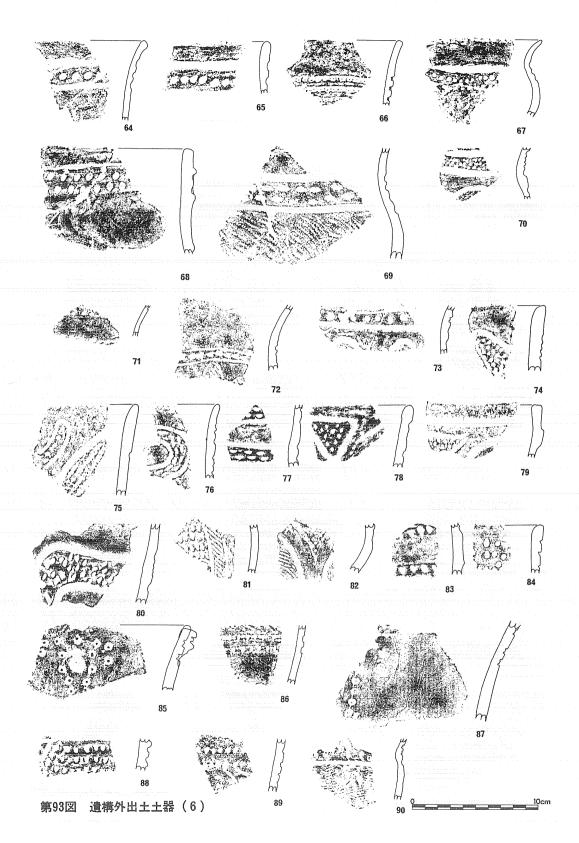
第89図 遺構外出土土器(2)

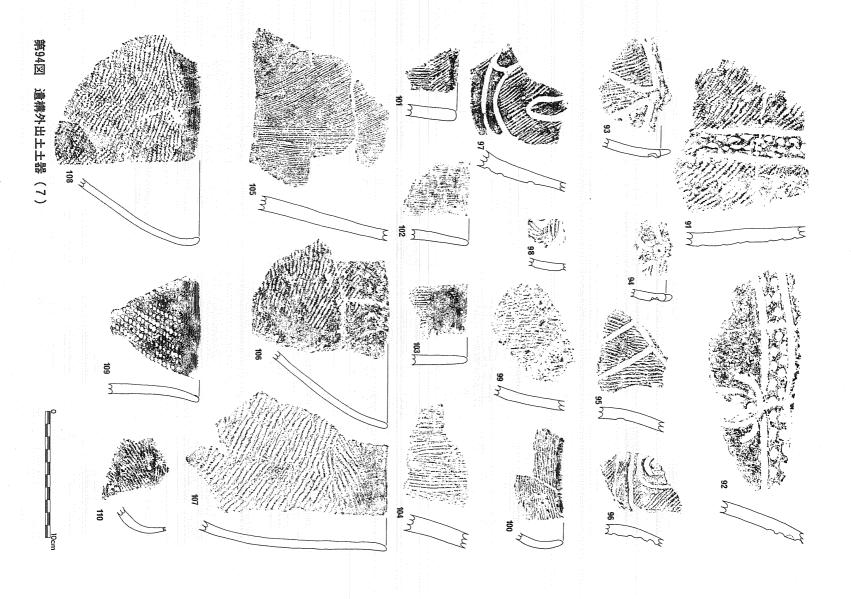


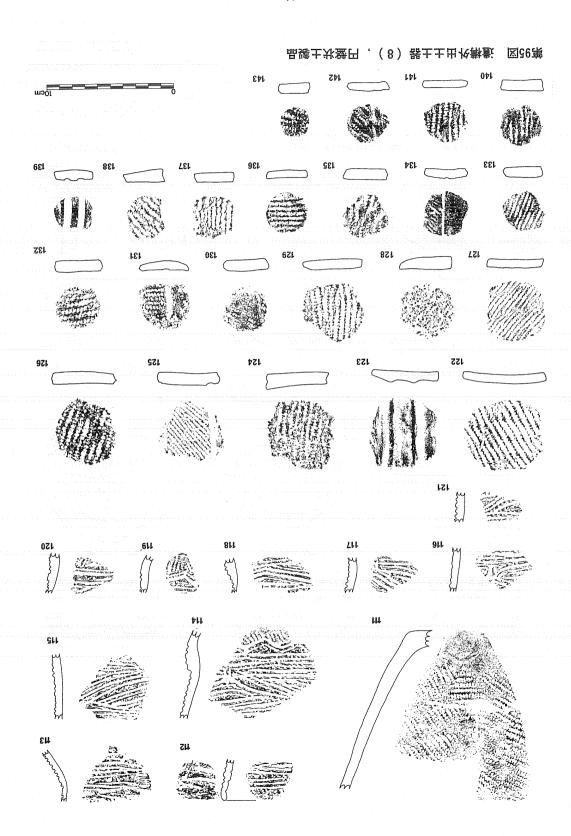


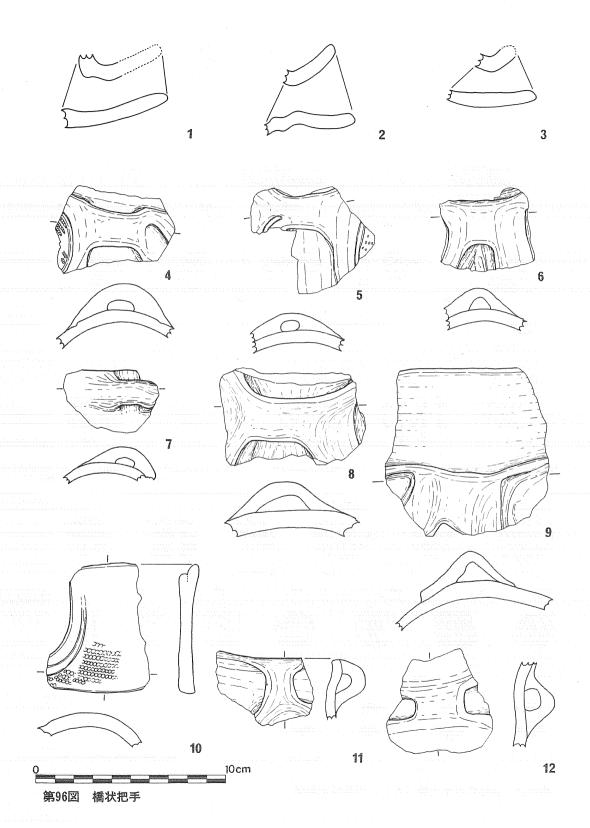
-87-

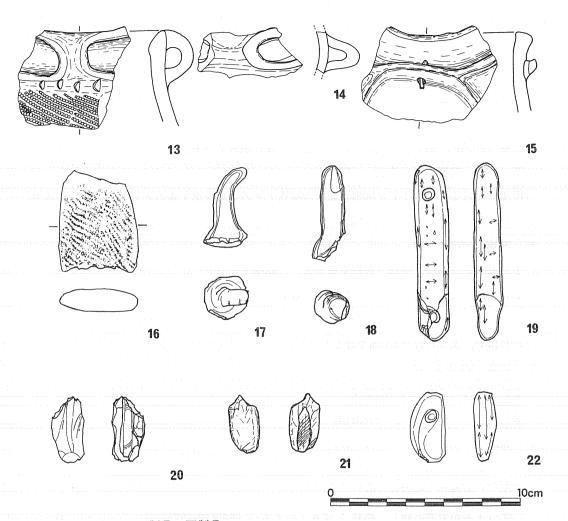












第97図 橋状把手, 土製品, 石製品

112~ 121は同一個体で唯1点だけ出土した。胴部上半でくびれ、口縁部が外向する深鉢形土器である。口縁部からくびれ部にかけては、R一Lの単節斜縄文の上に粗い櫛状工具で2本1組の沈線による文様を描いている。文様は上から数条の並行沈線文、数条を1単位として接点に2つの刻目を入れた連続鋸歯状文と続き、くびれ部の下には再び数条の並行沈線文、その下に2条で連続鋸歯状文を施したものである。口唇部は内側に捻るようにして折り曲げられた小さな波状を呈し、その上に2本1組の刻目が付される。また口縁部内側にも数条の並行沈線文が施されている。

注口土器(96図1~3)。注口部のみ3点出土した。土器本体に対し、真横か、や、斜め上 方に向いて取り付く。 橋状把手 (96図4~97図14)。11点出土。いづれも広口の壺形土器口頸部に取り付くものであろう。96図4~9は橋が左右に渡るような形で、11~97図14は上下に渡るような形で土器に取り付く。96図10は把手の四隅だけが土器に取り付くものである。4と5、11と13は同一個体で、7、11、(13)、14を除いて全て朱塗り。4 (5)は内外面とも朱が付着している。

スタンプ状土製品 (97図17, 18)。 2 点出土,指のような形を呈し,基部はくぼんでいる。 土錘 (97図20, 21)。 2 点出土。いづれも半分に割れている。

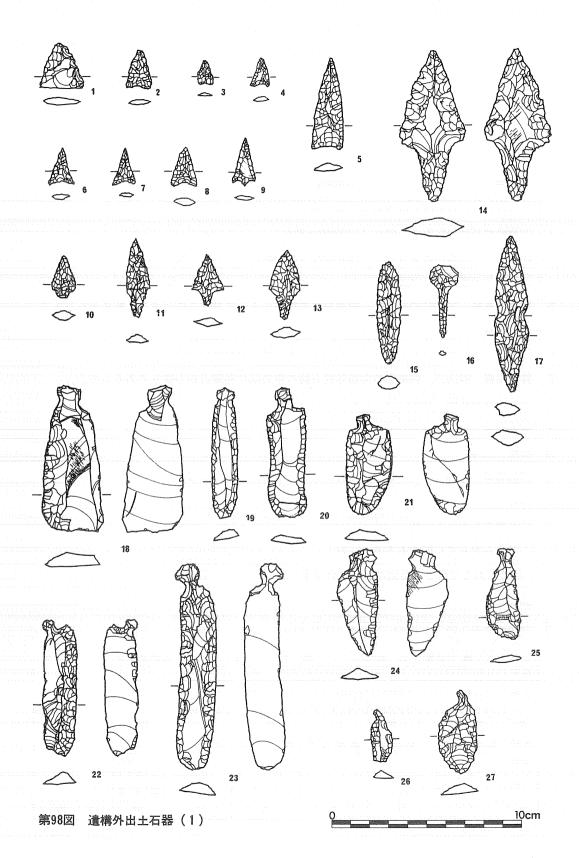
(2) 石器,石製品 (第98~105図)

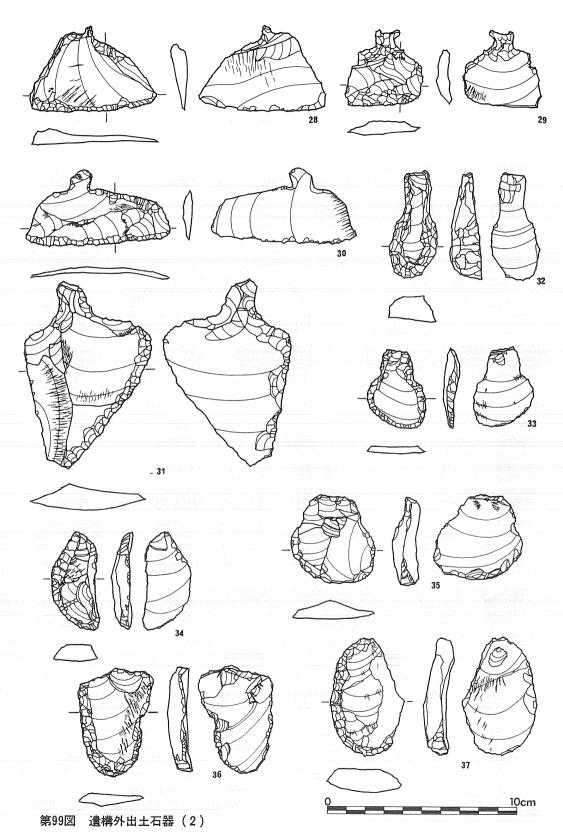
遺構に伴わないで出土した石器は総数 286点でその内訳は第1表のとおりである。形態等により14種に分類したが、紙数の都合上、その一部しか掲載していない。

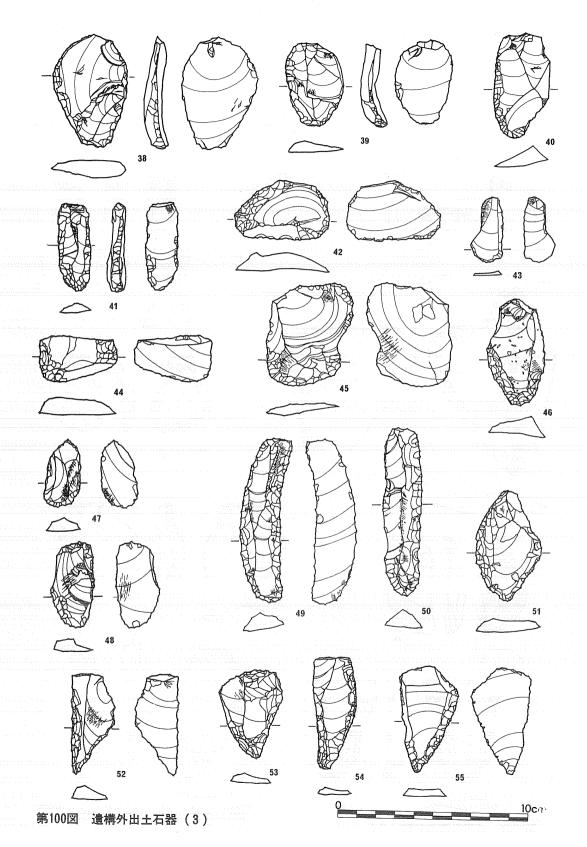
- 1. 石鏃 98図1~14
- 1) 基部が直線的で平面三角形を呈する。(98図1)
 - 2) 基部に抉りの入るもの。 (98図 2~8)
 - 3) 基部になかごのあるもの。 (98図 9~14) 14は長さ8.0cm, 最大幅3.5cmある超大型の石鏃で,基部だけで3.0cmを計る。
- 2. 石錐 98図15, 16
 - 1) つまみのあるもの (98図16)
 - 2) つまみのないもの。(98図15)
- 3. 石匙 98図18~27. 99図28~31。
 - 1)つまみが刃部と直交しない縦形のもの。
 - ①1)の典型(98図18~21)
 - ②つまみが刃部と対し、約45° ずれて付くもの(98図22~27)
 - 2) つまみが刃部と直交する、いわゆる横形のもの(99図28~31)
- 4. 搔器 ブレイド、剝片を利用して、主要剝離面からだけの加撃によって、先端部あるいは 側辺に刃部を作出している(99図32~104図99)。これらの刃部は、主要剝離面とのなす角度 が90°に近いものと45°以下のものもある。
 - 1) 先端部に丸味のある刃部を作る (99図32~100図50,101図75,76)。 99図32, 33はつまみのある掻器。
 - 2) 先端の尖る刃部を有するもの(100図51~101図60)。
 - 3) 先端に直線的な刃部を作るもの(101図63~66)。 この仲間は刃部に1つの突出部とその 両側に抉部のあるものが多い。79は左上が刃部。
 - 4) 刃部が側辺と基部にあるもの(101図67~102図71)。
 - 5) 両側辺に刃部を作るもの(102図72~75, 78, 79)。

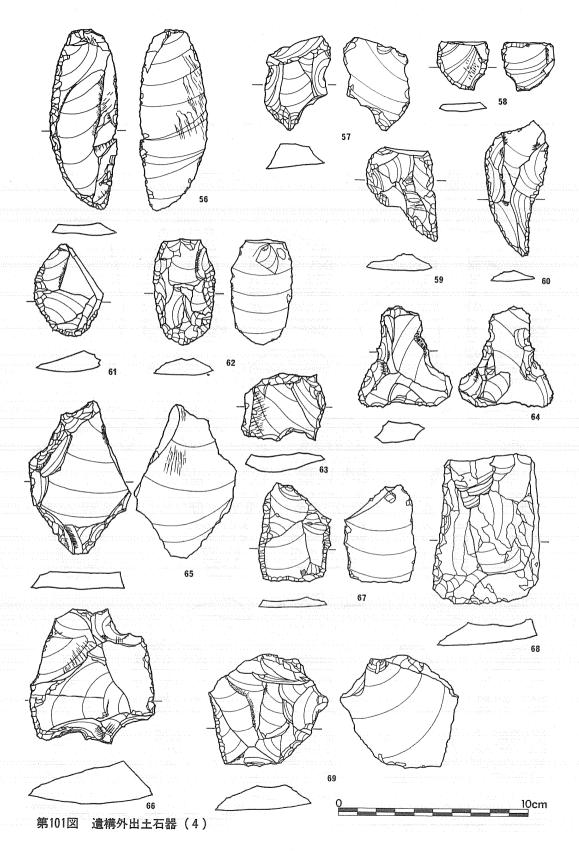
- 6)縦長のブレイドの一方の側辺にのみ直線的な刃部を作る。6)と7)の石器は打面を上にして、石器に中心線を引き、最も高い稜線が右にある場合は左側辺に刃部があり、稜線が左にある場合には右側辺に刃部がある。
 - ①刃部が左側辺にあるもの (102図76, 77, 80~103図85)
 - ②刃部が右側辺にあるもの (103図87~89)
 - ③不明 (103図86)
- 7) 一方の側辺にのみ丸味のある刃部を作る。
 - ①刃部が左側辺にあるもの (103図90~95)
 - ②刃部が右側辺にあるもの (103図96~110図98)
- 8)親指状の搔器 (104図99)
- 5 石篦状石器 104図100~108。 両面からの加撃によって刃部を作出する。断面が凸レンズ 状を呈する。
- **6 石槍** 104図109, 110。 前期の石槍であろう。整った柳葉形を呈する。
- 7 異形石器 94図17。柳葉形の尖頭器様石器の中央部に両側辺から抉りのあるもの。
- 8 その他打製石器 104図111, 112。
- 9 磨製石斧 104図114~116。
- 10 石皿 105図
- 11 打製石斧 普通のものと帆立貝状石鍬のような形のものもある。
- 12 凹石
 - ①円形のもの 1ヶ所
 - ④うらおもてに凹のあるもの(21)
 - 回うらおもてに 2 ケ所凹のあるもの (4)
 - ②細長いもの
- 13 石製品は全て破片で石棒、石剣などがある。

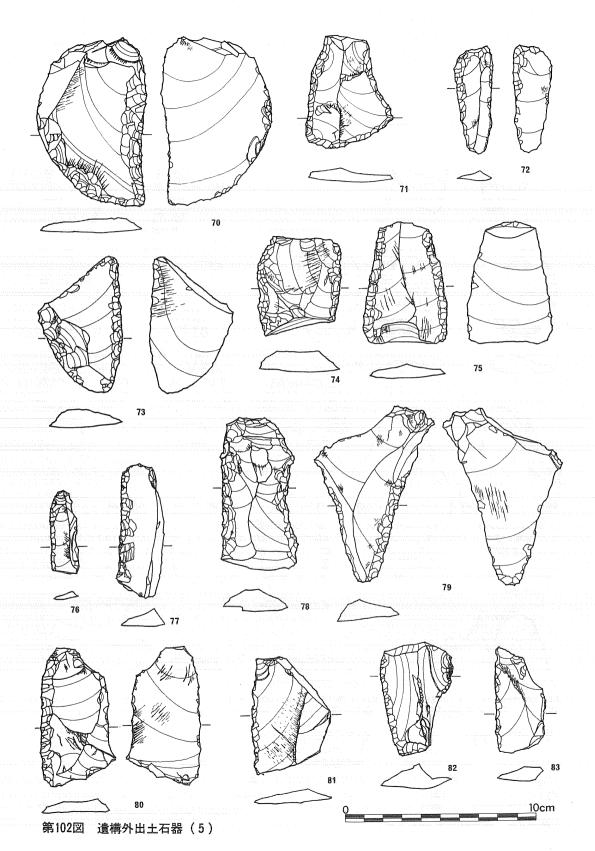
器種	石 鍬		石錘		石 匙		<u>l</u> L	搔				器			Services		石箆状石器			石棉		À		
類別	1)	2)	3)	1)	2)	. 1)	2)	1)	2)	3)	4)	5)	10.	6)		7)	8)		. 9190		1	oran process	
点数	1	13	10	1	1		② 14	6	43	28	7	13	19	① 13	② 3	(3) 2	① ② 10 7	1						
計	24				2 30							146						15		2				
器種	異形石器				その他の打製石器			磨製石斧			石皿			Ш	打製石斧		斧	凹石			4 15			
類別							14.													1)	2)			
点数			20t 	-				****												イ ロ 21 4	8			
計	1				18				9				4			2			33		計	286		



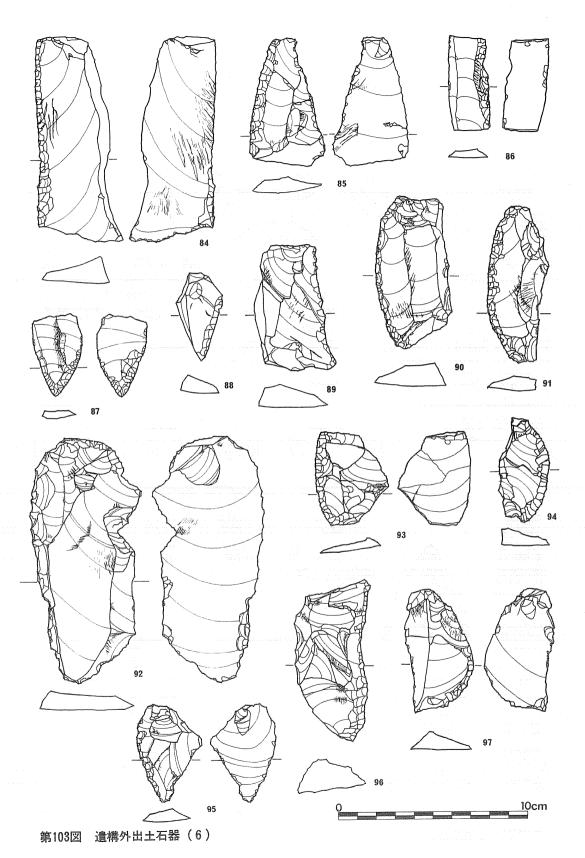




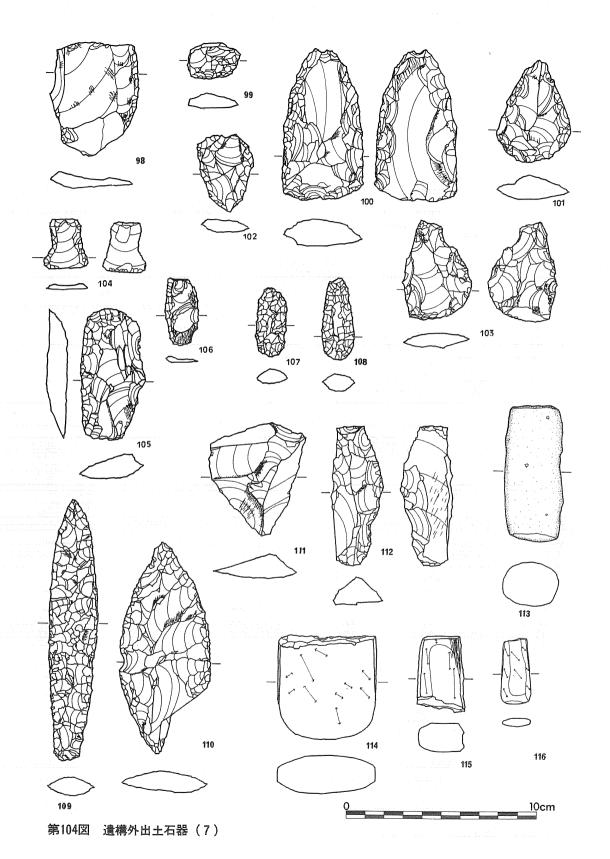


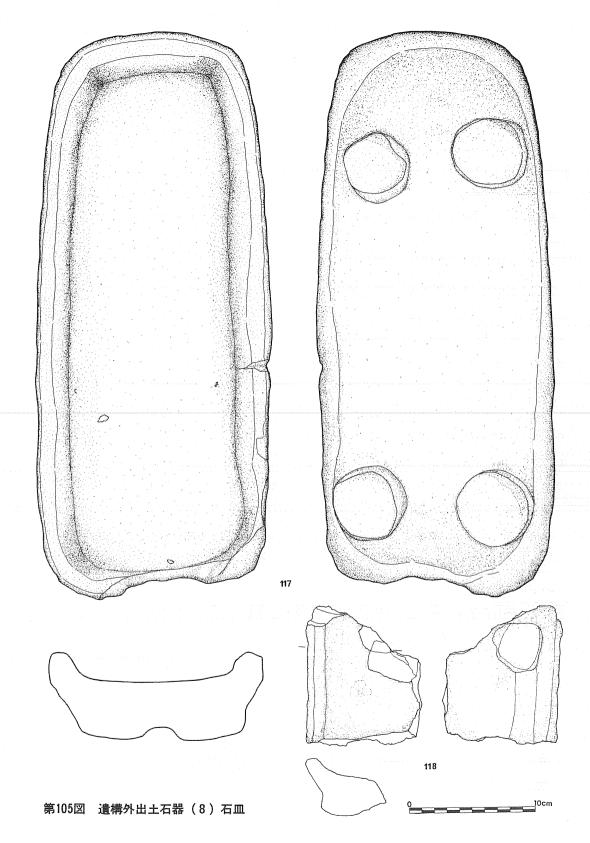


— 100 —



— 101 —





第2節 平安時代への遺構と遺物

調査区北東部から中央部,南西部にかけて平安時代の生活遺構や遺物が発見された。遺構には竪穴住居跡3軒,土坑10基,焼土遺構10基などがある。この他に柱穴等も存在したが,調査期間等の制約もあり詳細な調査は出来なかった。ここでは紙数との関係もあり,各遺構の代表的なものについてのみ、出土遺物とともに概観する。

1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区中央部と南西端に計3軒発見したが、一軒全体を明確な形で確認したものはない。

S I 08 竪穴住居跡 (106図, 図版22)

調査区南西端で約½程検出した住居跡である。第3層の褐灰色土層を掘り込んで構築しているが、床面が地山土までは達せず、黒褐色土中に黄褐色粒子が分布し、や、かたくしまっているところからプランを確認した。平面形は、一辺約3.3m前後の隅丸方形を呈すると考えられる。壁は10~15cmの高さがあり垂直ではない。床面上に3本の柱穴と1個のピットを検出した。 P_2 、 P_3 、 P_5 が柱穴である。主柱穴の数は不明。 P_5 は床面中央部にあり、本住居跡に伴うものかどうかわからない。柱穴の深さは20~30cmと比較的浅い。南東隅にカマドがある。暗褐色土に黄褐色の粒子が混入する土で構築しており、その際、多くの土器片を一緒に使用していた。両袖には径10~15cmの円柱状をした砂岩をそれぞれ1個づつ中心部に立てていた。焚口部はよく焼けている。煙出部は不明である。住居跡南辺のカマド寄にも焼土があったが性格はわからない。

出土土器 (107図, 108図11, 12)

住居跡覆土中や柱穴からも土師杯破片などが出土したが、全て細破片であり図示できるものはない。図示したものはカマド構築の際使用された土器である。6を除き全て土師器である。

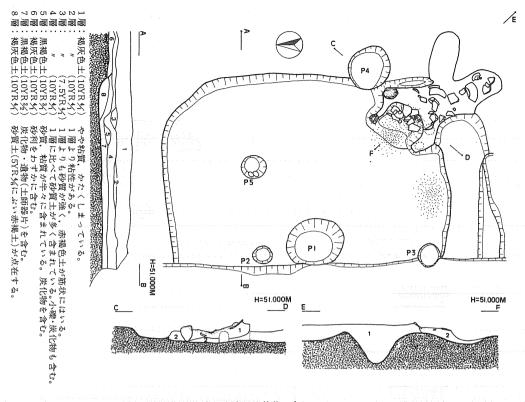
杯(107図1~3)。内外面とも灰白色~にぶい黄燈色を呈する焼成不良のものである。口径に比べ底径が小さく深い。3個平均の口径:底径:高さの比は1:0.32~0.42:0.38~0.44である。底部は回転糸切離して、両調整はない。

皿 (107図4)。平らな底部から胴部が大きく外向し、口縁部は下方に折れ曲っている。底部回転糸切離し、両調整はない。

鉢(107図5)。内面は胴部が回転ヘラケズリの後に横方向、底部が放射状のヘラミガキが施され、黒色処理されている。外面は胴部下半から底面まで、手持ちのヘラケズリが施されている。

壺 (107図6)。唯一の須恵器。口縁部の内外に自然釉が付着している。

夔 (107図 $7 \sim 9$, 108図11) 。胴部中位から下半にかけて手持ちのヘラケズリが施されているもの (11) , 頸部下からのもの (7) , 無いもの (8) などがある。底部は7 , 9 のよう



1.極暗褐色土(5YR¾) 暗褐色土を筋状に含む,

上部ほど焼かれており炭化物を含む。

2. 暗褐色土(10YR¾)砂質土暗褐色土,

炭化物をわずかに含む。 3.赤褐色土(5YR%) 地山、砂礫層で非常に硬い。



第106図 SI 08竪穴住居跡

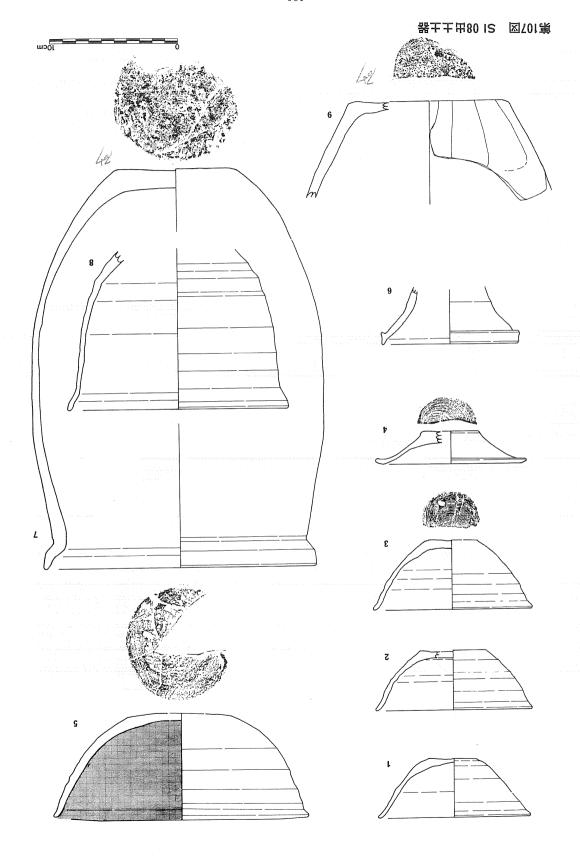
に砂が付着している砂底であろう。11の内面には刷毛状工具によるカキ目が残る。胎土には砂 粒が多く含まれ,色調は内外面とも黄橙色~明褐色を呈する。

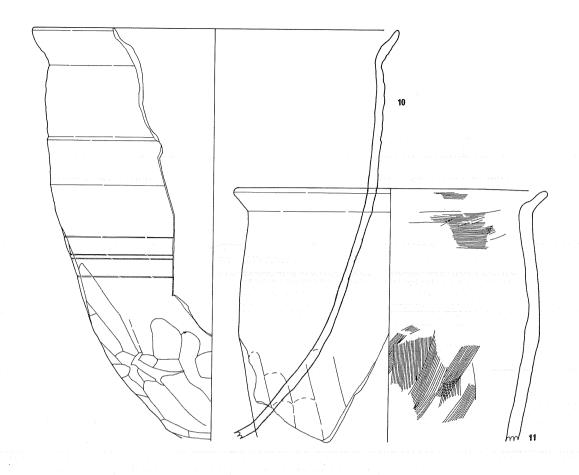
鍋 (108図12)。ロクロ調整痕の残る土鍋。

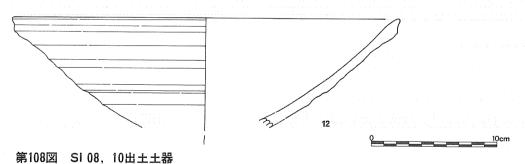
S 110 カマド (109図, 図版21)

SI23繩文時代竪穴住居跡の覆土中に構築された平安時代の住居跡であるが、カマド部分し か確認できなかった。カマド両袖にはSI08と同じように円柱状の砂岩が中心部に立って焼け ていた。構築に際しては、これもSI08と同様に土師器甕などを割って使用していた。

出土土器(108図10, 110図)。



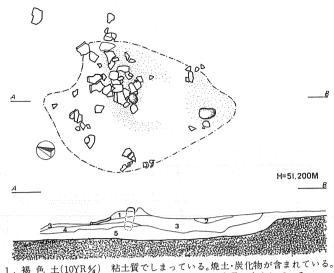




カマド構築の際に使用された土器だけである。全て土師器である。

杯 (110) 1~4)。2, 3のように口径に比べ底径が小さく深いものと4のように浅いものとがある。4は皿。

甕 (108図10, 110図 6, 7)。胴部下半は手持ちのヘラケズリによって調整され、底部は砂底である (6)。



1. 褐色土(10YR¼)

- やや粘性がある。炭化物が多量に含まれている。 里 色 土(10YR⅔)
- 黒褐色土(7.5YR%) ぼそぼそしていてしまりがない。
- 4.暗褐色土(7.5YR¾) ぼそぼそしている。
- 5. 褐色土(10YR%)



第109図 SI 10炉

鍋 (110図5)。SI08出土 のものにほぼ等しい。

2) 土垃

径1.5~2.0m前後の断面鍋 底状を呈する土坛が10基検出 されている。SK16のように大 きく. 遺物を大量に包含する ものは少なく、数点から30点 前後のものがほとんどである。 土址の大部分はSK02のよう なものが多いが、中にはSK 28のように焼土を含むものも ある。

SK16 土城(111図,図版 23, 24)

調査区南端中央部にある径

約 2.5mの円形の土址である。断面はゆるやかな鍋底状を呈し,主に1,2,3層黒色~黒褐 色土層中に底面に平行するよう土師器杯などの遺物が大量に包含されていた。覆土及び底面に 焼土や、焼けた痕跡は認められず、須恵器の破片が混じっていることなどから、全ての遺物は 本土坛に捨てられたものであろうと思われる。スクリーントーンを貼った部分は黒色処理され た部分を示す。

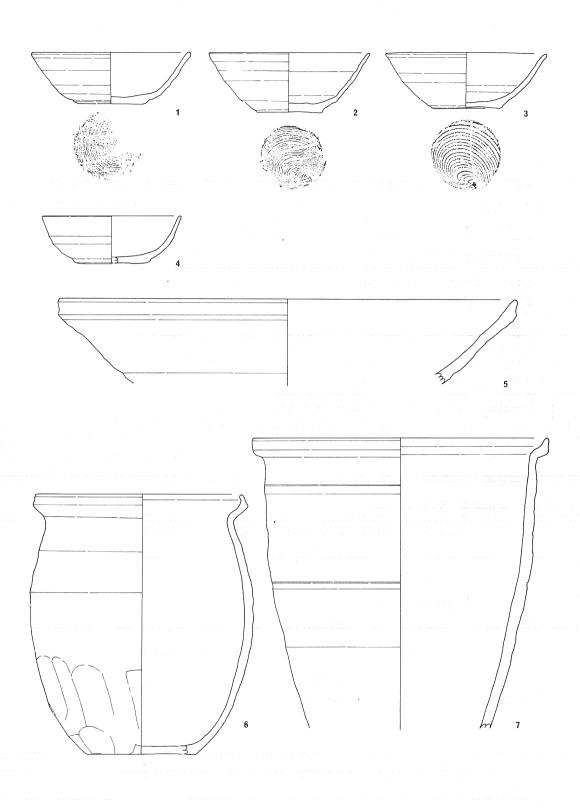
出土土器 (112図, 113図, 114図)

断面図の主に2,3層から集中して出土した。底部から口縁部まであり,図上で復原できる ものは杯だけで150点前後に達するものと思われるが、ここでは代表的なものを掲げた。

杯(112図1, 119図16~28)。黒色処理の有無、器形などにより5つに分類した。

1類:(112図1~4)。内外面,あるいは内面だけ黒色処理された杯。1~3は内外面とも 黒色処理されている。1,2は外面,体部から底まで回転ヘラケズリがなされ,その後に横方 向のヘラミガキが施されている。3の外面は体部にのみ横方向のヘラミガキ。1~4の 面は 体部上半が横方向の下半から底面にかけて放射状のヘラミガキが施されている。4の底部端は 手持ヘラケズリされている。3、4の底部切離しは回転糸切。全てロクロ回転糸切り離しの後, 高台を付している。

2類:(112図5~9)。高台の付く黒色土器。7の外面は体部下半と底が手持ちヘラケズ



第110図 SI 10出土土器



りされ、その後に横方向のヘラミガキが施されている。5、6、7の外面は1類3と同じ。5~9の内面は1類のそれと同じである。9のみが外面黒色処理されていない。5~8は高台までヘラミガキされている。

3類: (112図10~15, 113図16~20)。口径に比べ底径が小さく、全て回転糸切離し、再調整のない杯である。口唇部が外に折れ曲る感じのものが多い。

4類:(113図21)。胴部が「く」の字状に折れ曲り、口径も比較的小さい杯。底部回転糸 切離し。

5類: (113図22~27)。胴部から口縁部にかけ直線的に開く器形。口唇部が他の杯に比べ厚い。底部は回転糸切離し。

6類: (113図28)。高台付の杯。

皿(113図29~120図34)。 3 類に分かれる。底部は全て回転糸切離しで再調整はない。

1類(113図29~32)。内面にわずかの深さを持つ皿。口唇部の肥厚するものが多い。

2類: (113図33)。内面の深さがほとんどなく、水平に近いもの。

3類: (114図34)。高台付の皿。

須恵器壺 (114図35, 36)。35は底部回転糸切離し。36は頸部と肩部の間に 1 条の隆線がめぐる。

須恵器甕 (114図37, 38, 40)。38は赤褐色を呈する部分と青灰色を呈する部分がある。 **土師器甕** (114図39)。長胴の甕である。

3) 焼土遺構 (第115図, 図版24)

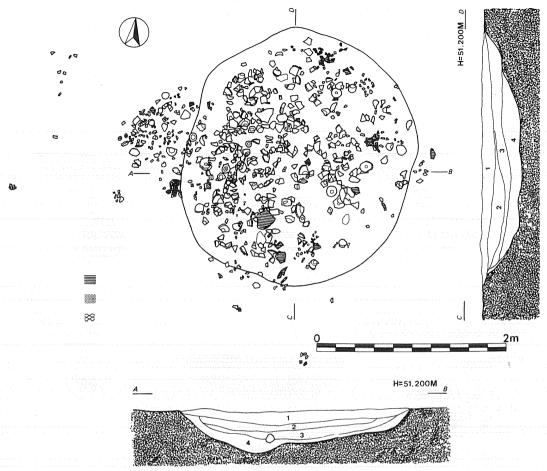
径約1.0~2.0m前後の範囲で丸く焼け、上部に土師器杯、甕などの破片が数点から20点前後 散在する遺構である。カマドである可能性もあるが、プランの上ではっきりカマドとわかるも のはなかった。S X19 (115図) などがそれである。

4) その他の遺構内出土遺物(116図1~9)。

本遺跡出土の平安時代の遺物は、竪穴住居跡やSK16土址から出土した遺物でほぼ代表される。ここでは他の土址や焼土遺構などから出土した目ぼしい遺物を略述する。

116図1~3はSK02土塩出土の土師器杯と皿、甕。いづれも赤褐色を呈する。1の底部は回転糸切離しで再調整はない。2は小破片であるが、ていねいな作り。器表面がわずかに剝れて詳細には判らないが、内外面ともヘラミガキされているようである。

4, 5, 7はSX17焼土遺構出土の土師器杯と高台付皿。4, 5は底部回転糸切離しで再調整はない。4は成形時の粘土紐巻上げ痕を明瞭に残している。7は外面は横方向のヘラミガキ, 内面は口縁部横方向,底面不定方向のヘラミガキの後,黒色処理されている。底部切離しは荒れて判らない。



1層:黒色土(10YR外) やわらかく粘性は弱い,遺物包含層であり,また炭化物も少々含む。

2層: " (10YR外) 粘性がなくボソボソしている。遺物包含層,ただし1層よりは出土量が少ない。

炭化物を含む。

3層:黒褐色土(10YR%) 粘性がない。粒子が大きく粘質土壌も含む、遺物も含むが1,2層に比べ少ない。

4層:暗褐色土(7.5YR¾)ボソボソしていてしまりがなく,粒子が荒い。混入物は見られない。

第111図 SK16土址

6 はS K04焼土遺構内出土の薬壺形土器。赤褐色を呈する土師器で、底部は回転糸切離し。 両調整はなく、焼成良好である。

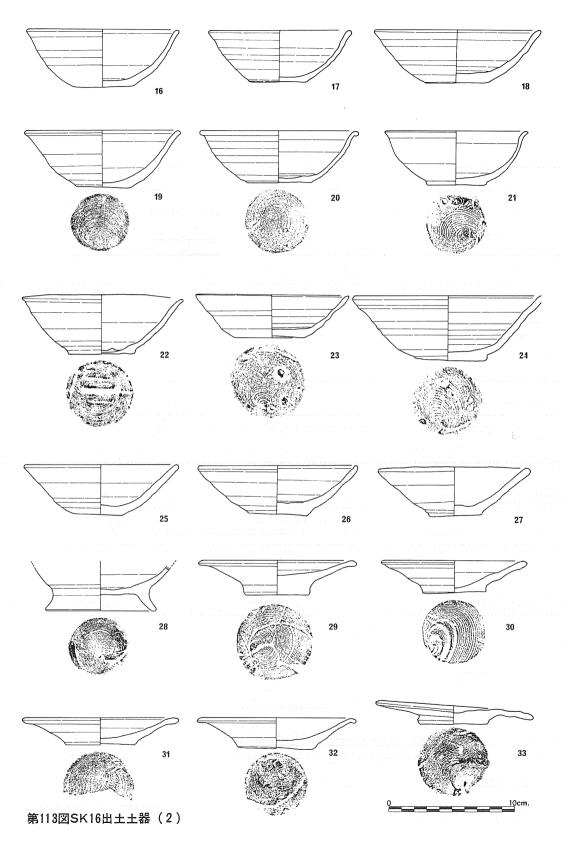
8 は S X 28焼土遺構出土の皿。口縁部の一部に黒色の油っぽい煤状炭化物が付着している。 灯明皿であろうか。

9 は S K 01 焼土遺構出土の須恵器甕肩部破片。内面のアテ板痕には特に文様はできていないが凸凹した痕跡は明瞭である。

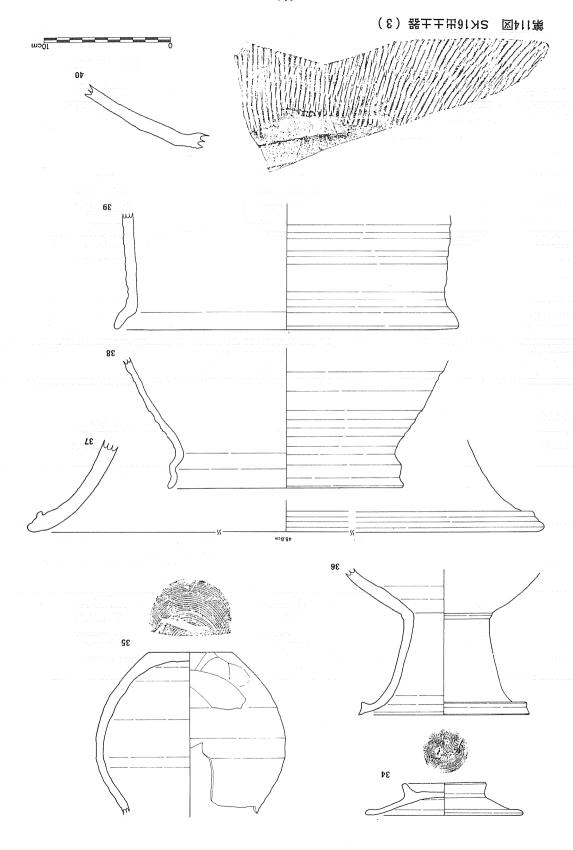
- 112 -

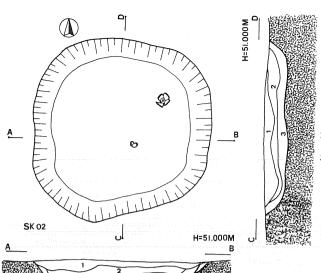
SK16出土土器(1)

第112図



— 113 —



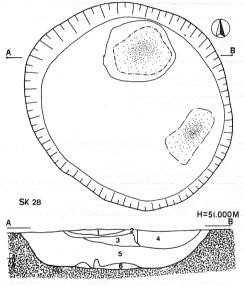


1層:黒 褐 色 土(10YR¾) ボソボソしわずか に砂質,遺物,炭化物を含む

2層:黒 色 土(10YR火) 粒子が細かくパサ パサ,1層よりも遺物を含く含む。

3層:極暗褐色土(7.5YR%)粒子粗く砂質,遺

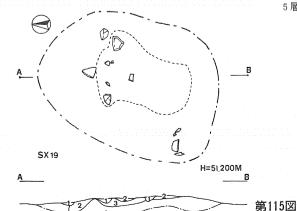
物を含まない。



- 1. 明褐色土(7.5YR%)焼土,硬くしまり遺物はなし。
- 2. 暗褐色土(10YR%) 硬くしまり良し,遺物はなし。
- 3. (10YR%) 2層より軟かく粘性若干あり,遺物なし。
- 4. 暗褐色土(10YR¾) 軟かく粘性なし、わずかに砂質。 5. 黒褐色土(10YR¾) 軟かくボソボソ、土師器片を含む。
- (7.5YR¾)ボソボソ,遺物を含まない。

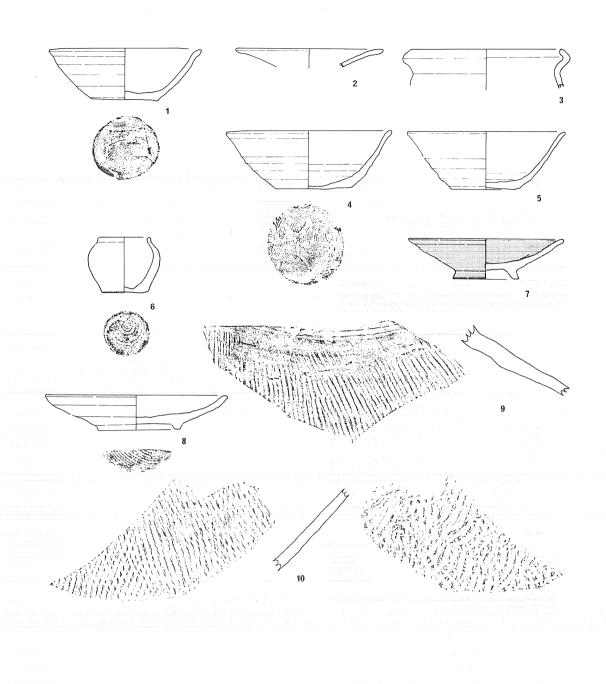
1層:黒 色 土 (10YR火) 硬くボロボロ,遺物を含む。 2層:黄 褐色土 (10YR火) 強い焼土。

3層:明赤褐色土(5YR%)強い焼土,硬くしまっている。 4層:黒 褐 色 土(10YR %) 若干の遺物と砂利を含む。 (10YR¾) 少し粘性あり。遺物は含まない。

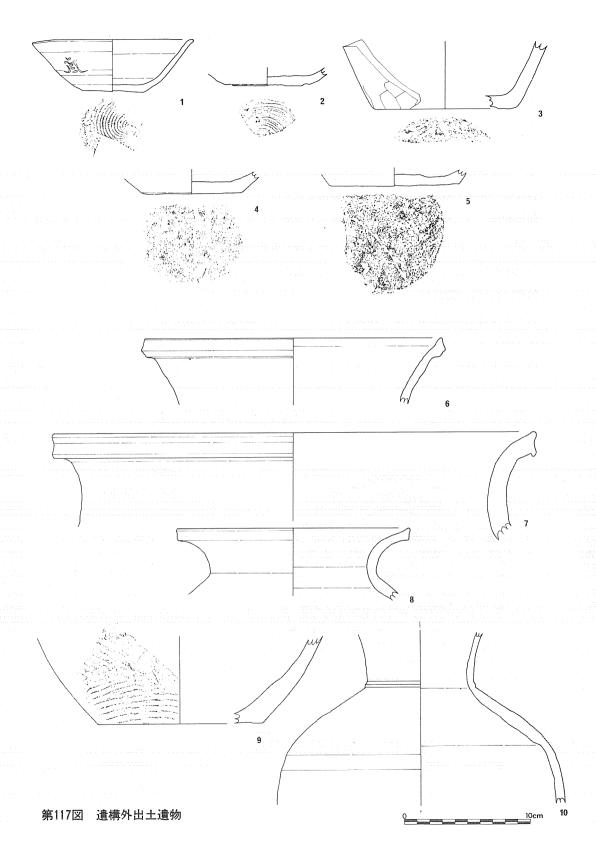




SK02, SX19, SX28土址, 焼土遺構







5) その他の遺構外出土遺物 (117図10~12, 118図)。

主に絶対量の少ない須恵器, 緑釉を示した。

118図1, 2は須恵器杯である。両者とも底部回転糸切離し。再調整はない。1は調査区の 北西約 150mの地点で表面採集したもので、胴部に図のような墨書がある。字は解読できない。 3~5は壺の底部。いずれも底には砂粒が多く付着している。

6~9は甕。

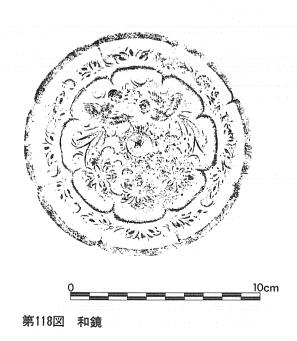
10は壺。頸部と肩部との間に一条の隆線がめぐる。

緑釉陶器 (117図11, 12)。緑釉陶器が2点出土している。11は高台付の皿,12は高台付の 杯と思われる。11の胎土は暗い感じの灰色で浅い鶯色の釉がかかっている。12の胎土は暗い感 じの灰色で内外面には透明感のある深緑色の釉がかかっている。

和鏡(118図, 図版33)

53年度の範囲確認調査の際、和鏡が出土している。曲物の入れ物に入って出土したというが詳細は判らない。

瑞花双鳥八稜鏡である。鏡背文様の表出は良く、水田中からの発掘品としては遺存状態も非常に良好。縁は蒲鉾式の膨側高縁で、界圏は板状式の段圏(八葉圏)である。鈕座は蓮華座鈕で素鈕が付く。鏡背文様のうち内区は上部に尾長鳥と思われる二羽の鳥が左右に向かい合い。



下部には三つの花が対称形に配される。丹念な箆使いであり、鋳型がそれほど磨耗しない段階で鋳出されたものと思われる。なお各部の法量は以下のとおりである。 径12.4cm。内区径8.1cm。重さ331.8g 厚さ、鈕部6.83mm 内区1.37mm 界圏部4.11mm 外区2.69mm

縁8.39mm

第5章 まとめ

今回の内村遺跡の調査では、調査期間等の制約などから、約2,400㎡を発掘調査したにとどまった。調査の結果、内村遺跡は縄文時代前期中葉、中期中葉、末葉、平安時代後半にそれぞれ利用された複合遺跡であることが判った。特にこの中でも、縄文時代中期末葉と平安時代に属する多くの遺構と遺物が発見された。以下、この2つの時期の遺構、遺物について若干まとめてみたい。

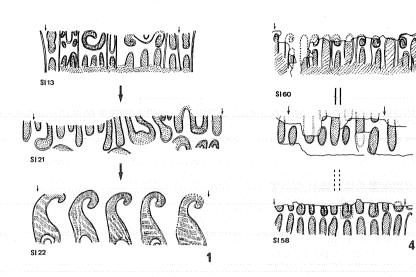
1. 繩文時代中期末葉の住居跡について

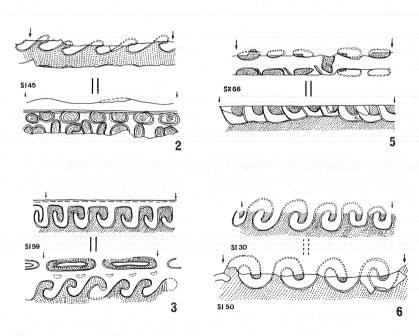
今回発見した縄文時代中期末葉の竪穴住居跡は15軒で、この他に竪穴住居跡に付随していたものと考えられる複式炉14基、土器埋設炉2基がある。竪穴住居跡はその平面規模により3種に分けられる。大きなものは径8 m前後、中位のものは径4~5 m、小さなものは径3 m前後である。竪穴住居跡と複式炉(以下住居跡群という)についてまとめると以下のようになる。

- ①住居跡群は自然堤防的な微高地先端部とその周辺に占地する。全体として東~南東側の開 く馬蹄形を呈する。
 - ②住居跡の平面形は円形ないし隅丸方形のものが主体となす。
 - ③規模には大きく分けて3種類ほどある。
 - ④壁溝のあるものと、ないものがある。
- ⑤主柱穴は不明なものもあるが、4本主柱のものが最も多く、規模が大きくなるにつれ、本数が増える。
 - ⑥床面は地山が砂利層であることが多いことから貼床としたものが多い。
- ⑦住居跡群には切り合いのあるものもあり、(古)SI13→SI21→SI22(新)、(古)SI37→SI52(新)、(古)SI23→SI33(新)、(古)SI45→SI30(新)、(古)SI56→SI50(新)などが考えられる。また、この切り合いの関係などからして少なくとも数期の住居群の変遷が推定できよう。
 - ⑧炉は複式炉で、炉端(C部)は住居跡の壁に取り付く。
 - ⑨炉の軸線方向は、住居跡の中心を通る直線上にあることが多い。
- ⑩炉は大きく4つに分類できる。(第4章,第1節,2を参照)。これらは遺構間の切り合いからⅡb類からⅡa類への変遷も考えられるところであるが、一様ではなく、現在のところ明確な時期差を表わすものとは言えないようである。

2 縄文時代中期末葉の土器について

内村遺跡出土土器は縄文時代中期末葉のいわゆる大木9,10式土器に比定し得るものが主体





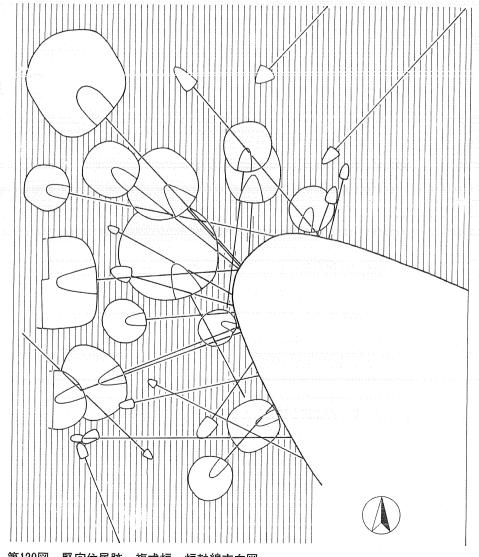
第119図 炉跡埋設土器展開模式図

を占める。竪穴住居跡内の、あるいは単独に発見された複式炉に埋設されている土器も全てこの時期のものである。

119図は、それらの埋設土器のうち、遺構間に切り合いがあったり、1つの炉に二重に埋設されていたりした精製深鉢形土器の展開模式図である。太い矢印は古→新を表わし、=は二重埋設されていた土器、…はほとんど同じ文様の施されているものを表わしている。

3 複式炉の軸線方向から見た住居跡の分布について

120図は、住居跡内に於ける複式炉の位置が、集落内に存在すると予想される「広場」方向を向くと推定されるため、その軸線の走行状況を表わしたものである。これによると、推定「



第120回 竪穴住居跡, 複式炉, 炉軸線方向図

広場」は南東に開く楕円形を呈する。また、ほとんどの軸線方向はこの「広場」に集中するが SI34、46、49、56などは、これとは大きくはずれるか、全く逆方向を取ることがわかる。 これらの炉(住居跡)が住居跡群の中でも最も端部に位置することは暗示的である。

4 出土石器について

ここでは遺構内から出土した石器を除いた石器で、明確に前期のものとわかる石槍 2 点を除いたものについて述べる。

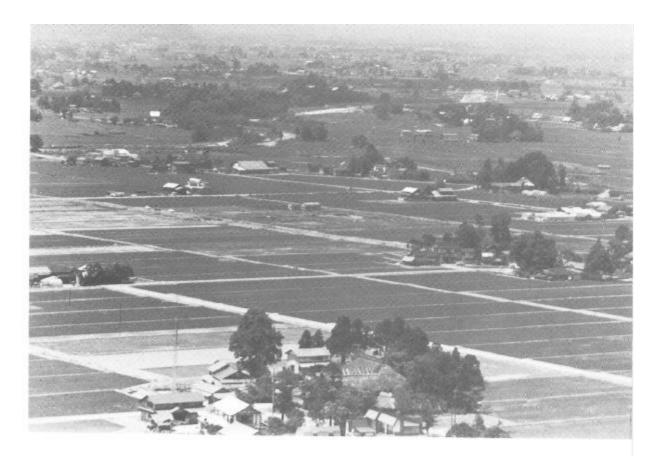
遺構外出土石器は総数284点である。このうち掻器が8種類146点で全体の51%を占める多さである。この掻器のうち7,8類は細長いブレイド,あるいは剝片の一方の長辺に刃部を作出したものである。この石器の特徴は打撃面を上にして石器を見て,最も高い陵線が右にある場合は左辺に刃部があり,左に陵線がある場合は右辺に刃部が作られていることである。これは前者が右きき,後者が左ききの人が使用した石器であると考えられる。

5 平安時代後半の土器群について

平安時代の遺構であるSK16, SI08, 10などから出土した土器群はその出土状況から見てほぼ同時期のものと考えられる。これらの土器群の特徴をまとめると以下のようになる。①須恵器の絶対量が非常に少なく、特に杯は全体でもほんの数点しかない。②土師器杯は全て色調が灰黄~にぶい黄橙色を呈し、底部回転糸切離しで再調整のないものである。③口縁部が大きく外に折れ曲り、浅い皿が比較的多い。④黒色処理された土器には、ていねいな再調整の施されているものが多い。

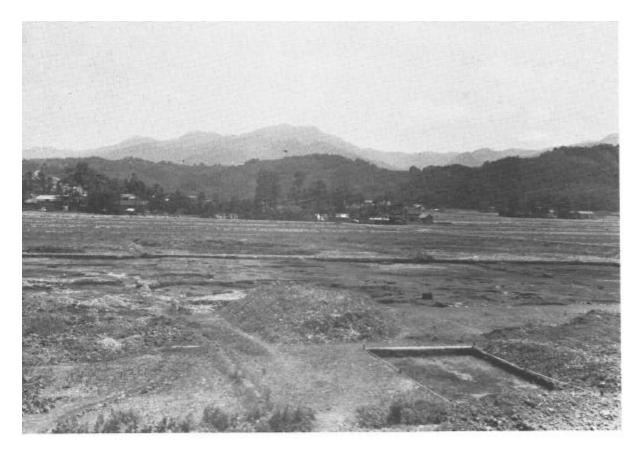
以上、今回の内村遺跡の発掘調査結果のいくつかをまとめてみたが、今後に数多くの問題を残したものとなった。縄文時代中期末葉に関しては、遺跡の立地がこの時期以前とは大きく変わっており、今後の分布調査等でも、このことについては充分な注意が払われねばならないことを教えてくれた。本遺跡では、集落内に存在すると予想される土坑、墓域などが同時に調査され得なかったことが返す返すも残念である。

平安時代に関しては、県内でも数少ない緑釉陶器や和鏡の出土など、払田棚跡に近い位置にあることとも合わせて、多くの問題を提起した遺跡であると言える。





図版1 上 遺跡遠景(南東▶) 下 調査前の遺跡(南▶)





図版 2 上 調査区近景 (西▶東) 下 遺構全景 (南▶)



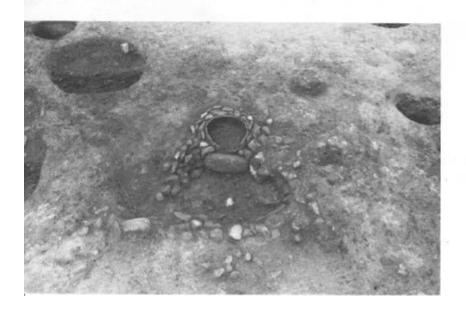


図版 3 上 遺構群近景 (東▶) 下 SI 13竪穴住居跡 (南東▶)



図版 4 上 SI 12炉 中 SI 13炉 下 SI 21炉

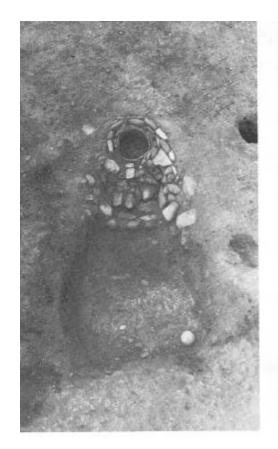








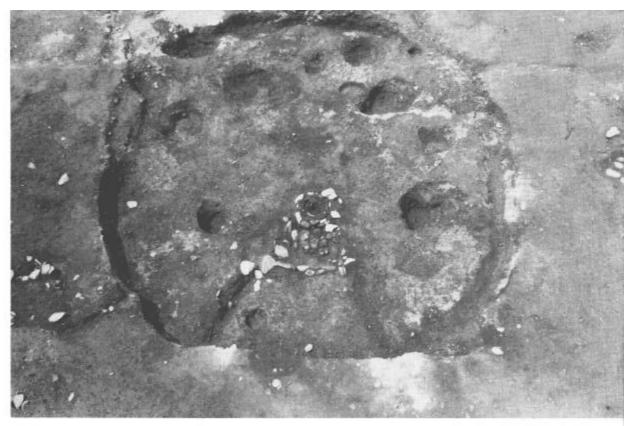
図版 5 上 SI 21, 22竪穴住居跡 (南東▶) 下 SI 22竪穴住居跡 (南東▶)

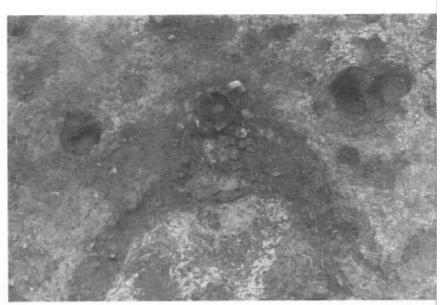




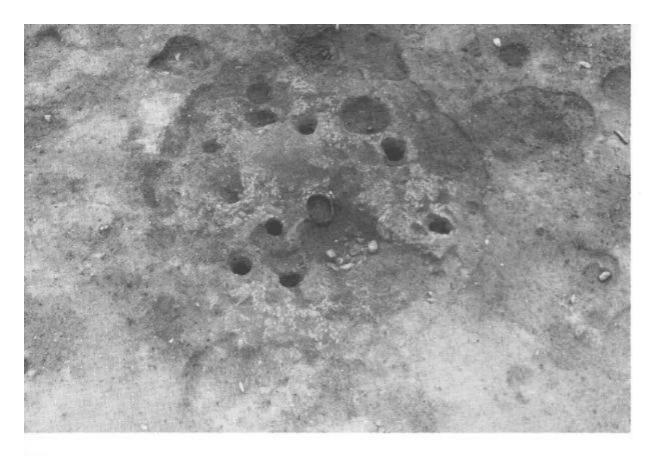


図版 6 上左 SI 22炉 上右 SI 29炉 下 SI 22炉





図版7 上 SI 23竪穴住居跡 下 SI 23炉







図版 8 上 SI 30竪穴住居跡 下左 SI 31炉 下右 SI 30炉



図版 9

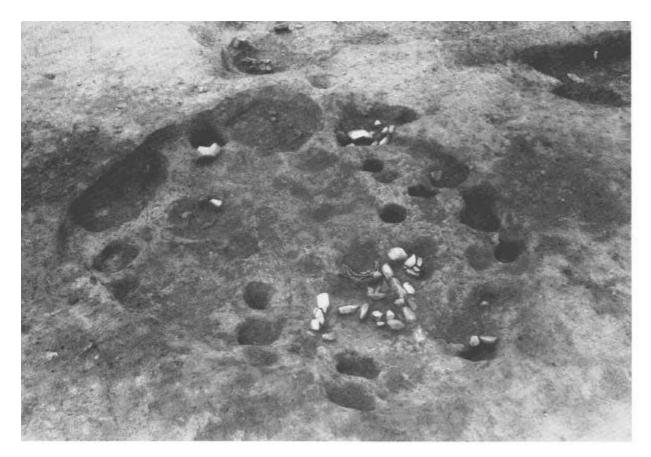
上 SI 33炉

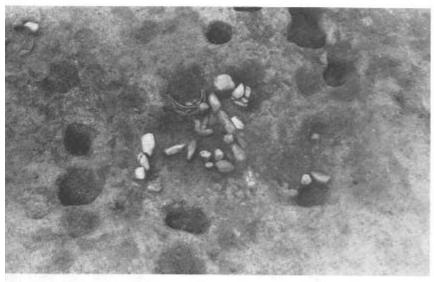
中 SI 33炉

下 SI 34炉









図版10 上 SI 35竪穴住居跡 下 SI 35炉



図版11

上 SI 37

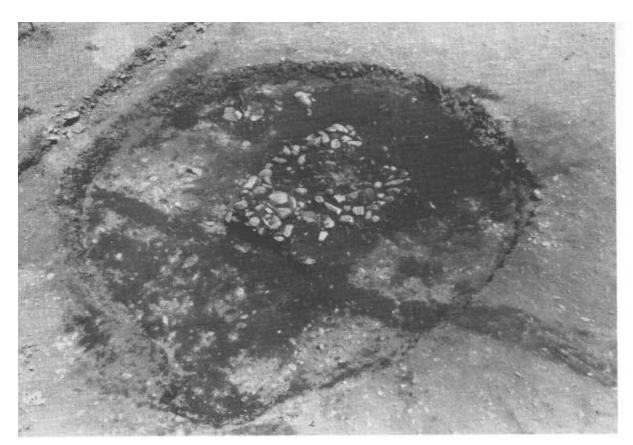
竪穴住居跡

中 SI 37炉

下 SI 39炉

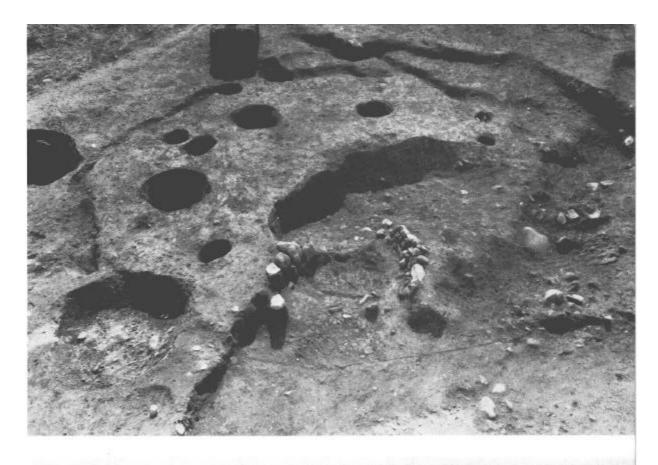








図版12 上 SI 39竪穴住居跡 下 同 上



図版13

上 SI 40

竪穴住居跡

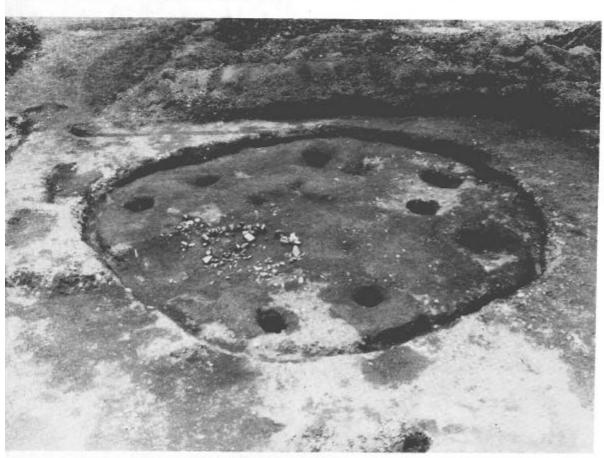
中 SI 40炉

下 SI 45炉

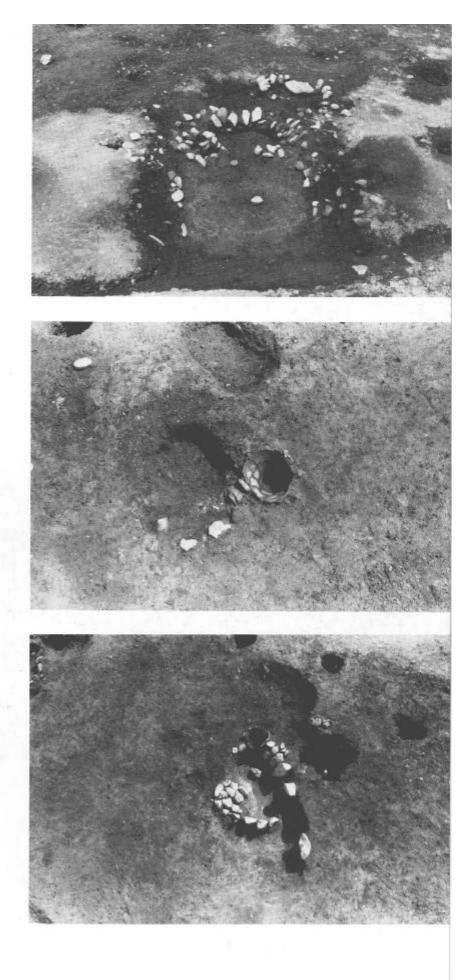




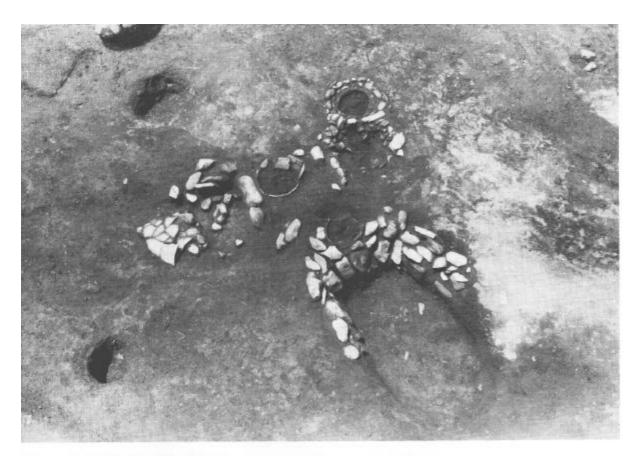


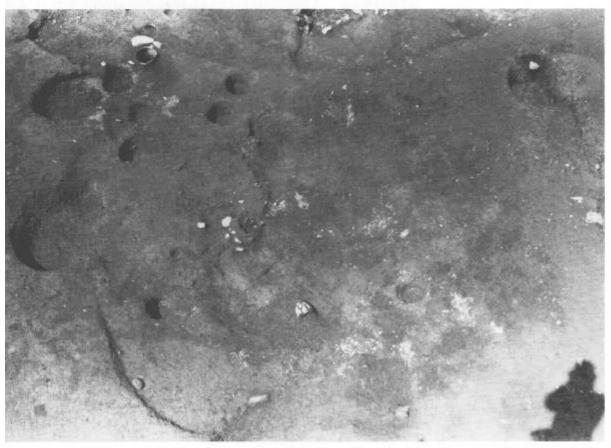


図版14 上 SI 46炉 下 SI 47竪穴住居跡



図版15 上 SI 47炉 中 SI 49炉 下 SI 53炉

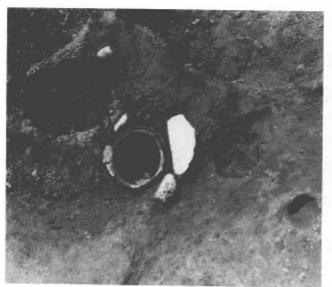


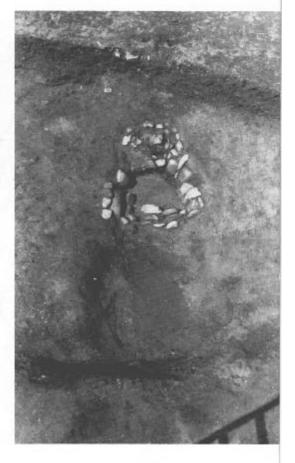


図版16 上 SI 50, 55, 56炉 下 SI 5秒炉 公等等









図版17 上 SI 52炉 下左 SI 58炉 下右 SI 52炉







図版18 上 SI 54炉 中 同上 下 同上

-

.



図版19

上 SI 59

竪穴住居跡

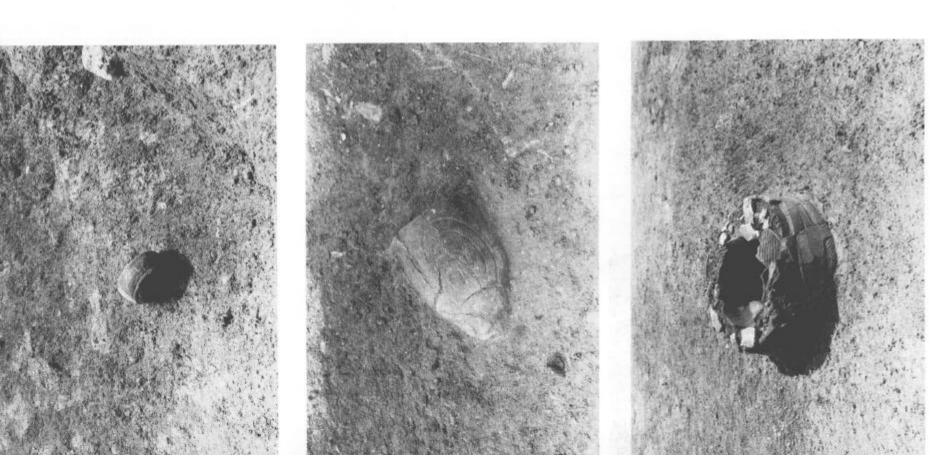
中 SI 59炉

下 SI 60

竪穴住居跡





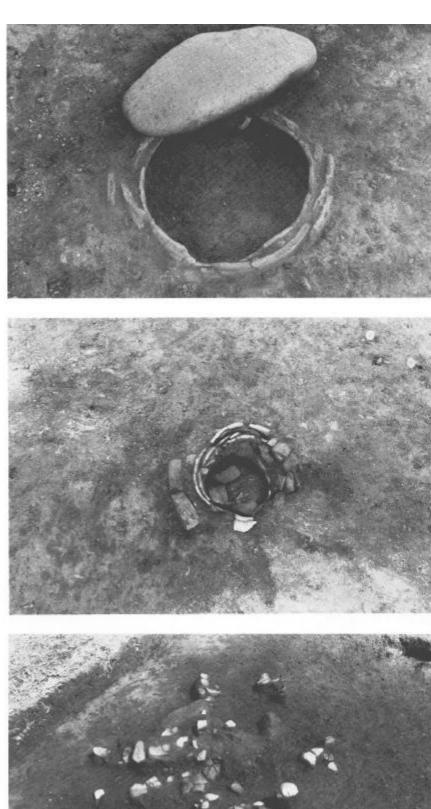


6



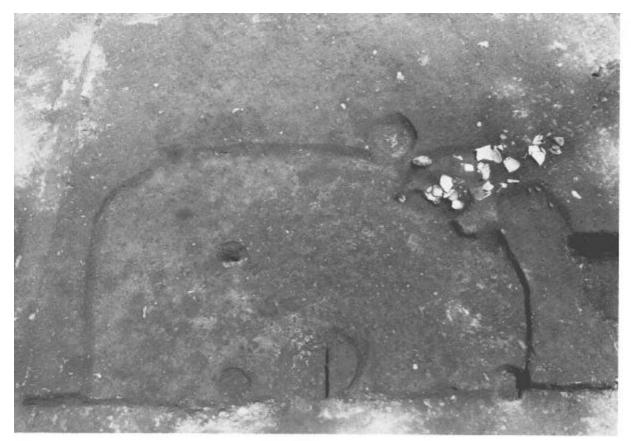
SI 40遺物出土状況 図版20

S151 同 上 SX66埋設土器



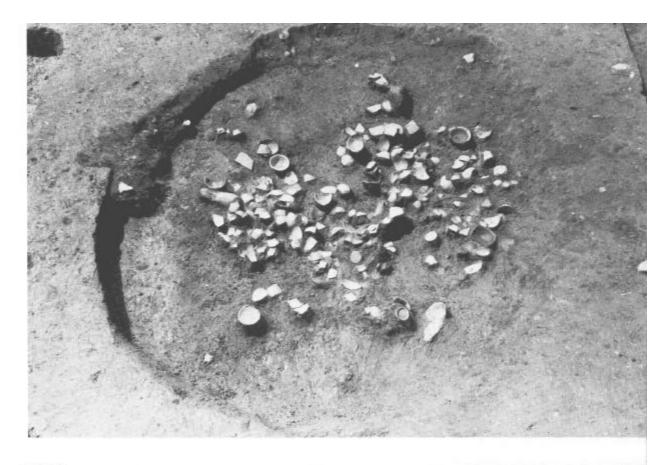


図版21 SI 69炉 SI 10カマド





図版22 上 SI 08竪穴住居跡 下 SI 08カマド



図版23

上 SK 16土堀

中 SK 16

検出状況

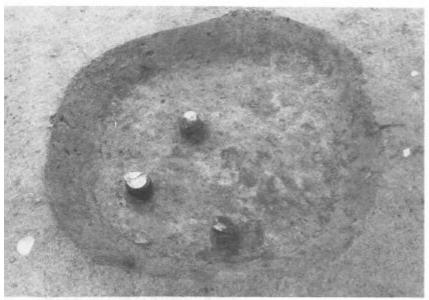
下 SK 16

遺物出土状況



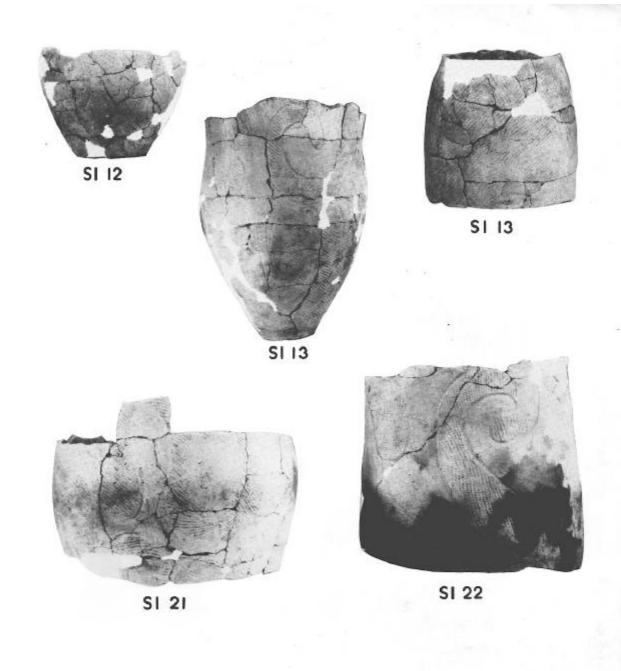






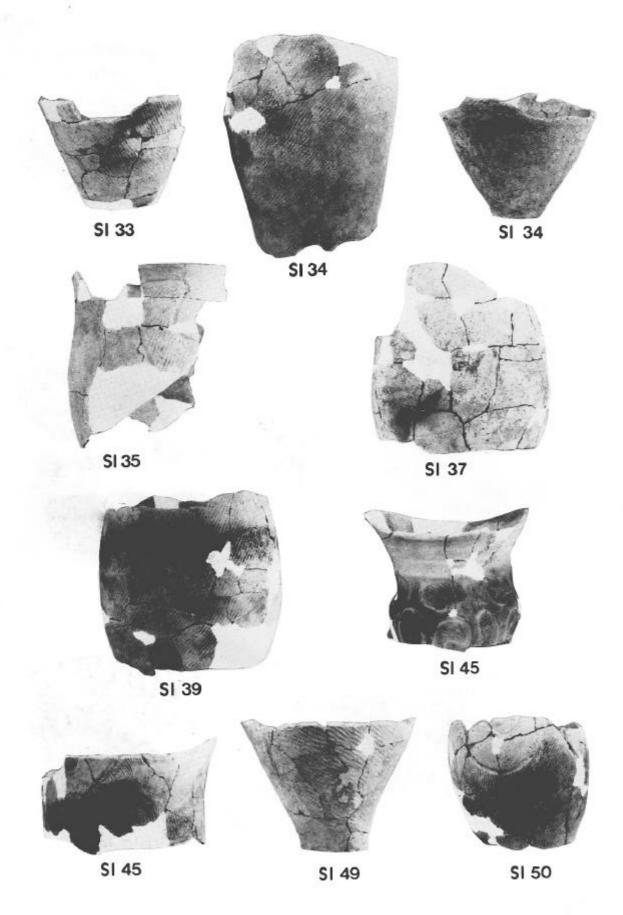


図版24 上 SK 16遺物出土状況 中 SK 02土堀 下 SX 17焼土遺構



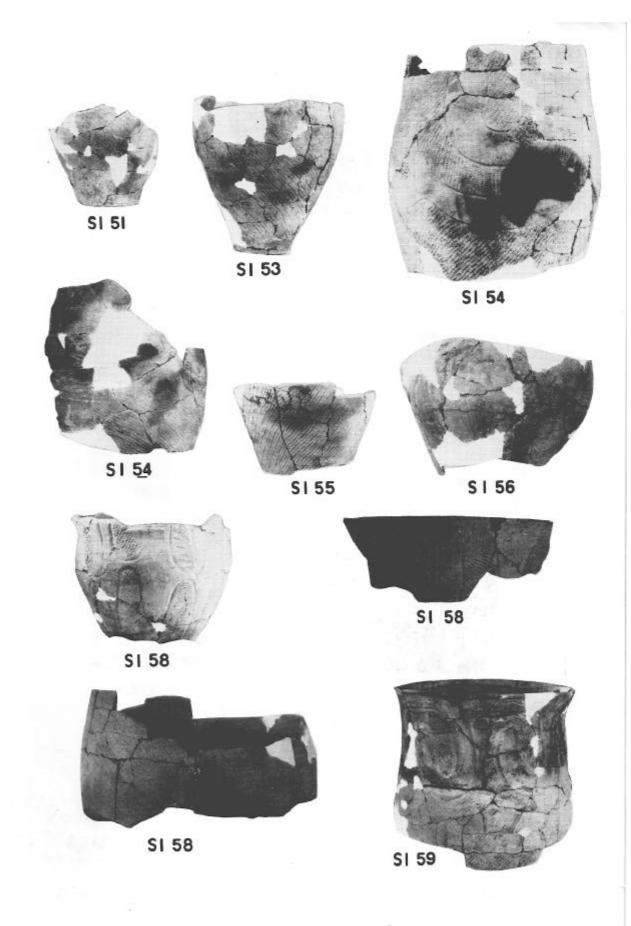


図版25 竪穴住居跡、炉埋設土器

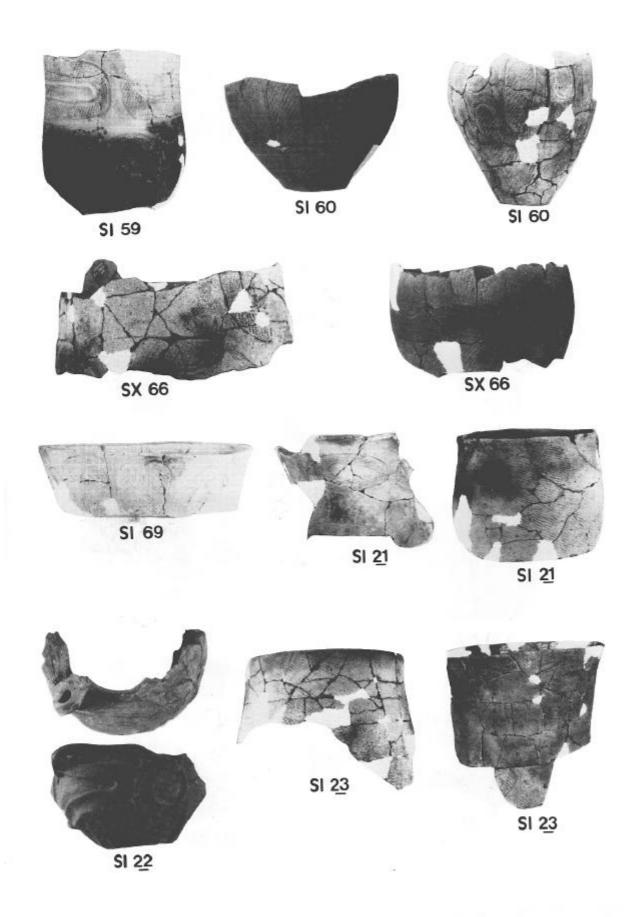


図版26 竪穴住居跡炉埋設土器

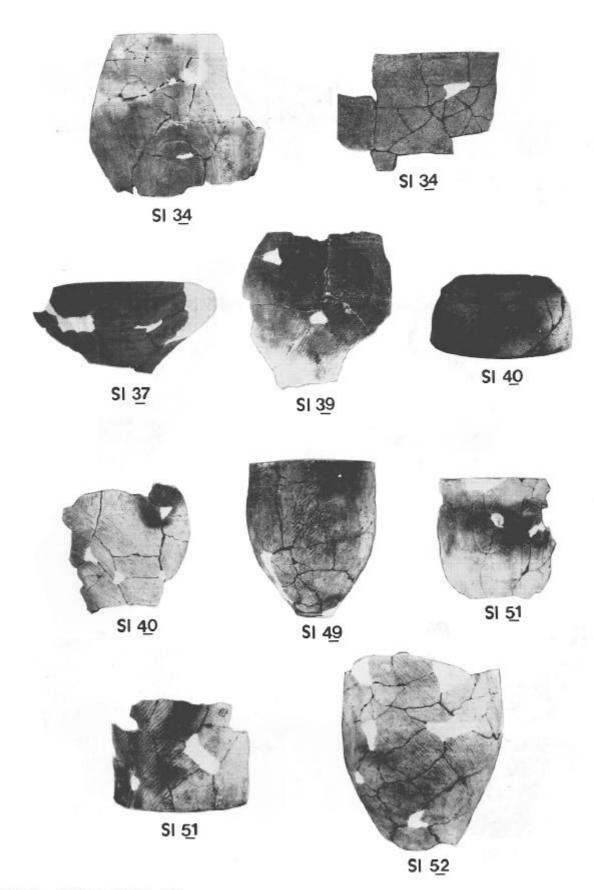
1



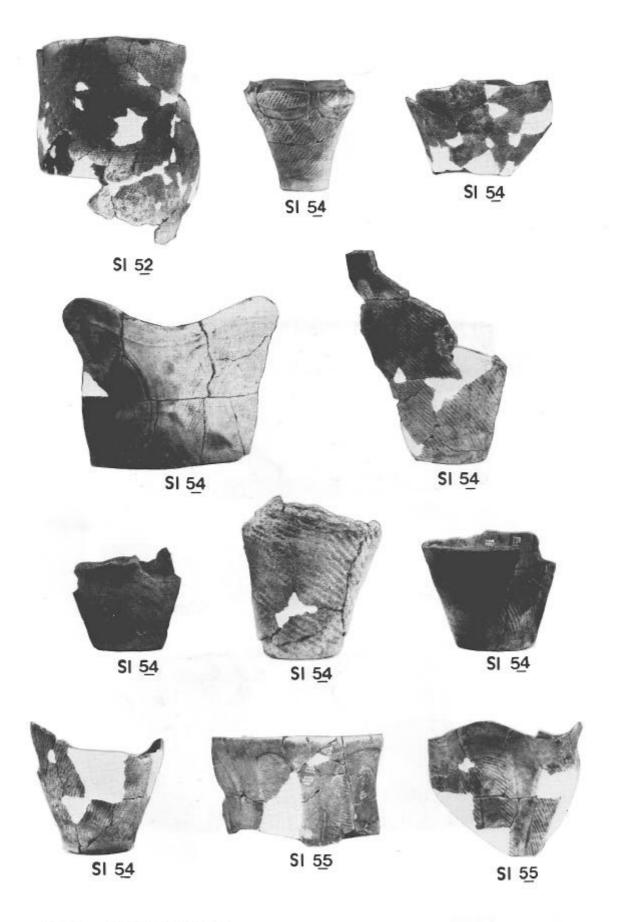
図版27 竪穴住居跡炉埋設土器



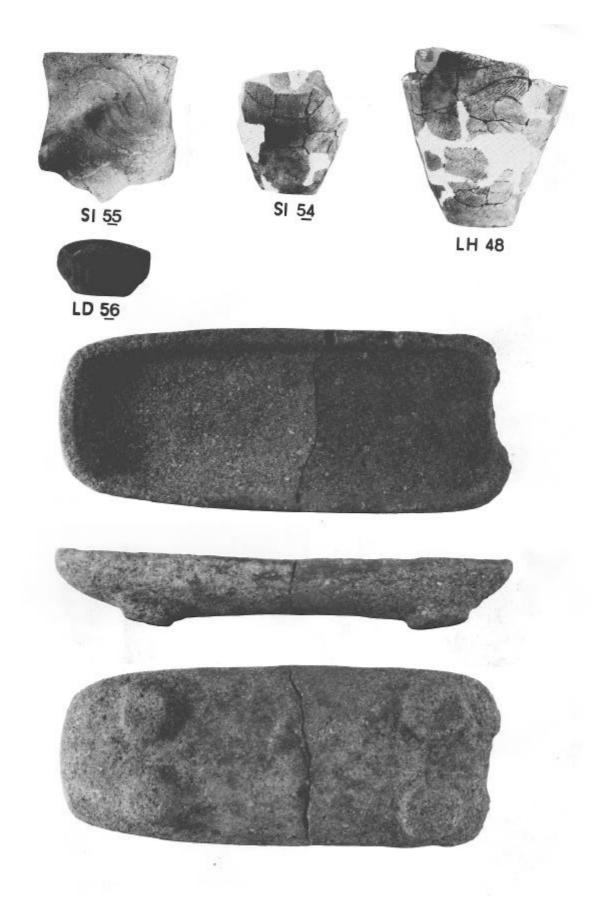
図版28 竪穴住居跡埋設土器、出土土器



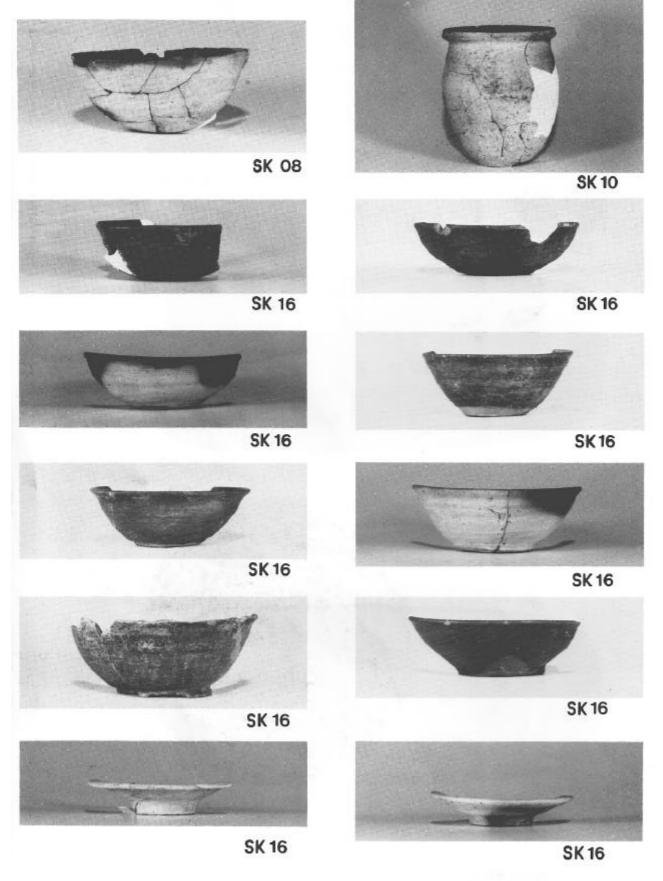
図版29 竪穴住居跡出土土器



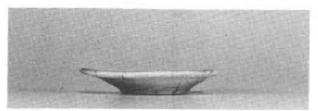
図版30 竪穴住居跡出土土器



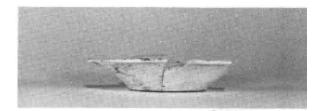
図版31 竪穴住居跡出土土器、石皿



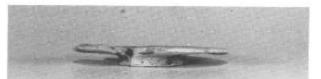
図版32 平安時代の遺物(1)



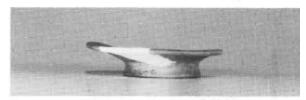
SK 16



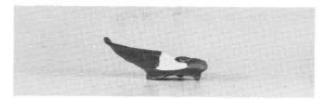
SK 16



SK 16



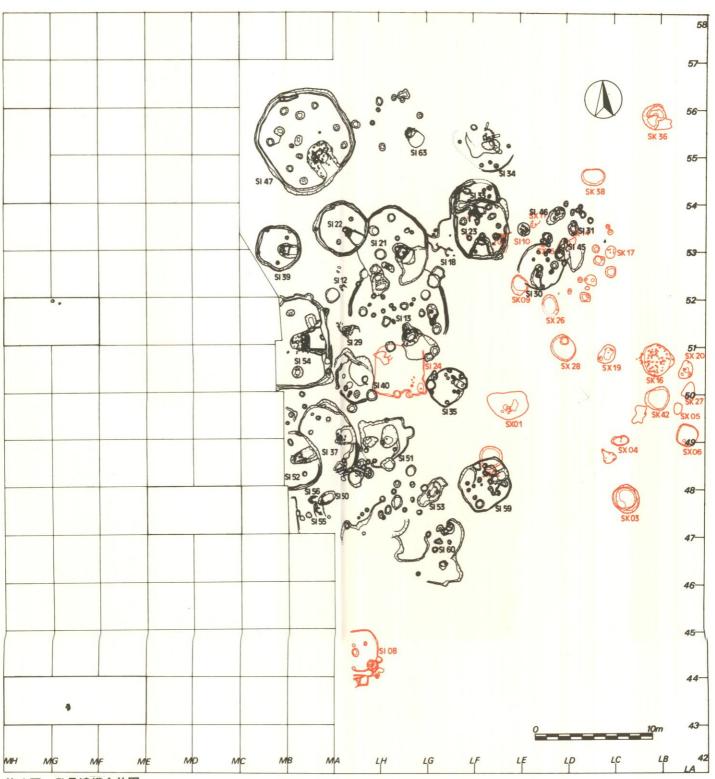
SK 16



SK 17



図版33 平安時代の遺物(2)



第4回 発見遺構全体図